

第9回



川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

大切なことを、
川からいっぱい学んできました!!

活動記録



開催日

2009年9月5日[土] ▶ 6日[日]

受付 11:45～、開会式 12:15～

受付 8:30～

開催場所

主会場 ▶

中国新聞社7Fホール

広島市中区土橋町7-1

主催 ■ 第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま実行委員会

共催 ■ NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

後援 ■ 国土交通省、文部科学省、環境省、中国地方整備局太田川河川事務所、広島県、広島市、広島県教育委員会、広島市教育委員会、(財)河川環境管理財団、子どもの水辺サポートセンター、(財)リバーフロント整備センター、(社)日本河川協会、(財)河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、(社)中国建設弘済会、太田川流域振興交流会議、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、(株)デオデオ

協力 ■ 広島大学大学院国際協力研究科、広島経済大学、福山平成大学、中国・地域づくり交流会、NPO法人公共空間活用推進プロジェクト、ポップラ・ペアレンツ・クラブ、可部カラスの会、太田川いかだ下りカワニバル実行委員会、ひろしま緑づくりインフォメーションセンター、環境カウンセラーひろしま、広島県山岳連盟

協賛 ■ NPO法人ちゅうごく環境ネット

(順不同)

目 次

■ 大会趣旨	1
■ 大会組織	1
■ 大会日程	4
■ 大会報告	6
第1日 9月5日（土）	
第1部 ● 開会式	6
● 基調講演	11
「野遊びのススメ」 株式会社 モンベル 代表取締役会長 辰野 勇 氏	
● 川に学ぶ学校発表会	16
・ 広島県海田町立海田東小学校	16
・ 広島市立高陽中学校 3年生	22
・ 広島県立広島国泰寺高等学校 2年生	28
● 全国川に学ぶ体験活動発表［ポスターセッション］	36
第2部 ● 水辺夜のイベント	45
第2日 9月6日（日）	
第1部 ● 分科会	46
・ 第一分科会［遊び］	46
川と遊び、学ぶ楽しさを再発見。	
・ 第二分科会［生活］	49
川と生活の関係の理解を深め、豊かな人間性や心の通った人のつながりの醸成。	
・ 第三分科会［環境］	53
川との関わりを深め、大きな自然を育む川を未来に伝えていく社会づくり。	
・ 第四分科会［防災］	54
川の持つもう一つの顔を知り、安全な川との関係の構築。	
・ 第五分科会［賑わい］	61
川と人が共存する文化と賑わいの空間の創造。	
● 分科会報告・全体会	64
● 未来へのメッセージ	69
「川に学ぶ持続発展型教育」 広島県海田町立海田東小学校 校長 金沢 緑 氏	
● 閉会式	75
第2部 ● エクスカーション① 世界遺産航路	77
● エクスカーション② ひろしま川祭り	78
アンケート結果	79
おわりに	80
■ 資 料	
実行委員会規約	81
大会チラシ	83
大会当日プログラム	86
報道記事	90

大会趣旨

■ 目 的

太田川流域を中心に、「川に学び・活かす」をキーワードにした「流域環境の保全や環境教育の実践・推進」の活動や「都市・農山村環境」の改善に関わる活動をしている団体（市民団体、NPO法人、国、地方自治体、企業など）が一堂に会し、その活動を発表・意見交換することによって、他の団体の活動状況や手法を学び、川での活動の安全管理について再確認して今後の自らの活動の糧とするとともに異分野交流や行政と市民団体のパートナーシップ、地域連携、流域連携による活動を促進し、「川に学ぶ体験活動・RAC」を「広げ」「高める」ことを目的とします。また、社会一般に広く、「川に学ぶ」社会構築の必要性を訴え、人と川との距離感を縮めることを目的とします。

加えて太田川下流域では川に学ぶ体験活動の「水環境を繋ぐ」を5つのテーマで討論会（分科会）を開催し、今後の活動に活かすとともに、会場となる太田川の下流域の特徴や流域団体の個性を活かし、世界遺産である原爆ドームから厳島神社をつなぐ川と海を結ぶ・世界遺産航路で広島を観光し楽しむエクスカージョンを行います。

■ 広島での全国大会の柱（総合テーマ）－川に学び川を活かす－

・「川に学ぶ」社会をめざして

川と遊び・川と生活・川と環境・川と防災（安全安心）・川の賑わいの5つをキーワードとする

・太田川流域を舞台に広島の川体験の集大成にする

・全国や広島で川活動実践をしている参加者との交流

・広島らしい場所・内容・「川に学ぶ社会」を未来に向けてのメッセージとする

・エクスカージョン「世界遺産航路 原爆ドームから厳島神社」「ひろしま川祭り」

・広島から「川に学ぶ社会をめざして」についてのメッセージを発信する

■ 開催日

平成21年9月5日（土）～6日（日）〔1日目 12：15～21：00／2日目 9：00～18：00〕

■ 開催場所

メイン会場：9月5日（土）〔中国新聞社ホール701会議室・706会議室CONE〕

9月6日（日）〔中国新聞社 会議室 703・704・701・706・707〕

体験会場：元安川、基町環境護岸

大会組織

【主 催】 第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま実行委員会

【共 催】 NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

【後 援】 国土交通省、文部科学省、環境省、中国地方整備局太田川河川事務所、広島県、広島市
広島県教育委員会、広島市教育委員会、(財)河川環境管理財団、子どもの水辺サポートセンター
(財)リバーフロント整備センター、(社)日本河川協会、(財)河川情報センター
NPO法人 自然体験活動推進協議会、(社)中国建設弘済会、太田川流域振興交流会議、中国新聞社
NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、エディオンWEST

【協 力】 広島大学大学院国際協力研究科、広島経済大学、福山平成大学、中国・地域づくり交流会
NPO法人 公共空間活用推進プロジェクト、ポップラ・ベアレンツ・クラブ、可部カラスの会
太田川いかだ下りカワニバル実行委員会、ひろしま緑づくりインフォメーションセンター
環境カウンセラーひろしま、広島県山岳連盟

【協 賛】 NPO法人 ちゅうごく環境ネット

（順不同）

■ 実行委員会名簿

	氏 名	団 体 名	役 職	備 考
実行委員長	瀬川千代子	エコロジー研究会ひろしま	事 務 局 長	
副 委 員 長	藤吉洋一郎	NPO法人 川に学ぶ 体験活動協議会	代 表 理 事	
委 員	阿部 徹	国土交通省中国地方整備局 太田川河川事務所	所 長	
委 員	森川 泰雄	広島県土木局 土木整備部河川課	課 長	
委 員	片平 靖	広島市都市活性化局	局 長	
委 員	中越 信和	広島大学大学院国際協力科	教 授	
委 員	小谷 寛二	福山平成大学健康スポーツ科	教 授	
委 員	山下 雅彦	同 上	講 師	
委 員	浅野ジュン	中国・地域づくり交流会	事 務 局 長	
委 員	隆杉 純子	ポップラ・ペアレンツ・クラブ	代 表	
委 員	山根 進	NPO法人 会員公共空間 活用推進プロジェクト	理 事 長	
委 員	平山 康弘	NPO法人 川に学ぶ 体験活動協議会	総務部会長	NPO法人 鶴見川流域 ネットワーキング理事
委 員	森山 利夫	エコロジー研究会ひろしま	幹 事	
委 員	正本 大	エコロジー研究会ひろしま	幹 事	

■ 運営委員会名簿

	氏 名	団 体 名	役 職
委 員 長	森 山 利 夫	エコロジー研究会ひろしま	幹 事
委 員	向 田 隆 史	中国地方整備局太田川河川事務所計画課	課 長
委 員	浜 田 建 史	中国地方整備局太田川河川事務所計画課	専 門 員
委 員	下 川 英 明	広島県土木局土木整備部河川課	事業調整監
委 員	香 川 寛 治	広島市都市活性化局観光交流部水の都担当	課 長

	氏 名	団 体 名	役 職
委 員	高 野 正 徳	広島市都市活性局観光交流部水の都担当	主 幹
委 員	有 田 八 郎	エコロジー研究会ひろしま	副 会 長
委 員	柴 田 壮 太 郎	エコロジー研究会ひろしま	幹 事
委 員	山 根 進	N P O 公共空間活用推進プロジェクト	理 事 長
委 員	保 光 義 文	広島環境サポーターネットワーク	代 表
委 員	斉 藤 隆	NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会	事 務 局 長
実行委員長	瀬 川 千 代 子	エコロジー研究会ひろしま	事 務 局 長
委 員	山 下 雅 彦	福山平成大学健康スポーツ科	講 師
委 員	浅 野 ジ ュ ン	中国・地域づくり交流会	事 務 局 長
委 員	正 本 大	エコロジー研究会ひろしま	幹 事
委 員	隆 杉 純 子	ポップラ・ペアレンツ・クラブ	代 表
委 員	徳 納 武 使	太田川いかだ下りカワニバル実行委員会	事 務 局 長
委 員	寺 本 克 彦	可部カラスの会	事 務 局 長

■ 事務局名簿

	氏 名	団 体 名	役 職
事 務 局 長	有 田 八 郎	エコロジー研究会ひろしま	副 会 長
事務局次長	森 山 利 夫	エコロジー研究会ひろしま	幹 事
事務局次長	塚 田 忠 則	エコロジー研究会ひろしま	幹 事
事 務 局		エコロジー研究会ひろしま	

大会日程

[第1日] 9月5日(土)

第1部

- 11:45～ ▶ 受付 [中国新聞ホール]
- 12:15～ ▶ 開会式 [中国新聞ホール]
- 12:45～ ▶ ガイダンス [中国新聞ホール]
話題：NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会について
- 13:00～ ▶ 基調講演 [中国新聞ホール]
演題：「野遊びのススメ」
講師：株式会社 モンベル 代表取締役会長 辰野 勇 氏
- 14:00～ ▶ 川に学ぶ学校発表会 [中国新聞ホール]
発表者：広島県海田町立海田東小学校
[川と緑の海田東小物語]
広島市立高陽中学校 3年生
[奥迫川のホタル生育調査]
広島県立広島国泰寺高等学校 2年生
[オオサンショウウオ保全は水辺を守る～遺伝子研究と遺伝子音楽～ (2008日本ストックホルム青少年水大賞受賞)]
コーディネーター：一ノ瀬飛鳥
コメンテーター：広島大学大学院国際協力科 教授 中越 信和
- 15:00～ ▶ 全国川に学ぶ体験活動発表[ポスターセッション] [中国新聞ホール]
- 17:00～ ▶ 総括・案内
- 17:10～ ▶ 第一部終了の挨拶

第2部

- 17:45～ ▶ 水辺の交流会 [ウェルシティ広島フォーシーズン]
- 18:30～ ▶ 水辺夜のイベント [原爆ドーム前 元安川テラス]
[船上コンサート] 安芸楽団 (キーボード、フルート、ボーカル)
津軽三味線・篠笛
吉和神楽団／演舞：八岐大蛇
[船上シネマ] 映画上映：シネマ・キャラバン
2作品上映
- 21:00～ ▶ 閉会挨拶

[第2日] 9月6日(日)

第1部

8:30～ ▶ 受付 [中国新聞社 会議室 701・703・704・706・707]

9:00～ ▶ 分科会

- 第一分科会 サブテーマ「遊び」 [701 会議室]
川と遊び、学ぶ楽しさを再発見。
- 第二分科会 サブテーマ「生活」 [703 会議室]
川と生活の関係の理解を深め、豊かな人間性や心の通った人のつながりの醸成。
- 第三分科会 サブテーマ「環境」 [704 会議室]
川との関わりを深め、大きな自然を育む川を未来に伝えていく社会づくり。
- 第四分科会 サブテーマ「防災」 [706 会議室]
川の持つもう一つの顔を知り、安全な川との関係の構築。
- 第五分科会 サブテーマ「賑わい」 [707 会議室]
川と人が共存する文化と賑わいの空間の創造。

10:00～ ▶ 分科会報告・全体会

分科会報告

総括／コメンテーター：福山平成大学 教授 小谷 寛二

11:05～ ▶ 未来へのメッセージ

演題：「川に学ぶ持続発展型教育」

講師：海田町立海田東小学校 校長 金沢 緑 氏

12:10～ ▶ 閉会式

次回候補地代表挨拶

閉会挨拶

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 藤芳 素生

第2部

13:00～ ▶ エクスカーション① 世界遺産航路 [原爆ドーム前桟橋]
定員／40名

エクスカーション② ひろしま川祭り [基町環境護岸]

18:00 ▶ 帰着・解散 [原爆ドーム前桟橋]

大会報告

第1日

9月5日(土)

》》【第1部】開会式

12:15～／中国新聞ホール

■ 開会の挨拶

実行委員長 瀬川千代子

本日、ここ広島市において、「第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま」を開会いたします。

本大会は、全国の流域から太田川流域を中心に、「川に学び・活かす」をキーワードにした流域環境の保全や、「環境教育の実践・推進」の活動、[都市・農山村環境]の改善に関わる活動をしている団体が一同に介し、その活動を発表や意見交換をします。他の団体の活動状況や手法を学び、川での活動

の安全管理について再確認をして今後の自らの活動の糧とし、異分野交流や行政と市民団体のパートナーシップ、地域連携、流域連携による活動を促進し、「川に学ぶ体験活動・RAC」を「広げ・高める」こととし、また社会一般に広く「川に学ぶ」社会構築に向けて人と川との距離感を縮めることを目的としています。

本日はモンベルの会長 辰野 勇氏をお招きして基調講演をして頂く事になりました。心からお礼申し上げます。また各セッションにおきましても、各地域で活躍していらっしゃる活動家、研究者、実践家などの方々の積極的なご参加を心から歓迎し、感謝を申し上げたいと存じます。

2日間かけて、遠くから近くからやってまいりました私達が、皆で思いを熱くし、力を合せてより良いものにしたいと思っています。この全国大会を通して川に、自然環境に想いを熱くし、高め、更に私達がそれぞれに置かれております現場で、元気を与えられて、新たな活動を展開していくことが出来るようなきっかけにしたいと思っています。そのためにもどうぞこの2日間、いろいろな形で一人ひとりが積極的に、主体的に参加していただき、全体を盛り上げていただきたいと心から願っております。たくさんの方によって、この全国大会が企画され支えられて来ました。関係者各位の皆さまに心からお礼申し上げます。

これを持ちまして簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



■ 開会の挨拶

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 代表理事 藤吉洋一郎

全国から集まって2日間にわたる講義や発表、意見交換をします。RACと聞いただけでどんな団体だろうと分かる人は少ないと思います。

「川に学ぶ社会」を全国の子どもたちに広めていこうと、川で安全に遊べるための川の指導者養成を始めて約10年が過ぎました。現在は全国でたくさんのRACリーダーを養成しています。RACリーダー養成の目標は1万人です。さらにこの数字を達成して上を目指して行きたいと思います。

ここ100年の間、川と人々の関わり及び生活は「このようなことでいいのか？」と思うことがあります。「広島は戦争時、原爆が落ちた後の川の様子が記憶に残っている人が多いと思います。東京圏では震災のときにたくさんの人が隅田川に逃げてなくなりました。」

災害以外でも、高度成長期に川はどんな姿をしていたか記憶に残っている人が多いと思います。川は汚れた物の捨て場となり、臭く汚くなってしまい本来いるべき魚や水生昆虫がいなくなってしまうしました。

人々はいけないと気づき、本来のきれいな川に戻そうと努力してきました。川の環境と治水、利水から環境を守るということは大事な役割だということで、地方自治体でも川に対していろいろな取り組みを行っています。

「今、私たちは何をすればよいか？」水を汚さないことはもちろん、川に入って川の素晴らしさを体験しようではありませんか、川を知ることはとても大切なことです。

静かな川で水量の少ない川でも、大雨が降ると川の様子が一变してしまい、とても危険になります。最近は地球温暖化のせいで亜熱帯のような雨の降り方で突発的な集中豪雨になります。危険からどのようにして身を守ればよいのか、危険や災害に備えて、川の体験をすることで川の危険や怖いことだけを知るのではなく川の楽しいことを共有することが目標です。

今日は参加者の皆さんの体験活動を通じて新しい取り組みにしたいと思います。

■ 来賓挨拶

国土交通省河川局河川環境課 安田 吾郎 様

今日は全国大会おめでとうございます。

今年7月に国土交通省の河川局から水難事故マップが公表されました。いろいろな川で過去にどのような事故があったのかHPで簡単に見られます。

「危険」だからと言って川に近づかないと川からいろいろなことが学べなくなってしまうです。

先日、川の改修工事をして多自然型川作りを行った川に行った時に、「一番大事な川ガキがない！」と言われました。その川は以前、コンクリート三面張り護岸で汚い川でした。近所に住んでいる親子さんたちの時代は川から遠ざかっていた頃に育った年代でした。川は、川と上手に付き合う



ことで川からいろいろなことを学ぶことができます。今回の大会で一人一人の体験を皆さんと共有していただき、地域に持ち帰って川の活動をさらに広めていただきたいと思います。

実行委員の方々のご協力に感謝しております。

RACの皆さんのこれからの発展を願っています。

■ 来賓挨拶

広島県 土木局長 大野 宏之 様

広島県は太田川や江の川などの大きな川に恵まれ、古代から住民と川は良い関係を持ち川からたくさんの恩恵を受けてきました。

広島では川は環境学習の場などいろいろと活用しています。今回は太田川流域や様々な活動の発表や、川についての分科会など有意義な活動があると思います。

広島県では平成19年より「NPO法人ひろしまアダプト」と連携して活動を進めています。去年は河川の美化活動に多数の人が集まりました。このような活動を今後も広げて行きたいと思います。



■ 来賓挨拶

広島市都市活性化局長 片平 靖 様

太田川は環境省から名水100選に選ばれており、また、太田川は6本に分かれて市街地を流れていることから、広島市は「水の都」と呼ばれています。流域では河川清掃や川での環境学習、映画上映など市民の活動が盛んです。

本市では平成16年から水辺のオープンカフェを社会実験として行っており、今後も川の魅力を生かした街づくりを進めることにしています。

このように川が市民に愛され生活に結びついている「水の都ひろしま」において、本大会が開かれることは大変意義深いことであり、皆様方にも広島の川の魅力を存分に味わっていただきたいと思います。



■ RACの説明

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 事務局長 斉藤 隆

RACと聞いても何だか分からない方が多いと思います。簡単にRACの活動を説明します。後半では「川の流れ体験キャンペーン」の報告をさせていただきます。

RACは川で楽しい体験活動を安全に実施しようということを目的としています。去年は神戸

での事故を始め沢山の水難事故が起きました。それを受けて、現在、全国で水難事故防止の取り組みが行われています。

RACには指導者養成を行う上で、5つの理念を掲げています。1つ目にある「遊び、学ぶ」という理念はその順番が大切だと思います。2つ目の理念である「感動する心」が川の体験活動から生まれれば、川を大切に作る心が自然と芽生えると思います。昔の子どもたちは川や貯水池で遊びながら泳ぎの勉強をしていました。上級生が下級生に泳ぎを教えていました。3つ目の理念である「人と人とのつながり」は、そのような上級生と下級生の関係の中で培われてきたのだと思いますし、これからもそのような関係を川の活動を通じて構築できると思います。高度成長期に経済効率が優先されましたが、社会基盤がある程度整備された今、4つ目の理念である、「川と人が共存する社会づくり」は我々の今後の課題です。最後の理念である「安全」は、川で楽しく活動する際の大前提となります。安全確保はとても重要でありRACの活動の総力を結集して行っていきたいと思います。

「川に学ぶ社会へ向けて」という河川審議会の小委員会答申が平成10年に出されましたが、実際に子どもたちを川に連れて行く川の指導者がいないので、その指導者づくりを行うためにRACが設立されました。自然体験活動の体験がある人の方が道徳観・正義感があるという調査結果が文部科学省から出されていますが、このデータは川での活動が人間の成長にとって大切だということの裏づけとなっています。

RACリーダーは指導者の入口であります。今までにRACリーダー講座を2,591名の方が修了しました。RACリーダーのカリキュラムは室内の座学8時間、実習が13時間の21時間と現場重視の内容となっています。そのリーダーのカリキュラムのうち指定の4時間分の講座が基礎講座となります。水辺の体験活動を半日程度で学ぶ「リスクマネジメント講習」や、1日で行う「レスキュー講習」も行っています。「レスキュー講座」では身近な物で救助する方法も学びます。また、「Eボート指導者講習」や川での長期キャンプ、川の指導者が集まる「地域ミーティング」も行っています。またRAC会員になると保険にも加入できます。昨年の全国大会は熊本で行いました。全国大会は川の活動をする人たちの情報交流の場として、川に学ぶ社会を普及する機会となっています。また毎年行われるRACフォーラムは指導者等がスキルアップする場です。

今回の全国活動事例発表は地元広島から3団体、全国から7団体が発表します。それぞれの発表内容を、敢えて今回の4つのテーマに分類することになります。但し、各団体は一つのテーマだけに絞って活動しているわけではないので、いくつものテーマに関連する活動発表となりますので予めご理解下さい。



■ 全国一斉1万人・川の流れ体験キャンペーン報告

RAC広報部 会長 原田 秀夫

こんにちは。「NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会」の広報部会長の原田秀夫と申します。いつも九州熊本県の白川を中心に川の活動を行っています。

さて、河川での水難事故を少しでも減らすには、川から離れるのではなく、川の危険箇所や身の守り方を日ごろから学ぶことが大切です。そこで、皆さんも記憶に新しいと思いますが、平成20年度に水難事故が多発したことで、国土交通省の研究会で、日ごろから地域住民同士で危険箇所を知らせるなど地域の人たちの関係の構築を行うなど防災に関する地域力の大切さが明らかになりました。

そこで、水難事故が多発する夏休みに入る前に国土交通省は「河川水難事故防止週間」を設定することにし、RACはこの期間国土交通省と連携して7月1日～8月31日まで「全国一斉1万人・川の流れ体験キャンペーン」を行いました。

このキャンペーンは全国のRAC関係者が親や子どもなどたくさんの人にライフジャケットを付けて川の流れ体験をしてもらい、川の安全利用を社会にアピールしようということで行いました。また、河川清掃も同時に行い、自ら川をきれいにしようという思いも達成されました。もちろん川の流れ体験の前に事前に川の安全講習も行いました。たくさんの団体から賛同があり全国で1万人…には届きませんがそれに近い人数の人たちが川の流れ体験を行いました。この時期には、続々と報告も上がってきています。今日は報告が早くも来ている団体の活動を紹介します。

- ・宮崎県の実川水系北川で活動を行っている「ゆりかご保育園」です。
- ・山形県の最上川水系の置賜物川ではRACリーダーが中心になって楽しい川の体験をしています。ライフジャケットを着て川で流れる体験が癖になる楽しさのようです。
- ・熊本の矢作川では川の合流地点で水温の違いや色の違いが体験できるようです。
- ・奈良県では高校生が川の流れ体験をしました。ゴミ拾いや石ころ拾いなども行っています。
- ・東京の二子玉川周辺での川の流れ体験も行いました。近くのグラウンドでラグビーをする子どもたちがたくさんいたようですが、その子どもたちも参加したようです。東京の多摩川で泳ぐなんて…。近所の人にはみな思っています。昔の多摩川は汚くて臭い川でしたが、ここ数年でとてもきれいな川になりました。これからも、もっと地域の人たちが川の体験活動をしていただけるようになると良いと思っています。

時間がとても短いので少しの団体しか紹介できないのが残念です。RACのホームページで川の流れ体験の報告を掲載予定です。是非、掲載されたらご覧下さい。また、引き続き来年もこの活動を行う予定ですので、みなさんよろしく願いいたします。



最初のプログラムとして、自然をフィールドとした遊びの達人である、(株)モンベル代表取締役会長の辰野勇氏に「野遊びのすすめ」として基調講演をして頂きました。

減多にきくことのできない体験談に一同引き込まれたあっという間の一時間でした。

■ 野遊びのススメ

株式会社 モンベル 代表取締役会長 辰野 勇 氏

モンベルという会社を知っていますか。1975年に大阪で1人で立ち上げて現在は従業員が1,000人規模の会社になりました。

今日は、川の話だけではなく山岳会の方も来場していただいているので山の話をしてながらバックグラウンドの話として「野遊び、アウトドアのすすめ」ということで話をしたいと思います。



私は、昭和20年に大阪で生まれました。いわゆるアラカン世代です。大阪府の小学校では高学年になると金剛山に連れて行かれますが、私は元来虚弱体質で好き嫌いが多くて体が弱く学校からも山登りについてはストップがかかり、悔しい思いをしました。

小学生のときに山男に憧れていつか登山家になろうと思いました。今となっては、山や川で培ってきた経験が会社経営に役立っています。中学校に入ったら金剛山にハイキングに行き、リーダーシップをとって山に登りました。高校1年生の時、国語の教科書にハインリッヒ・ハーラーというオーストリアの登山家の書いた「白い蜘蛛」を読み、ヨーロッパの三大北壁の一つとも呼ばれるアイガー北壁の登頂をしようと思いました。そして同時に職業は山に関する仕事に就きたいとも思いました。

26歳のときアイガー北壁に登る機会が得られました。高校1年生のときにアイガー北壁に登ろうと思い家に帰って何をしたかというと、お金がないと何も出来ない状態でしたので、アイガー北壁と書いた貯金箱を作り貯金をしました。本当は10年後に登ろうと思っていましたが、中田氏という10歳年上の素晴らしいパートナーにめぐり合い、2年後にロープを組みました。アイガー北壁に登る前の5年間は濃密な山登りをしました。

ある日、アイガー北壁に登りたいと中田氏に相談しました。当時ヨーロッパに行くのが大変だった時代でしたが、「お前が言うなら行こう！」ということになり、横浜からロシア船に乗ってナホトカまで行きシベリア鉄道でヨーロッパまで2週間かけて行きました。その当時、日本円の国外への持ち出し制限があり、米ドルで500ドルだけだった時代の話です。

アイガーの頂上は3,800メートルあり垂直壁で1,800メートルの高さがあり、ちょうど日本の中国地方の大山に通天閣を載せて海からながめた感じになりとても高い山です。

途中の「死のビバーク」という地点があり、そこでビバークをしました。朝2時に登り始めて

お昼2時頃に「死のビバーク」に到着しました。山男はすごく怖がりで「もし天気が悪くなったらどうしよう。」とか「これ以上登って降りられなくなったらどうしよう。」思案のしどころでしたが、明日天気がよければ次の日に頂上しようということになり「死のビバーク」地点でビバークをしました。

ビバークポイントで登頂の決断をしたのでカメラを持って行きましたが、登頂時の荷物を減らす為に途中で捨て、ロープも2本持っていましたが1本は捨て、セーターも捨て、食料もほとんど捨てました。非常に身軽にしてビバークポイントから一気に氷壁を登って行きました。ちなみに最初に登ったグループは滑落して1名が亡くなり、1名は骨折しています。頂上に立って滑落して死亡した人もいます。頂上は大きな山に見えますが薄っぺらい場所で、北壁から登って南壁で落ちたと言う笑い話のようなことがありました。途中で何度も降りようと思いましたが仲間と励ましあって登って行きました。

頂上から南を見ると三大北壁の一つであるマッターホルンが見えました。今回が終わったら登山はもうやめようと思っていましたが、頂上に着いた途端、「次はあの山（マッターホルン）だ！」という気持ちになっていました。山男の性ですね。

昨年、書き残したサイン帳が出てきました。それには、ハインリッヒ・ハラーの詩が書いてあります。

ハインリッヒ・ハラーのドイツ語の本に我々の名前が書いてありました。我々がアイガー北壁を登頂したのは、彼が登頂してから60パーティ目で、それまでに60名が亡くなっています。生きるか死ぬか2分の1の確立です。当時一緒に登った仲間も何人も山で亡くなりました。当時、死ぬ確率2分の1で非常にリスクの高い山登りをしていましたが、いつまでもこんなことをやっていたらいつかは死ぬと思っていました。そんな時、先輩から勧められて川に移りました。川に移ったきっかけは山でのリスクが高いからですが、結局は同じ危険なことをやっています、カヤックの中に食料やテントを積んで何日も川を下って行きました。川は登らないで下るだけだと思って楽だろーと思っていましたがやはり人のやらないことをやっていました。

ジャングルでは象に乗って歩くのが1番安全で確実です、木が倒れても大丈夫、トラが襲ってきても大丈夫、象が一番強い動物です。

グランドキャニオンのコロラド川では、カヤックに食料を積み、日本人で初めてコロラド川を上から下まで400キロ下りました。今までに3回コロラド川を下りました。ラフトに食料を積み込んで、われわれはカヤックで上から下まで下りました。コロラド川は毎秒1千2百トンぐらいの水量があります、吉野川では毎秒100トンです。コロラド川の特徴としては非常に管理されており、一般市民の旅行は認められていません。当時は旅行の許可を取るのに12から13年待ちでした。許可を待っている間にキャンセルが出たりして、これまでに3回下っています。アメリカ人の友達に便乗して下ったりもしました。1日に川に入れる人間の数を制限しているので環境も守られています。川岸などは砂浜もさらさらで砂漠の真ん中なので霜がおりることがなくテントは不要です。夜中に目を開けると天の川がとてもきれいに見えます。全て下り終わる迄に2、3週間かかり、途中ネイティブの遺跡もありました。川下りを始めると途中で一箇所も逃げるところがないのでやめられません。毎日、新月から満月まで月の満ち欠けが見られる素晴らしい経験を

しました。グランドキャニオンは流れのすごい川と思われませんが、そのようなすごいところは5%ぐらいで後の95%はとうとうと流れる川です。ザーと言う川の音がすると心臓がバクバクします、川の流れのすごいところは巨大な洗濯機に飲み込まれる感じがして上も下も分かりません。途中で投げ出されることもあります。コロラド川の濁流が始まるのは途中のリトルキャニオンからで、上流は澄み切ってとてもきれいな川です。



コロラド川は途中から支流から排出されたミネラル分で濁ってきます。大型バス程度のラフトで下っていきませんが、このようなラフトが立つぐらいのすごい波がたちます。

次に黒部川の話をしてします。黒部はもともと山奥なので山に目が向きます。山があれば川があり、川があれば山があります。いつか黒部川を源流から日本海まで下ってみたいと思って調査していました。川下りの機会があり、40歳のころにヘリコプターで薬師沢の茶屋まで行き、薬師沢から7台のカヤックで川を下りだしました。黒部ダムについては脇を降りてきました。黒部川でカヤックで川下りをしている時、喉が渇くとひっくり返って水を飲みます。それくらい十字峡はきれいな川です。途中で滝が連続していて上からみると川がなくなる感じの落ち込みがあり、約6メートルの落差があります。白竜峡と名づけられたところは15メートルくらいの落差があり、最初見たときには「こんなところをカヤックではくだれない。」と思いました。人間は怖いもので見ているうちに行けそうに見えてきます。いろいろと頭の中でシュミレーションして、カヤックに乗ってやるかやらないかを逡巡していました。「やめよう。」「いや行ける。」頭の中で迷っていましたがオセロゲームのように駒がぱたぱたと裏返ってしまうと、「行ける。」と思った瞬間に絶対に迷わないで行けます。降り始めた直後にパドルが折れましたがパドルは握っていました。あれだけの高いところから落ちたら水の衝撃があると思いましたが、滝つぼは泡だらけなので素晴らしいクッションになっていて6メートルくらい沈みました。起き上がってパドルを入れようと思ったときパドルは3本に折れていました。10メートル先に次の滝があるのですぐに脱艇して仲間にロープで助けられました。

「皆さん、こんなことをやりたい人がいますか？」手を挙げてみて下さい。「2人いますね。200人中2名ですね。」何で命がけで冒険をするのか？ アメリカの心理学者の話では、命がけで人のやらないことをやる人は世の中で0.5%～2%しかいません、それ以外はカウチポテト族と言っています。神様が全人口の中0.5%～2%の人に冒険心を持たせましたが、そのような人たちを「ローディングエッジ」といって人間の限界を超えていく人として神が選んだと言います。医療の世界では華岡青洲（麻酔）、ジェンナー（種痘）、野口英世（黄熱病）などは自らの命を顧みず、奥さんや親をモルモットにして、麻酔薬など命を掛けて開発した人達があります。

一方、北海道の獣医で私の友人の動物学者は「キタキツネ物語」、「子ぎつねヘレン」などの映画を作りました。彼はフィールドワーカーで動物の生態を研究している人です。ある日彼が面白いことを言いました。「ありんこは働き者だと思っているがそうでもないよ。本気で働いているのは20%しかいないぞ、80%がさぼっているよ。」一日中蟻を観察しています。学者はひまだ

なと思いました。蟻の中でさぼっている80%を集めると。また。その中の20%の蟻が働き始めます。逆に働いている20%を集めると80%がさぼりだします。彼は「自然の生態系はこんなものだからさぼっていても怒るなよ。」と言われました。人間は蟻ではないので働かない人をどうやって働くようになるか考えます。戦国時代の一番槍のように報奨をあげるとか、人参を鼻先にぶら下げて働かせることを考えたり。日本人の勤勉さについてはほどほど成功したと思います。

為政者はすべての蟻を100%働き蟻にしたいと思っています。わが国の教育は、そのことについては成功したと思います。日本人は一生懸命、チームワークで働きます。一方で2%の人は白い目で見られたりします。自分が理解できないことを理解しようとしないうことをブラックシープといいます。人のやらないことをする人についてははじめは光が当たりませんでしたが、現在脚光を浴び始めています。こんなことは日本ではまれで、日本はグローバルな世界の中ですごく遅れていると思います。「野遊びのすすめ」でこんな話をするのは全て繋がっているからだと思っています。

人は怖がりだから用意周到になります。私は日帰り登山のときでも雨具を持参します、それがリスクマネジメントだと思います。「怖がりでありながら好奇心をもって危険なことにぶつかっていく事。」このようなことが今日のテーマであると思います。

障害者カヌーの話ですが、奈良の障害者の支援団体の会合に出席をした時に、「ポリオ」という障害を持った人が席までビールを注ぎにきました。彼は歩くこともビールを注ぐこともうまくできません。しかし彼が「カヌーを教えて欲しい。」と言ってきました。彼は木津川できれいなカヌーが下っているのをみて自分もやってみたいと思ったと言います。私はその話にはとても興味をそそられました。ローディングエッジで誰もやっていないからやってみたいと思いました。ボランティアなど美しいことではなく好奇心で、この人が国体とかオリンピックにでたら面白いと考えました。ボランティアなども集まって、今から15年前に河川敷にタープを張ってカヌーを教えていました。暑い日なのに一人の男がタープに入って来ません。「かわいくない」と思いますが、取りあえず船に乗せて、15~20分過ぎて、彼が徐々に近づいてきて大きな声で「自分が障害者ということを忘れていた」と言います。彼は、成田の過激派の一人で、ブルドーザーで埋められて脊髄損傷で車椅子になってしまったそうです。昨日まで自由に歩き回っていた人が急に歩けなくなってしまう、世の中にはそのような人がたくさんいると言います。その瞬間カヌーをやっていて良かったと思いました。

温水プールで障害者カヌーを教えることになりました。中学生ぐらいの男の子で両手がありません。サリドマイドで小さいころ切断しました。右側に腕が1、2センチ出ているだけです。彼が「足で漕げないか？」と言います。取りあえず船に乗せて。パドルを顎ではさんで漕いでみました。車椅子の人は上半身が発達して腕で漕いでしまいがちです。その中学生の子どもにパドルを顎に挟ませると腕では漕げないので体で漕ぐしかありません。腕のある人がその姿を見て教えられました。その中学生はその後ちょっとした瀬はこげるようになり、今では日本障害者カヌー協会の会長であり、モンベル大阪店の店長をしています。

「野遊び」は色々なことを私たちに教えてくれます。「リスクマネジメント」、「好奇心」、「生きる力」などを教えてくれました。

大阪に有名な進学校があって、そこの理事長は府知事選出馬した人で彼は「勉強の出来るやつには共通項がある。」と言っています。それは「集中力」と「持続力」と「判断力」の3つの力があるようです。生きて行く上でもっとも大切な力だと思います。自分はその3つの力はあると思いますが勉強はまったくできませんでした。高校生のときに自分でこの進路を決めたのは単に学力がなかったからかもしれません、しかしその3つの力是人より若干あると思っています。その3つの力をつける方法論は無限にあるとその人は言います。僕は山登りで集中力を学んだと思います。山登りは集中力が持続しないと駄目です、一步間違えば死ぬ瞬間はたくさんありました。

「判断力」はカヌーから間違いなく学びました。六本木ヒルズの弁護士に話をしたら、それよりももっと大切な力は「決断力」だと言います。山登りでもこのまま登り続けるのか降りるのか、即時に判断しなければなりません。神戸大学の先生と話をしたときに会社経営の判断について聞かれました。会社経営について私は7回決断したと答えました。社長業は日ごろ決断を無限におこないます。囲碁や将棋に定石がありますが、「決断」は過去の定石を捨ててあえて困難なことを選ぶことだと思っています。その7回の決断については、次ぎにもしました、お招きをいただいたらお話したいと思っています。



辰野 勇（株式会社モンベル代表取締役会長）

〈プロフィール〉1947年 大阪府に生まれる。

1969年 21歳で、アイガー北壁日本人第2登を果たす。

1975年 28歳で、登山用品メーカー株式会社モンベルを設立。

趣味は、登山、クライミング、カヤック、テレマークスキー、横笛演奏、絵画、陶芸、茶道

〈著 書〉「社長室はアウトドア」（山と溪谷社）、「カヤック&カヌー入門」（山と溪谷社）

「エンジョイカヌーマニュアル」（千早書房） 他

》》 川に学ぶ学校発表会

14:00～／中国新聞ホール

- コーディネーター：元太田川河川こどもモニター 一ノ瀬飛鳥
- コメンテーター：広島大学大学院国際協力科 教授 中越 信和 氏

基調講演に続き、広島大会の特徴でもあります、子ども参加型のプログラムとして、「川に学ぶ学校発表会」を設けました。

小・中・高の代表3校に登壇してもらい、各校の自然体験等の活動等発表してもらいました。コーディネーターとして、子どもの頃エコロジー研究会で実施している「せせらぎ学習塾」で自然体験活動を行っていた、一之瀬飛鳥さんが務め、コメンテーターとして、広島大学国際協力科教授の中越信和氏に発表を総括してコメントしてもらいました。

まずは海田町立海田東小学校の「生き物フレンズ」のみんなによる川の観察に関わる発表です。

■ 広島県海田町立海田東小学校【生きものフレンズ】 「川の緑の海田東小物語」

学校の総合学習の時間に学校の前を流れている川で調査を行っています。

今日は三迫川で、「生きものフレンズ」が調べたことをまとめて発表します。ぼくたちは三迫川の上流から中流、下流に分けて4年生、5年生、6年生で川の調査をおこないました。

源流にはキャンプ場や総合公園などがあり岩がたくさんあります。川に行った日の気温、水温、CODやpHを調査記録しています。水生生物も採取しましたがたくさんの指標生物もいます。上流部は水が冷たくいろいろな生物がいます。

中流部は栃木川が合流したところで東大橋付近です。

この辺りでは家から家庭排水が流れて、汚れた川ときれいな川にすむ両方の生物がいます。

その次は家膳橋と稲葉橋の間で、付近には田んぼが多く、たくさんのカワニナがいます。川底がコンクリートで出来ているので石灰質を好むカワニナが多く生息し、カワニナを餌にするホタルの幼虫もいました。



学校の前の川で、カキ殻の水質浄化をしています。源流では1だったCODの数値が、学校の前の数値は6になっています。カワニナ・スジエビなどの水中の苔を食べる生き物やオイカワがたくさんいます。鴨もこの辺りの草むらで子育てをしています。

昨年は川の流域の4箇所環境を調べました、時期的には6月、7月が水質などが汚れているようでした。水質に大きな違いはあまり見られませんでした学校

の前はアルカリ性が強かったです。

また、みんなで協力してEボート体験をしましたが、思ったよりも水の力が大きかったです。PFDを付けてみんなで川流れ体験もやりました。川の流れに身を任せて流れましたが、この体験で水の楽しさや怖さを知ることができました。

学校の前で放したホタルがいます。将来的には学校の前にはたくさんのホタルが飛ぶようになって欲しいと思います。

Story of Kaita-Higashi Elementary School surrounded by Water and Green

水と緑の海田東小物語

Kaita Town
Kaita-Higashi Elementary School
Friends with living things
海田東小学校「生き物フレンズ」

1



Tochigigawa River Upstream

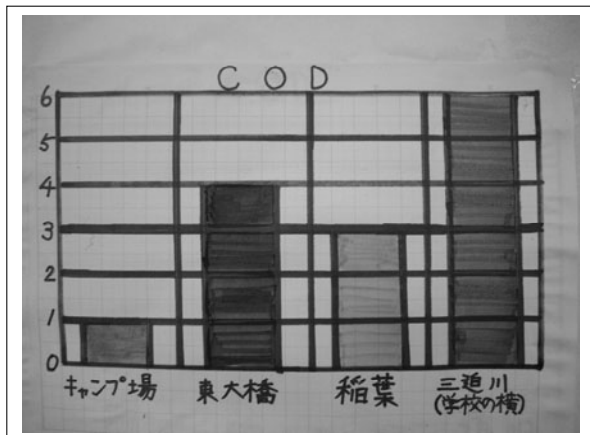
栃木川

Camp site

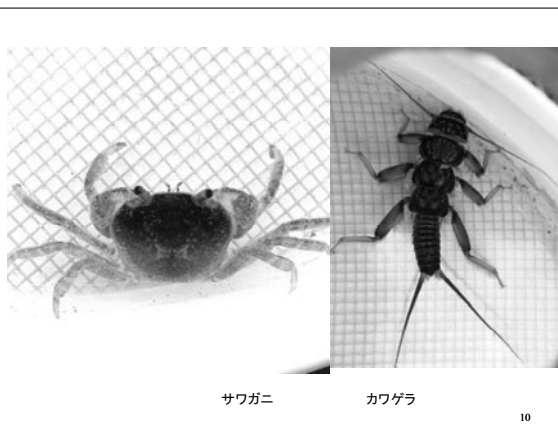
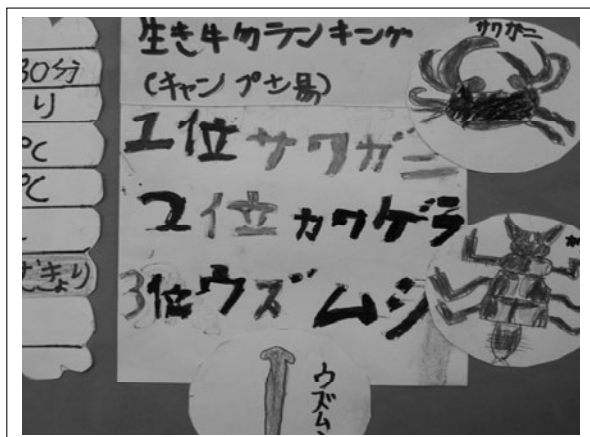


4



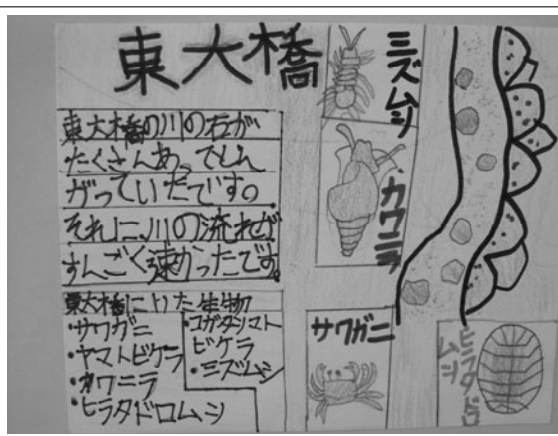


CODや指標生物を調べる



Karatanigawa River Upstream 唐谷川 上流

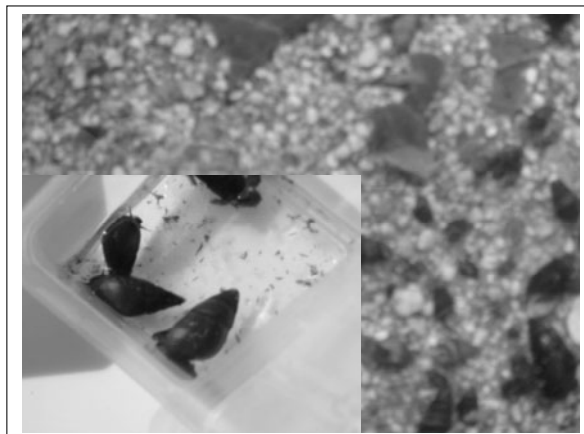
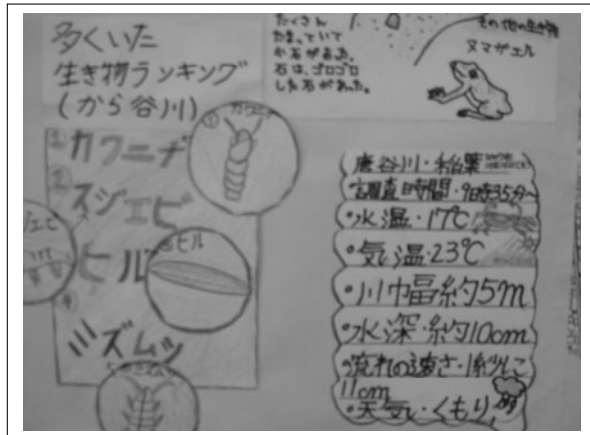
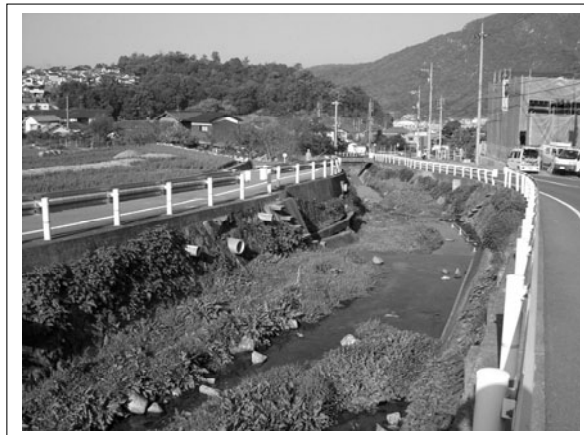
- Around Higashi Bridge 東大橋の近く
- From Tochigigawa River to Karatanigawa River



Karatanigawa River Midstream 唐谷川 中流

- Kanamaru Bridge 金丸橋
- Inaba Bridge 稲葉橋

15



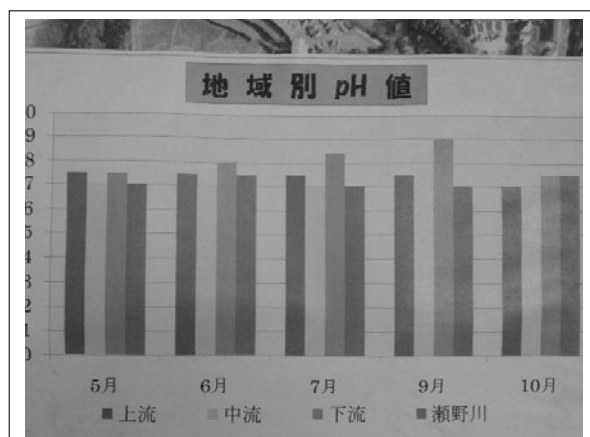
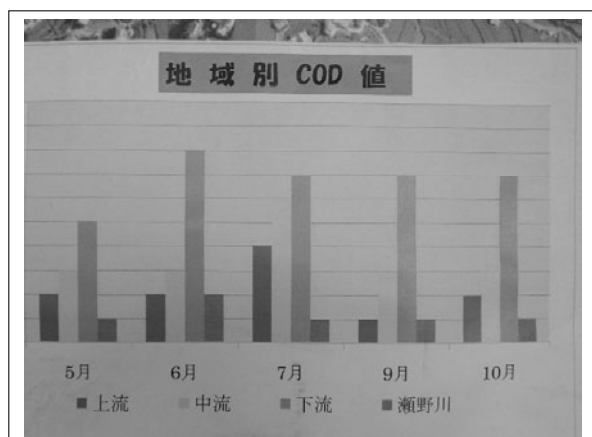
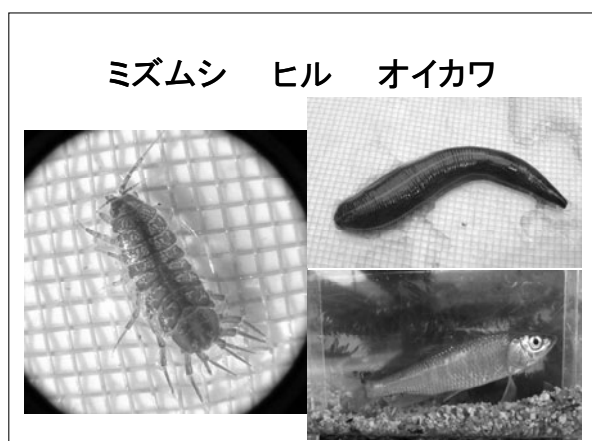
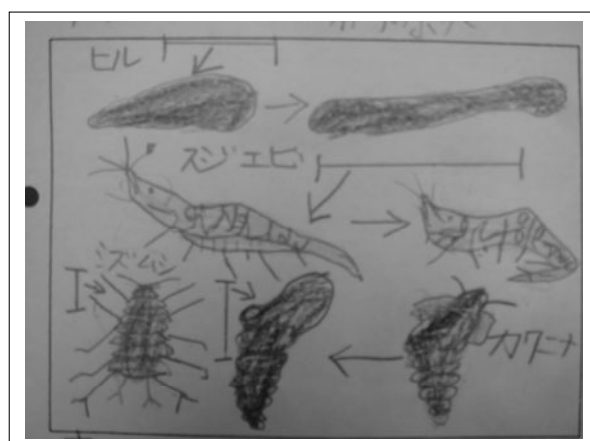
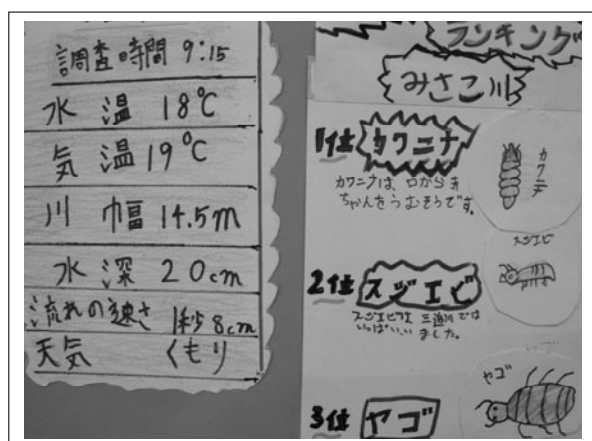
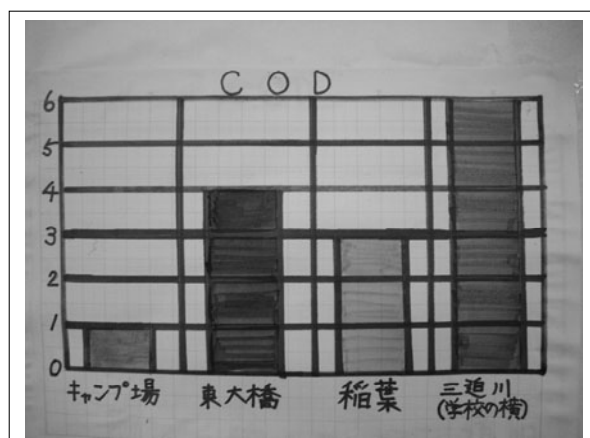
Misakogawa River

三迫川

- In front of the school 学校の前
- Pouring into Senogawa River

20





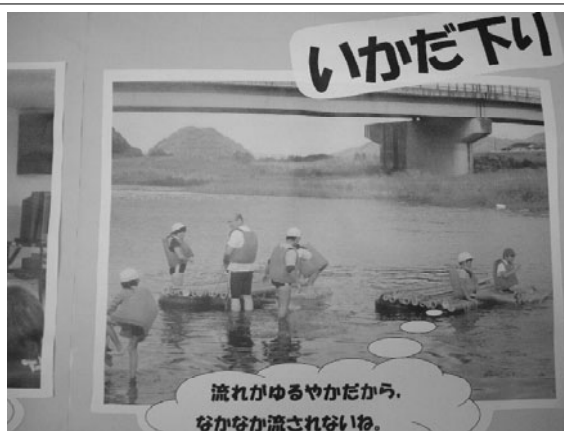
Senogawa River

瀬野川



31

Riverside experiences (4th grade, 6th grade)



Thank you Very much



ありがとう

ございました

39

続いて、高陽中学校3年生による奥迫川に生息するホタル調査についての発表を環境的な側面も加えて発表していただきました。

■ 広島市立高陽中学校 3年生 「奥迫川のホタル生育調査」

僕たちは奥迫川のホタルについて総合学習の時間で調査を行いました。

高陽中学校は郊外にあり、水とみどりに恵まれています。近くに奥迫川が流れています。

奥迫川でホタルが見られるということで、ホタルを調べることになりました。奥迫川は小さな川ですがホタルについては班分けをしてホタルの住みやすい場所を調べました。

調査をする前に疑問点を抽出してから調査を行いました。

ホタルのいるところといないところはどこか？ 本当に水のきれいなところにホタルはいるのか？など周囲の環境についても調べました。

ホタルは奥迫川の水のきれいなところにいることやカワニナのいるところ、光の少ないところにいるなどがわかりました。

川を4箇所に分けて調べました。護岸の高さや、川底や水流について、川の整備の仕方も調べてみました。

奥迫川は人の手によって作られている小さな川です。中流域では砂がたまり草も生えており11種類ものヤゴが見られます。

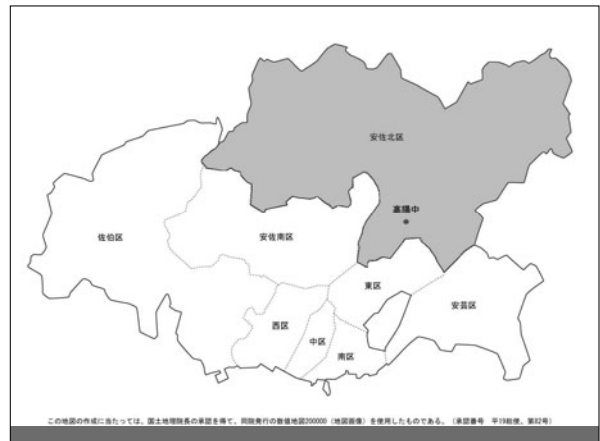
川は上流ではきれいですが中流から下流にかけては汚れていました。また小さな川ですがゲンジボタル、ヘイケボタルなどたくさんの生き物がいる川です。上流部ではホタルを見ることができませんでしたが中流部で見ることができました。下流部でも数匹のホタルを見ることができました。調査の結果をみんなで検討しました。ホタルの餌のカワニナの数の上流では少なく下流では



多くいることが分かりました。

なぜ、上流の水はきれいなのにカワニナはいないのか？という疑問が出ました。昔から住んでいる人に昔の川の様子をヒアリングしたところ、昔はたくさんホタルがいたようです。昭和35年頃から田んぼでは農薬を使い始め、日本経済も高度成長期に入り民家も増え始めたために川の汚れが目立ち始めたようです。河川改修が行われて現在の川の姿になりました。昭和50年くらいからホタルが減ってきたようです。そのころから田んぼでの農薬の使用が増えたこと、河川改修で岸部の草地が取り除かれて昆虫が住みにくくなったことなどが原因として考えられます。しかし現在では田んぼでの農薬散布も減り土砂が増えてきています。

下流は1級河川が流れこんでいるために川の流れがあり水質がきれいになりつつあります。そのような要因から奥迫川から下流や中流、上流に向かってカワニナが戻ってきているのではないかと思います。ホタルは水質だけではなく、えさのカワニナや住む環境によっても違ってくることが分かりました。ホタルの成育と環境の間に問題があること、道路工事などの影響があることもわかりました。自然は元に戻る力があることも分かりました。これからも小さな命を大切にしていきたいと思います。



奥迫川と聞かれて、
どんな川を連想されますか

高陽中学校区にある奥迫川は川という名前が付いていますが本当に小さな川です。

奥迫川の様子 上流



奥迫川の様子 中流



奥迫川の様子 下流



私たち高陽中学校三年生は、この川にいるホタルの出現数を調べる中で、川を取り巻く様々な環境との関係を学習してきました

ホタルの住みやすい場所とは？

- ホタルのいる所いない所の違いは？
水質・えさ・光に関係があるのか
- 本当に水のきれいな川にホタルがいるのか
- 周りの明るさ、川の様子、川の周囲の様子とホタルの数の関係は

予想を立ててみました

- 川のきれいな上流にいる
- えさになるカワニナがいるところにホタルが多い
- まわりに光が強いものがない所に多い

調査の方法

- 川の様子を調べる
- 川のまわりの様子を調べる
- カワニナの数进行調べる
- パックテストを行い水質を調べる
- ホタルの生息場所を調べる

川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました



川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました
- 護岸の高さ



川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました
- 護岸の高さ
- 川底の幅



川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました
- 護岸の高さ
- 川底の幅
- 水の深さ



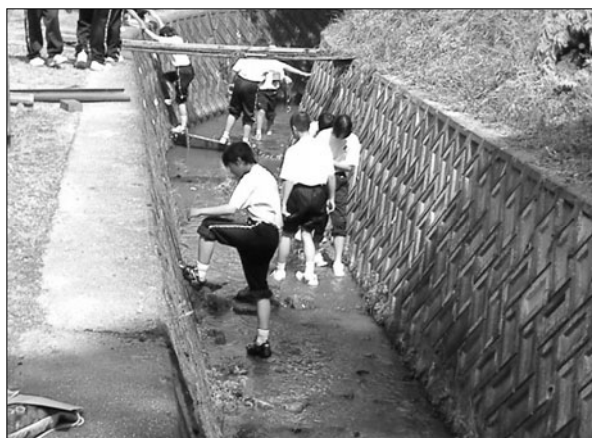
川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました
- 護岸の高さ
- 川底の幅
- 水の深さ
- 3面が自然か、石垣かコンクリートで固めてあるか



川の様子を調べる

- 川を上流から下流まですべて区切り、みんなで分担して次の項目を調べました
- 護岸の高さ
- 川底の幅
- 水の深さ
- 3面が自然か、石垣かコンクリートで固めてあるか



調査結果

	下流	中流	上流
護岸の高さ	1～3m	2～3m	1～2m
川底の幅	1～2m	2～3m	1～2m
水の深さ	20～40cm	10～30cm	20～30cm
3面の様子	自然でない コンクリート	自然でない コンクリート	自然でない コンクリート



カワニナや水生昆虫の数を調べる



カワニナや水生昆虫の数を調べる

・カワニナは
中流・下流に多く
上流には少なかった



水質検査

・パックテスト(水質検査)を行った



水質検査

・パックテスト(水質検査)を行った

・上流	COD	0~2	きれい
・中流	COD	8以上	汚い
・下流	COD	6~7	汚い



夜間調査

・実際に夜間、川に出かけてホタルの飛ぶ数を調べました



夜間調査

調査の結果

・ホタルは中流域に多く
上流、下流とも少ないことが
分かりました

もう一度先ほどの予想に戻ります

- ・川のきれいな上流にいる。
- ・えさになるカワニナがいるところにホタルが多い。
- ・まわりに光が強いものがない所に多い。

・調査結果と予想が違う
きれいな上流になぜ
ホタルが少ないのか

もう一度先ほどの予想に戻ります

- 川のきれいな上流にいる。
- えさになるカワニナがいるところにホタルが多い。
- まわりに光が強いものがない所に多い。

・カワニナの数にも関係があった

もう一度先ほどの予想に戻ります

- 川のきれいな上流にいる。
- えさになるカワニナがいるところにホタルが多い。
- まわりに光が強いものがない所に多い。

・調査では上流にカワニナが少なかった

奥迫川の歴史とホタル

- 奥迫川流域に住んでおられる
地域の方にお話を聞きました

昭和53年頃から10年間ぐらいの間にホタルの数は減少していった

農薬の使用が多かった

現在環境の変化も考え農薬の使用量を減らしている

奥迫川の歴史とホタル

- 奥迫川流域に住んでおられる
地域の方にお話を聞きました

昭和53年頃から10年間ぐらいの間にホタルの数は減少していった

河川改修で、川がコンクリート加工された
改修はまだ続いている。
後5年ぐらいはかかるだろう

奥迫川流域に住んでおられる 地域の方にお話を聞いての考察

・過去

- ・農薬の使用で、川にいたカワニナは上流から順に死滅してしまった
- ・河川改修で、川がコンクリート補修されたため岸辺の水草などが減り、昆虫類が住みにくくなった

奥迫川流域に住んでおられる 地域の方にお話を聞いての考察

・現在

- ・農薬の使用量が減り、カワニナが河口付近からあがってきているが、まだまだ上流までは到達していない
- ・改修から時間がたって水草やこけが生え、昆虫が住みやすくなってきている

まとめ

- ・ホタルはきれいな水に住むといわれているが、水質だけでなく、えさとなるカワニナや卵を産み付ける植物などがある場所に多く発生する
- ・カワニナやホタルは農薬や洗剤水などで死滅することがある
- ・護岸工事や川のコンクリート化が、自然環境に影響し、水生小動物の生態に影響を与えている

最後に

- ・ホタルの学習をする中で、ホタルの生育と環境の問題があることが分かった
- ・環境の問題は、ゴミや生活排水だけでなく河川改修や道路建設などで影響を受けることもある
- ・ホタルのように小さな命が我々の周りにはいっぱいおり、その命を大事にしていきたい

子どもたち発表の最後は、広島県立広島国泰寺高校2年生による「オオサンショウウオ保全是水辺を守る」と題して、生息分布やDNAの解析、塩基配列を音符化した音楽を披露するなど大人も驚きの研究成果を発表してくれました。

■ 広島県立広島国泰寺高等学校 2年生

「オオサンショウウオ保全是水辺を守る ～遺伝子研究と遺伝子音楽」

オオサンショウウオの遺伝子研究と遺伝子音楽について発表します。

この研究は、2008年 日本ストックホルム青少年水大賞を受賞したものです。

オオサンショウウオは世界最大の両生類で、国の特別天然記念物です。中国地方に多く生息していますが、近年、環境汚染や環境変化によって絶滅の恐れがあります。川の生態系の頂点にいるオオサンショウウオが絶滅すると、川の生態系のバランスが崩れてしまいます。従って、オオサンショウウオを守るということは、川の生態系を守り、ひいては水環境のすべてを守ることに繋がると、私たちは考えています。

一方、広島市安佐動物公園では、このオオサンショウウオの人工飼育繁殖に成功していますが、遺伝的な特徴が未解明であるために放流することができません。そこで、広島市安佐動物公園と広島大学の協力を得て、オオサンショウウオの遺伝的な特徴を解明し、オオサンショウウオの保全を通して、川の生態系を守る取り組みをはじめました。平成14年から継続して研究を行っています。

まず、オオサンショウウオの遺伝子解析について説明します。オオサンショウウオの細胞には、遺伝情報をもつ核とミトコンドリアがあります。私たちの先輩は、まず、ミトコンドリアDNAの16298塩基対のすべてを解明しました。次に、固定標本などを使って、太田川水系に生息していたオオサンショウウオを調べた結果、太田川水系間では、遺伝的な違いは、ほとんどないことをつきとめました。また、広島と和歌山間では、ミトコンドリアDNA約3000塩基のうち、違いがわずか0.1%であり、遺伝的な地域差が非常に少ないことがわかりました。さらに、日本動物園水族館協会の協力を得て、7府県13水系33個体のNDH3 遺伝子とチトクローム b 遺伝子について調べた結果、日本のオオサンショウウオは、鈴鹿山脈を境に、大きく2つのグループに分かれることがわかりました。

ところで、オオサンショウウオは世界で、日本と中国とアメリカの3箇所にしか生息していません。そこで、アメリカの共同研究校とこれまでに調べられていなかったアメリカオオサンショウウオの研究も行いました。その結果、アメリカのオオサンショウウオは、日本のオオサンショウウオよりも遺伝的な地域差が大きいのではないかと予想される結果が得られました。また、中国にも行き、中国のオオサンショウウオの研究者との交流も行いました。

また、オオサンショウウオや遺伝子研究について、もっと身近に理解してもらおうと、オオサンショウウオの遺伝子音楽を作成しました。これは、大野乾博士の理論に基づくものです。一定のルールに従って、オオサンショウウオの遺伝情報である塩基配列に、音符を当てはめて作ります。では、オオサンショウウオのHOXA13という指を作る遺伝子の遺伝子音楽をお聞きください。

どうですか？ 清流に身を潜めるオオサンショウウオがイメージできたのではないのでしょうか？

次に、人間の同じHOXA13という遺伝子の遺伝子音



楽をお聞きください。

どうでしたか？ 人間の遺伝子音楽の方が、少し悲しげに聞こえませんでしたか？ 環境を破壊する人間への皮肉かもしれません。

これからも、私たちはオオサンショウウオの遺伝的な地域差を解明する研究を継続し、オオサンショウウオの保全活動を通して、世界の水環境を守っていききたいと思います。

質問：なぜオオサンショウウオなの？

広島に比較的多く生息しており、広島市安佐動物公園で人工繁殖に成功しているから。

第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 広島



広島県立広島国泰寺高等学校



オオサンショウウオ



世界最大の両生類・絶滅危惧種

国の特別天然記念物として保護



オオサンショウウオ
サカナ・カニ・エビ
すべての水環境を守る
小魚エビ・カニ・アザヒ
動物プランクトン・水生昆虫
植物プランクトン・藻類

西日本に生息
中国地方に多く生息



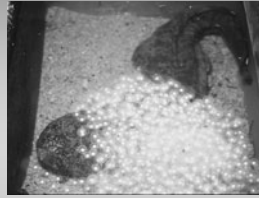
減少の一途



環境汚染(水質汚染)
環境変化(堰堤えんてい)

保全に向けて

広島市安佐動物公園
H.Pより



広島市安佐動物公園が
世界で始めて人工繁殖に成功
H19夏には、三代目が誕生



人工繁殖させた
個体を野生へ

遺伝的特徴が未解明

遺伝的地域差を調べ
オオサンショウウオを守ろう

広島市安佐動物公園

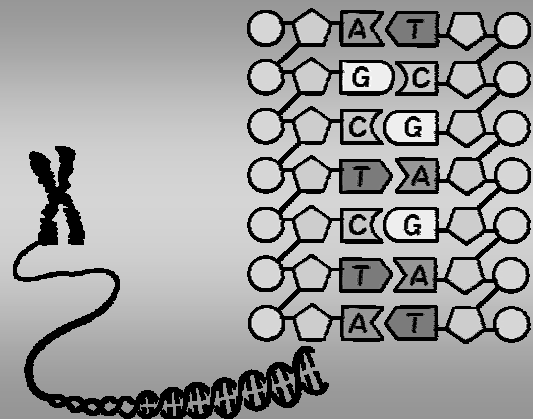
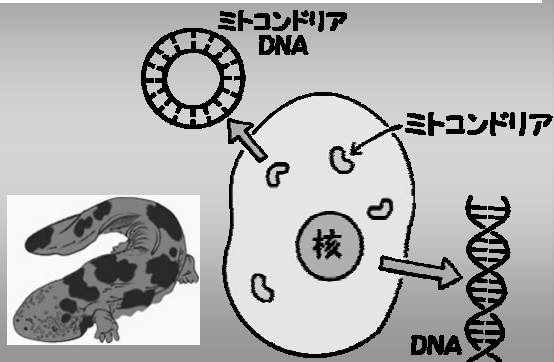
広島大学

研究内容

H14～19まで
6年間

- 1 オオサンショウウオの遺伝子の解析
- 2 オオサンショウウオの遺伝的地域差の解析
- 3 世界のオオサンショウウオの
保全活動の体験と共同研究
※オオサンショウウオの遺伝子メロディの作成

1 オオサンショウウオの遺伝子解析



実験の方法

DNA 抽出(取り出し)

遺伝子増幅(ふやす)

遺伝子解析(配列をよむ)

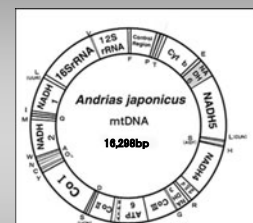
本校のシーケンサー



遺伝子解析の基盤をつくる

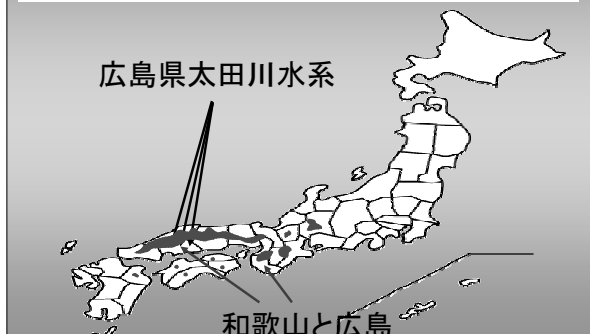
核の反復配列

全ミトコンドリア遺伝子



DDBJ(遺伝子バンク)登録

2 ミトコンドリアDNAによる 地域差の解析



広島県太田川水系の違い

ホルマリン固定標本は入手しやすい

遺伝子の抽出に成功



太田川水系では
個体差はほとんどない

広島と和歌山の地域差

NADH3

(397塩基)

広島

91

GATGCCGAAAACTATCCCTTATGAGTGCGGATTTGATCCTT
GATGCCGAAAACTATCCCTTATGAGTGCGGATTTGATCCTT

111

133

和歌山

調べた遺伝子	異なる塩基
NADH3	1/397
NADH5	0/397
NADH6	0/500
ATP8	0/210
CytB	2/957
D-loop	0/533

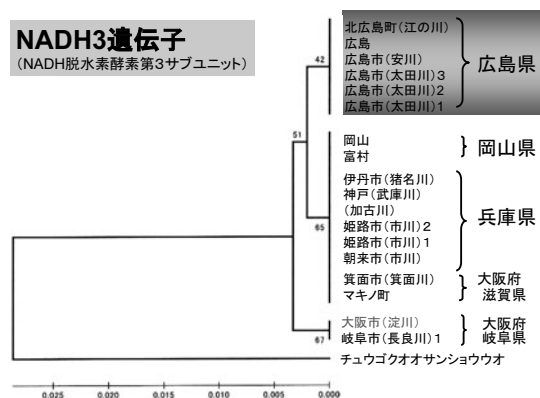
ミトコンドリア約3000塩基の
違いはたった0.1%

日本動物園水族館協会の支援

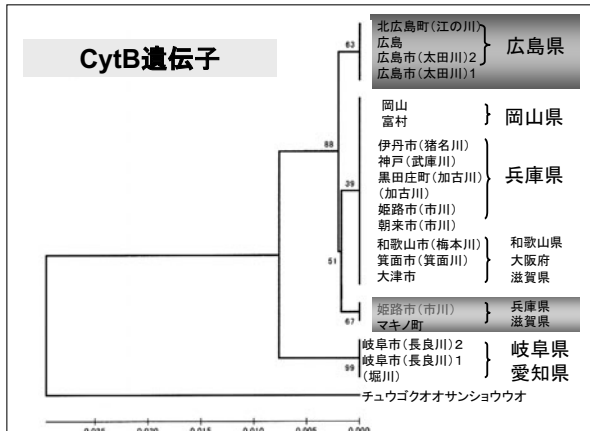
7府県・13水系・33個体



NADH3遺伝子 (NADH脱水酵素第3サブユニット)



CytB遺伝子



オオサンショウウオの遺伝的地域分化



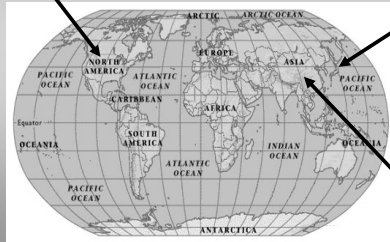
日本のオオサンショウウオ

- ・遺伝子の進化速度が遅い？
- ・少数個体をもとにボトルネック現象が生じた？
- ・世代時間が長いいため塩基置換速度が遅い？

3 世界のオオサンショウウオの保全活動の体験と共同研究

アメリカ

日本



中国

アメリカへ H19夏

ペンシルバニア州

ライコミング大学

ニュージャージー州

共同研究校

Academy for Advancement
of Science and Technology
(AASST)

アメリカオオサンショウウオ (Hellbender・地獄の使者)



- ・日本のオオサンショウウオに比べ扁平
- ・大きいもので70cm
- ・山溪のにおいはしない

生体の捕獲(石を起こして)



標識(タグ)の埋め込み



ペトカス先生



標識の読み取り

日本のオオサンショウウオ

広島と和歌山の間で
ミトコンドリア約3000塩基を比較すると
違いはたった0.1% だった

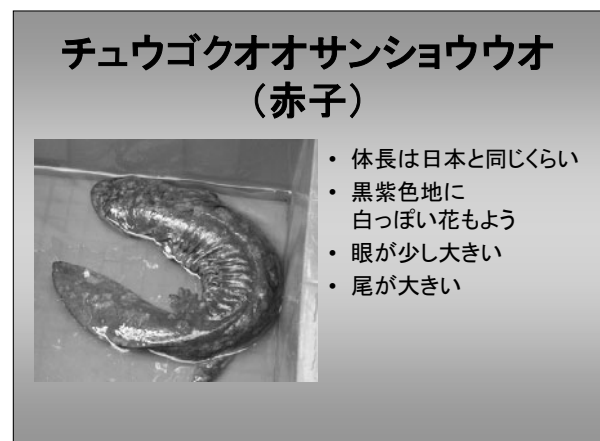
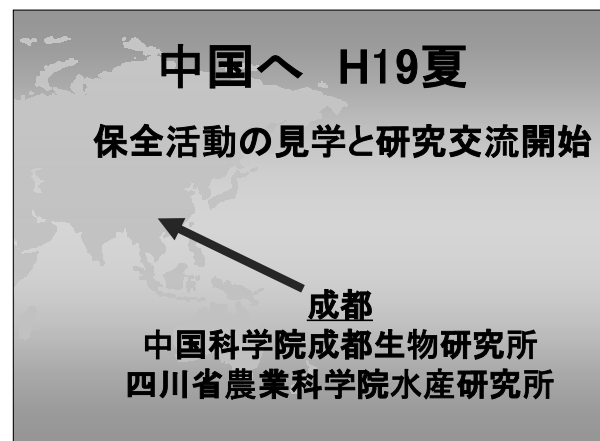
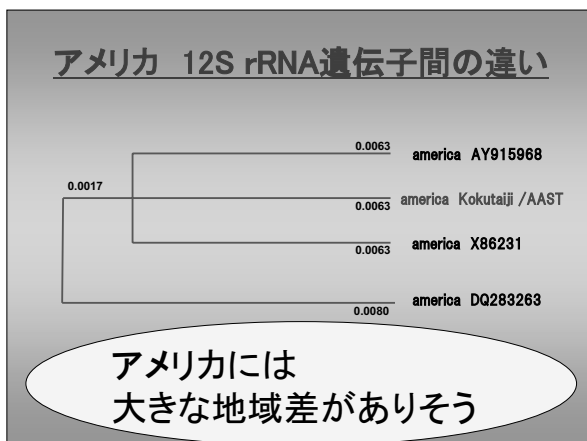
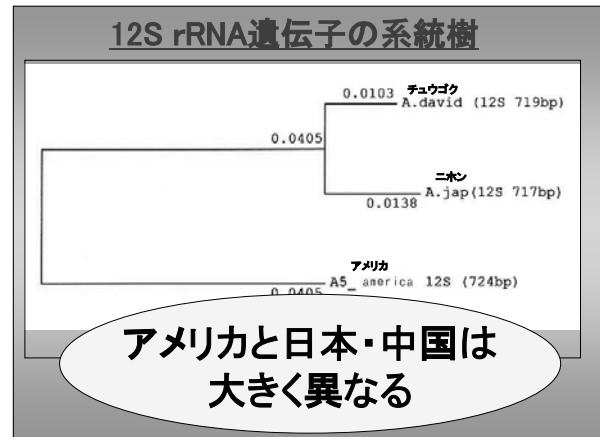
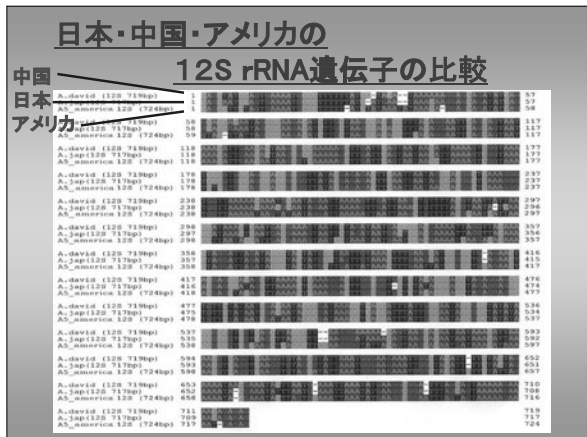
アメリカの種類ではどうだろうか？

アメリカオオサンショウウオ

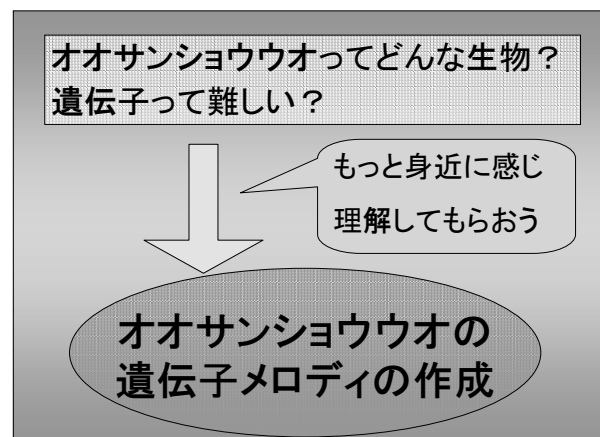
AASST校との
共同研究の結果

12S rRNA遺伝子の塩基配列の決定

A5_america	12S (724bp)				
10	20	30	40	50	60
CAGCTTCTA	GTGAAATGC	CCCTTTTAT	TATAAATATA	AACAGGAGCA	GATATCAGGT
70	80	90	100	110	120
ACTTATTAG	CCAGAGATC	TTGCTAAGC	ACACCTTAC	AGGAATTAG	CAGTAATATA
130	140	150	160	170	180
CATTGAACAA	TAAGGCTAA	AAAGTTGAT	TAGTAATATA	CCTTAAAGGT	CGGTAAATCT
190	200	210	220	230	240
CGTGCCAGC	ACCGCGTTA	TACGAGAGC	TTCAATTAT	AACACGGCT	CAAGGGGTGG
250	260	270	280	290	300
TTAAAAATAA	GTATAATAGG	ATTAAAAAT	AATTAAGTG	TTTTCAGCA	TCTATTAGCT
310	320	330	340	350	360
TAATACCAAT	GACGAAAGTA	ATCTAAATA	ATGAATCAI	GAAATCAAG	ACACAAATA
370	380	390	400	410	420
GGATTAGATA	CCCTATATG	CTTGATTATA	AACTTTGAAT	TATCCGCTG	CAGAACTAG
430	440	450	460	470	480
AGCTACAGT	TAAAACTAA	AGGACTTGG	GGTGCTTAC	ACCCACCTAG	AGGAGCTGT
490	500	510	520	530	540
TCTATAATG	ATAATACCG	ATAAACCTA	CCATTATTG	CCAATACGC	CTATATACG
550	560	570	580	590	600
CCGTGAGAG	CTCACCTTC	CAAGGGGTAT	TACAGTAGA	ACAATGATTA	ACATAAAAC
610	620	630	640	650	660
GTACAGTAA	GGGTAGAT	ATTAAATGG	AAGAAATGG	CTACATTCT	TATTAGAAA
670	680	690	700	710	720
ATACGAAATA	CTTAGTCAA	ATTAAATATG	AAGCGGAAT	TTAGTAGTAA	AAAGAAATG
730					
AGAG					



- ### 成 果
- 1 オオサンショウウオの核の一部及びミトコンドリア全塩基配列の解析に成功した
 - 2 オオサンショウウオの遺伝的地域差は少ないことがわかった
 - 3 世界のオオサンショウウオの保全活動を開始した



- ・遺伝子も音楽も繰り返しがあ
- ・AGTCをルールに従って音符に

大野乾博士 1986年



HOX A13
指を作る遺伝子

Giant salamander

GAACTG GAAAGA GAATAT

GCGA CAAA CAAA TTCAATAC AAGGAC

GAA C GAAGAA GAATAT CCGCAACTAC

AG CCT CTC A G AG AG G

Giant salamander



Giant salamander



Human



展 望

オオサンショウウオの詳細な遺伝的地域差を調べ
人工飼育個体の放流につなげる
オオサンショウウオの保全活動を通して

世界の水環境を守る

謝 辞

日本動物園水族館協会
広島市安佐動物公園
広島大学大学院附属両生類研究施設

この研究は文化庁の許可を受けている
平成18・19年度スーパーサイエンスハイスクール特別枠の
指定を受けている

第10回 日本水大賞
2008 ストックホルム青少年水大賞



中越信和氏コメント

3校の発表が終わり、中越信和氏からの以下のコメントをいただきました。

[広島県海田町立海田東小学校]

生態調査をしているだけでなく川流れて遊びが入っているので楽しくやっているのだと思います。モニタリングなどで長く調べることは大切です。

[広島市立高陽中学校]

仮説を立てて調査して検証する、なぜそうなのかと始まることが大切です。

一部の表現に中で開発と保護がぶつかっているような言い方がありますが、自分たちが設計図を書いて自然と共存する構造を提案してみてもいかがでしょうか？

[広島県立広島国泰寺高等学校]

一般の高校では出来ないと思うほどのすごい研究であると思います。どんどん突き詰めて研究が出来るということはとても指導者や環境に恵まれて、大変素晴らしいと思います。DNA塩基をもとにする場合音階は4つで3拍子しかないのにうまく繋いでとても心地良い音楽になっていますね。課題は、日本のオオサンショウウオは天然記念物なのでどこに放流するかということです。京都でチュウゴクサンショウウオが放流されて日本のオオサンショウウオと混血になってしまっています。チュウゴクサンショウウオも中国では天然記念物ですのでなかなか排除できません。日本人が中国から食べようと思って輸入しましたが、京都の料理屋さんが「かわいそうだから」といって川に放流してしまいました。とにかく大変素晴らしい研究だと思います。大学でやってもよいような研究であると思います。

コーディネーター：一ノ瀬飛鳥

一ノ瀬さんは幼少の頃より、「エコロジー研究会ひろしま」で実施する「せせらぎ夢学習塾」にて体験活動を実践して、太田川河川こどもモニター1号として太田川河川事務所より認定されました。今回は社会人になって違った角度から、コーディネーターを務めてもらうことになりました。

コメンテーター：中越 信和 氏（広島大学大学院国際協力科 教授）

「専門」群集生態学：個体群を基礎とし、生物群集の存在と動態を明らかにする。

景観生態学・環境計画：景観を基礎とし生態学的立場から環境計画を立案する。

自然保護：科学的手法により自然保護を体系的・組織的に行う。

»» 全国川に学ぶ体験活動発表「ポスターセッション」

15:00～／中国新聞ホール

コメンテーターに広島大学の中越教授をお迎えし、全国から集まった10団体の皆様から、川に学ぶ体験活動の発表並びにポスターセッションを行いました。

① 九州中央山地自然学校「九州中央山地自然学校のこれまでの活動について」(熊本県)

2009年4月より任意団体として活動を開始。大人から子どもまで多くの方が参加できる自然体験活動を推進。リーダー養成講座・川流れ・キャンプ等の活動を紹介。

② 可部カラスの会「川とまちづくり」(広島県)

河川に関わるまちづくりをし、地域文化を守り育て創造することを目的として活動している。会費・会則無し、平均年齢70歳。環境系・賑わい文化系等に分けた活動を紹介。

③ 日野川交流会「日野川に砂礫河原を取り戻そう！」(福井県)

「砂礫河原を取り戻そう！」をテーマに日野川流域交流会と漁業組合が中心となり、約20団体で会を構成。樹木の伐採、川下り、天然魚つかみなどの活動を中心に紹介。

④ NPO法人鶴見川流域ネットワーク「賑わい」

鶴見川流域を中心に6つの柱に沿って川に関する活動を展開している。その活動の一つとして、イベント時の「賑わい」を身近になりつつある川と人との関係を紹介。

⑤ TERA子野アドベンチャー「川に“遊び”・楽しい英会話」(熊本県)

黒川を中心にみずえ緑地株式会社すべの体験活動を展開。中でも英会話を取り入れながらの川を楽しむなどの独自の体験活動を行っている。

⑥ 太田川いかだ下りカワニバル「太田川いかだ下りカワニバル」(広島県)

それぞれが作ったいかだを太田川で川下りするイベントを毎年開催し、22回を数える。会則などのしほりを持たず、太田川と関係を持つことに重きを置いている。

⑦ 新町川を守る会「川を生かして町づくり 出来る人が出来ることを」(徳島県)

平成2年より会を発足し、現在は約300名の会員を有する。毎月1日及び第3土曜日に清掃活動を実施。そのほか遊覧船運行や水際コンサート・植樹等、幅広く活動を展開。

⑧ 川内川流域連携ネットワーク「川内川流域で官民一体となった河川活動の推進と水難事故防止の取り組み」(鹿児島県)

川内川にて河川活動を官民一体となって、流域をつなぐ17団体が活動を展開している。水難防止活動やドラゴンボート競技会、サマースクールなどの取り組みを行っている。

⑨ 岩尾内ダム水源地ビジョン推進会議 ASOVI「岩尾内湖の湖面活用時の安全基準について」(北海道)

自然体験活動をより安全で楽しいものにしていくために、リスクマネジメントに重点を置いて活動。カヌーイベントの際の安全基準を作成するなどデータを蓄積している。

⑩ 五日市観音小学校「シジミ再生プロジェクト ～地域と共にあゆむ岡の下川浄化活動～」(広島県)

五日市観音小学校では、岡の下川保全協会の協力を得て、シジミの繁殖を通じて環境浄化の推進に取り組んでいる。その他パックテストやクリーン作戦も地域ぐるみで行っている。

① 九州中央山地自然学校「九州中央山地自然学校のこれまでの活動について」

田中 清也

昨年は熊本で全国大会を行いました。当団体については初めて名前を聞かれた方もいらっしゃると思いますが、今年の4月から活動を始め、現在は九州だけでなくいろいろな地域を飛び回って活動をしています。

当団体の目的は、たくさんの人たちに環境学習や自然体験をしてもらうことです。

7月に鳥取県でRACリーダー講座を開催しました。先日も奥大山の(株)サントリー森と水の学校というプロジェクトのスタッフに安全についてのリスクマネジメントを大きなテーマに、川での実習を含めてRACリーダー講座を行いました。これで中国地方に10名のRACリーダーが誕生しました。地方に貢献できたと思います。8月には「川の流れ体験」を鹿島町と矢形川で行いました。ヒラモが生えていました。ヒラモは熊本にしか生息していません。雨の次の日で川は少しにごっていましたが、川の色の違いや川の温度の違いなどを体験することができました。この写真は川の流れが分かる写真です。湧水なので年間の平均水温が18度です。



全国1万人の川流れ in 矢形川

他には、安全講座やゴミ拾いの活動を行っています。

「子どもの水辺安全講座」で2泊3日のキャンプを行い、カレーを作る活動も行いました。また地域の協力で山女のつかみ取りを行いました。実際に川のリバーサインのOKサインの練習や飛び込みをしました。団体を立ち上げて半年間で独自にリーダー講座を開催できたのが大きな成果でありました。



子どもの水辺安全講座



ヤマメのつかみ取り体験

② 可部カラスの会「川とまちづくり」

寺本 克彦

私たち『可部カラスの会』はまちづくりの団体です。河川と関わったまちづくりについて紹介します。

可部は、太田川の中流域の町です。中国山地から流れ出る3本の河川と、出雲街道、石見街道が合流する、水運・陸運の拠点、太田川の恵みにより栄えてきた町で、五右衛門風呂は、今でも日本一のシェアを誇っています。

ところが、昭和47年広島市に編入合併以降、この素晴らしい歴史と文化は忘れられていきます。

そこでたちあがったのが、私たち「可部カラスの会」



で、以来、まちづくりは、地域文化を守り育て創造することと、さまざまな活動を展開しています。

私どもの会、会費も会則もございません。平均年齢 70 歳。おじいさんとおばあさんクラスになっておりますが、コミュニケーションはメーリングリストで、まだまだ元気で飛び回っております。

環境系では、水質調査やクリーンキャンペーン、高校生や中学生と一緒に河川清掃をやっています。

賑わい文化系では、可部と京都にしかない大文字祭りに、河川堤防に手作りの灯籠をならべる灯り祭りや、川舟に乗って、下流の町まで結納を運び、川の中に作成した舞台で結納の儀を行うようなイベントや、地域の史実にもとづく、全国でもオンリーワン、質金のまちづくりを進めています。



③ 日野川交流会「日野川に砂礫河原を取り戻そう！」

田中 謙次

福井県の九頭竜川水系の日野川からきました。昨年は観光資源を発掘したいと観光資源の発掘についての発表をしました。今年の2月から砂礫^{されき}河原を取り戻す取り組みを行っています。



イベントポスター

昔と今の川では全く違ってきます。河原が草ぼうぼうになると、いろいろと支障が出てくるので取り組んでいます。団体が26団体集まりいろいろと討論をしました。日野川の流域の7箇所です。川の中の木を切ったりして復元をしました。現在、川底に20センチくらい砂がたまっています。また、元に戻ってしまいました。Eボート体験ではたくさんの人たちが乗船体験をしています。川の植生や川の様子を調査しました。

市民にアピールするために川の魅力のイベントを行ったり、リーダー講座を開催して漁協や河川管理者の人にも受講してもらい、実際に身を持って体験してもらいました。

魚のつかみどり体験で当日、鮎を3,000匹放流し500人くらいの参加者が来て、子どもたちにはとった魚を食べてもらいました。捕獲した鮎で小さいものについては魚道のミニチュアの模型を作って鮎ののぼり方をみました。Eボートに乗り、皆さんに羨ましがられながら川流れを行っていた時、イベント時に急に雨が降ってきて増水し、改めて自然の猛威を体感しました。

イベントの最後のふりかえりで意見交換をしました。川からいろんなことが学べるこのイベントは、やり続けようと一致団結しています。

質問：日野川の目指す方向、理由は何ですか？

発表者からの回答：ダムというキーワードがあった河



鮎の放流

川を利用している人たちは多くいます。田んぼに充てる水は農業用水を利用しているものが多いですが、年々水量は減っています。植生調査をすると9割が柳の木の伐根が必要です。なまじ切ったがために悪循環になってしまいます。木が生えているので川は危険で入れません。みなさんに利益のある方向でやっています。川に入れないので川へのアプローチをしています。みなさんにはみなさんの意識があるのでみなさんにゴールのある活動を行っています。



あっという間に川の様子が一変

④ 鶴見川流域ネットワーク「賑わい」

中原 優人

「鶴見川の賑わいをテーマに」

鶴見川は、町田市から横浜市の鶴見区から東京湾に流れています。一級河川で流域人口が多い典型的な都市河川で、汚れが有名になっていました。現在かなり自然が帰ってきています。子どもたちを川に連れてくるように、学校と協力して川で授業を行う活動をしており、自然体験なども行っています。今までに約34回の授業をして2,500名の子どもたちが川の自然を体験しています。

「鶴見川源流祭り」というイベント、「いかだで遊ぼう」では300人くらいの人が川に入っています。「連携している谷本川」、「子ども風のまつり」、「いかだカヌー天国」というイベントをやっています。Eボートを浮かべて横浜開港100周年のイベントを絡めて行いました。流域ツーリズムとってたくさんの人に川を知って欲しいと思い、源流から下流まで歩くイベントも行っています。

また、河原のクリーンアップ作戦も行っており、川をきれいにし、これをきっかけにしてもっと川を知って欲しいと思います。いろいろなイベントを通してたくさんの人を川に呼んでいます。川にもにぎわいが戻ってきていますが、まだまだ努力が必要です。人と生き物の共存もテーマとしています。



鶴見川源流祭り



いかだで遊ぼう 谷本川



子ども風のまつり



鶴見川いかだ・カヌー天国

質問：鶴見川で相当な活動を行っているが参加費はどうしているのか？

活動資金はどうしているのか？

発表者からの回答：河川学習は、去年は国交省の支援、神奈川県、横浜市の区からの支援を受けました。いろいろな支援を受けて行っていますが、もちろん持ち出しもあります。イベントについては参加費はもらってない場合が多く、保険代だけはもらっています。

⑤ TERA子野アドベンチャー「川に“遊び”・楽しい英会話」

柴田 勉

黒川を中心に活動を行っています。

アメリカ人のスタッフと一緒に川の体験をしながら英会話の勉強も行っており、アイスブレイクなどを英語で行っています。また、水辺の事故などの勉強をしたり、立野河川事務所に協力をさせていただきダムの性質なども勉強しました。ダムの予定地も見学し、懐中電灯を持って横穴に入り金槌で叩いていたりしました。

水生生物などの観察などヘビトンボがいると、「ヘビトンボはきれいな川にしかない！」と言ったら子どもたちはびっくりしていました。

初めは川のアイスブレイクなどで水に慣れる事から行っています。カヌーでパドルの持ち方やこぎ方など子どもたちはすぐに慣れてきました。キャンプでは全て子どもたちに自主的にやらせており、野菜を切っても形はバラバラです。沢登りなどは判断力を培います。みんなで力を合わせて川を横に横断するなどの体験では、みんなで協力をするのを感じました。

5月に川の体験をしましたが、子どものハイポサミアなど銀のシートが役にたちました。

ロープレスキューでは3人が一度に捕まっの悪い例など、プロジェクトウェットの「水のオリンピック」を行ったり、アンケートを行い、「何で笛を吹くのか?」「何でレスキューするのか?」など、いろいろな質問が出ました。

最後の挨拶は英語でスピーチを行いました。最後にひょう電が降ってきて、スタッフもいろいろ学びました。



川のアイスブレイク



川で遊ぼう（カヌー）

⑥ 太田川いかだ下りカワニバル「太田川いかだ下りカワニバル」

徳納 武使

今年で22回になりました。昨年の暮れに今回の全国大会のオファーがきましたがパワーポイントを作ったことがありませんでした。私達のイベントのいかだ下りの目的はしばらくもなく太田川と関係を持つこと等、ただ楽しいことが目的です。太田川で胸が熱くなる思い出を作る事でふるさと意識を高める、官と民を繋ぐのは民であると思います。それはふるさと意識の高揚で出来ると感じています。

「公園にゴミ箱は必要か?」等という議論については、ゴミ箱がなければ持ち帰ると思います。

街づくりを担うのは民であり意識の高い市民を作っています。

参加者が主催者になるイベントは、参加者が楽しんでもらうことがイベントです。祭りは自らが楽しむためのものです。主催者が参加者に楽しんでもらう、祭りは主催者も一緒に楽しむ。第1回は広島市の



開催で第4回目から民間がやることになりました。当時は支援がたくさんありましたが、今は助成金をあてにせずにやっています。平成10年にいかだ下りサミットを行いました。今年で第12回目が行われ、全国から沢山の方が参加されています。1回イベントを行ないましたが、参加者の方から何度もやってくれという要望があり、いかだ下り全国大会を行いました。

今年で第12回になった「いかだ下りサミット」ですが、行程約8キロで行い、スピードは競わない、審査は楽しくということが基準です。安全第一、審査員への賄賂もOKで4時間から5時間の川下りを行います。



質問：太田川いかだ下りカワニバルに対して審査で楽しさが一番ということだがどんな楽しさか？

発表者からの回答：いかだが全て居酒屋状態になっており、8キロを4時間かけて行うので途中いかだ同士で振る舞いあっております。また、川がプールになって、子どもたちが泳いでいます。いかだ下りで20回くらい体験して良いと思うのは、お父さんと子どもと一緒に遊ぶ姿がよいです。パパの友達がすごいという表現がありますが、イコールパパがすごいということになります。水遊びは人間の本能であり、人々が写真を撮るとよい笑顔が見られます。

⑦ 新町川を守る会「川を生かして町づくり 出来る人が出来ることを」

中村 英雄

「新町川を守る会」は平成2年に会員10名で始めて、今では300名になりました。「出来る人が出来ることをやる。」をコンセプトに活動を行っております。

会費をとって、個人が3,000円、法人が30,000円で行っています。川の汚染はざっぱい水がほとんどで、市民が汚した川を市民がきれいにと、毎月1日と第3土曜日は清掃を行っています。

川掃除は船を4隻くらいで参加者が15人くらいですが、4トン車が一杯になります。参加者は15名くらいが丁度よい人数です。自転車や冷蔵庫、空き缶や発泡スチロールのゴミなどが出てきます。ひょうたん島の周りで遊覧船をだしており、1時から3時くらいまで100円くらいの船賃をもらって船を出しています。15年くらい前までは乗船者が100人くらいだったのですが、今年の8月は10,000人くらいの方が乗っています。

一般の人たちがたくさん乗るので、川のほうへ意識が向き、川から町を見るということで川をきれいにするという意識ができています。今年は5万人くらいの方が乗るのではないかと思います。

今年、「川での福祉と教育のシンポジウム」を行う予定です。新町川でも1年で車いすの方が300人くらい乗られました。

また、水際コンサートも行っており、飲み放題食べ放題で誰でも参加ができ、水辺で人が集

まるような街づくりを行っています。

街ぐるみで川を使った町づくりを行っています。

他には、瀬戸内海の鳴門に行く船も出ていたり、吉野川の上流に木を植える活動も行っています。

⑧ 川内川流域連携ネットワーク

「川内川流域で官民一体となった河川活動の推進と水難事故防止の取り組み」

上野 豊

川内川では河童が住んでいると言われており、「ひーほー」という挨拶をします。

川内川は熊本、宮崎、鹿児島3県を流れる川で、九州で2番目に長く、全国で26番目に長い川です。中流付近に大きな滝があり、下流には大きな鶴田ダムがあります。

川内川の山の方では雨量が平均2,800ミリで雨が多い地域です。3年前に大きな災害が起きました。川内川の流域ではRACに3団体が入会していて、流域を繋ぐ17団体が入っているネットワークができています。RACに加入をしてRAC保険にも入って活動を支援していただいています。水防演習も行っており、ドラゴンボートの競技会もやっています。ドラゴンボートは川内川の特徴になっています。また、川内川も昨年からはクリーン作戦を行っています。



えびの市でも「サマースクール」という川の活動を行っており、コカコーラの担当職員もRACリーダーです。子どもたちはとても良い表情をしていて、川ならではの表情だと思います。

「川の流れを体験」を行い防災体験をしました。昨年、全国で水難事故が起こり、鹿児島県でもたくさんの水難事故が起こっています。安全のDVDを使って地道に安全広報を行っています。



水生生物調査における
パネルでの水難事故防止啓発

⑨ ASOVI「岩尾内湖の湖面活用時の安全基準について」

大内 雅司

イベントなどを行って、リスクマネジメントなどについては講習会で勉強をしました。本当に危険を回避するには勇気を持つての活動の中止の決断も必要だと思います。

自分たちが活動をしていてダムの中で一番危険だと思うのは風です。ダム自体が細長い形なので突風が吹いてダムの方向に流されたり、5メートルの風でもカヌーに乗るとひっくりかえってしまいます。風速については近くの木のなびき方で判断をします。

北海道は水温が夏でも15度くらいであり、夏も低体温症（ハイポサミア）も視野に入れて活動をしています。

活動やイベントの下見については入念に下見をしており、活動の1年前や渇水時期にも下見を行っています。（危険箇所の確認）



質問：川から見た景観をよくしようという取り組みとは何ですか？

発表者からの回答：

自分たちのフィールドの台帳をつくりたい。

- フィールドのチェックの仕方

毎日川にいる。川のフェンスが低い（50センチ）。大人が酒を飲んで死んだ事故があった。子どもの事故がいままでにない。

- 風景

いままでは家が川に背を向けていましたが、最近は建物が川のほうに向いてきている。住民から景観条例も出来てきています。川が汚いときは川に背を向けていた。生き物が約40種類くらい川にいる。景観法を住民が出して行政と相談をする。

- 何箇所くらいフィールドがあるか？

23箇所から25箇所くらいある、全て下見をする。下見については基本である。

⑩ 広島市立五日市観音小学校

「シジミ再生プロジェクト～地域と共にあゆむ岡の下川浄化活動～」

上田 修

五日市観音小学校では、岡の下川保全協会（森本得夫会長）の協力を得て、毎年、4年生が岡の下川にシジミの赤ちゃん貝を植え付けています。水質浄化能力の高いヤマトシジミの稚貝を植え付け、子どもたちは「飲めるくらい美しい川にしたい」と取り組んでいます。

学校では、シジミの活動に関連して、川の生きものを観察して生物指標を使った水質検査をしたり、亜硝酸性窒素パックテストを使った水質検査をしたりして、川の汚れがどれだけきれいになっていくかを調べています。また、川のゴミを拾う「クリーン作戦」や公民館の方に協力していただいて、地域の歴史を学んだり、地域や地域の方々を先生として地域ぐるみの教育を進めています。

質問：シジミは最後は食べられるのですか？

発表者からの回答：食べられるかどうかは検査をする。

意見：子どもたちが食べるのはかわいそうだということは間違っている。乗り越えて欲しい。



シジミの植え付け



ヤマトシジミ

全国10団体の発表、ポスターセッションを終えて、全体の講評を中越信和氏にして頂きました。

●講評 中越信和氏

10団体の方がいろいろな活動を楽しんでいると思うが、川は危険なところだと思います。

九州から北海道の活動で高く評価しています。環境保全、生態保全、安全、遊び賑わいから講評します。

遊びについてまでほとんどの団体が楽しんでいると思います。活動やイベントは企画内容が多いから継続されているのでは。北海道の岩尾内ダムでの活動が非常に大事であると感じました。北海道は水温が低いので安全性の確保、風の強さを木のゆれ具合で見るといった判断をしているが、暖かいところではそういった確認がゆるくなりがちです。

環境保全では「可部カラスの会」と「鶴見川流域ネットワーク」、「新町川を守る会」、「観音小学校」の活動を見習って他の団体には掃除をおおげさにして欲しいです。

川の生き物を調べる活動は「川内川流域連携ネットワーク」や「日野川流域交流会」などが行っていたましたが、川の生き物を調べるのは現在いろいろと簡単になってきています。賑わいでは「可部カラスの会」や「鶴見川流域ネットワーク」のしかけが上手ですのもっと広く行ってください。「新町川を守る会」も賑わいを上手に行っています。「九州中央山地自然学校」ではリーダーの出前講座をしているのは他の団体も見習って欲しいと思います。

「日野川流域交流会」は何とかして川に植生を取り除くのではなく、利用するように工夫したらどうでしょうか？ 川の植物をそのように排除するのはいろいろと検討されてきていますが、何事も続けてやるのが大切です。

シジミの移植に関しては食べるところまで行けば生活に繋がっていくと思います。川を身近に感じてもらい生活の中であって、吉野川では川からはなれた人が川に戻ってきています。看板など協定を作ればよいと思います。広島も川の景観には無頓着でありましたが、現在いろいろと検討を行っています。全ての団体は遊びについてはクリアしているので、もう一度安全に配慮してもよいと思います。

今、できているところを確認してみて欲しい。しつこいですが安全について浸透させることが大切です。

1日目の中国新聞ホールでのプログラムは無事終了し、第2部に会場を移すこととしました。

» [第2部] 水辺夜のイベント

18:30～／原爆ドーム前 元安川テラス

第2部では、川辺の施設ウェルシティ広島・フォーシーズンズを会場に交流会を行いました。約1時間30分の短い時間でしたが、約100名の方が集い、川談義に花を咲かせました。

第2部外のイベントとして、原爆ドームを背景に、コンサート・神楽(史上初)・映画・オープンカフェ・ピースキャンドル点灯等を行いました。本大会参加者のほか、一般の方もたくさん集まっていたいただき、夜の広島を彩る文化を楽しんで頂きました。

- 船上コンサート [18:30-19:30]
安芸楽団 (キーボード・フルート・ボーカル)
梶川 純司 (篠笛)
川本 高虎 (津軽三味線)
- 神 楽 [19:30-20:00]
演舞「八岐大蛇」吉和神楽団
- 船上シネマ [20:05-21:00]
「木を植えた男」(1987年アカデミー賞短編映画賞受賞)
「つみきのいえ」(2009年アカデミー賞短編アニメーション賞受賞)
- オープンカフェ [18:30-21:00]
- ピースキャンドル [19:00-21:00]



船上コンサートの様子



八岐大蛇演舞の様子



▲ピースキャンドルの次期開催地への贈呈



船上シネマ上映の様子



ピースキャンドルと原爆ドーム

» [第1部] 分科会

9:00~/中国新聞ビル 会議室701・703・704・706・707

2日目は9時からのスタートです。まずは分科会を開催しました。テーマを「遊び」「生活」「環境」「防災」「賑わい」の5つに分けて実施し、概ね20~30名のグループとなって実施しました。

いずれも話題提供者からの話が続いて、議論を深めまとめていくというものです。

1時間という非常に短い時間ですので、議論の深まりを見せるには至りませんでした。各地の活動に対する熱い思いを交換できた一時となりました。

■ 第一分科会 「遊び」

中国新聞ビル 701会議室

「川と遊び、学ぶ楽しさを発見。」

コーディネーター：山下 雅彦（福山平成大学）、青木 勇（カヌー社長）

話題提供者：隆杉 純子（ポップラ・ペアレンツ・クラブ 代表幹事）

山下さん：この分科会は「遊び」をテーマにすすめます。

まずは、どのようにして分析、枠組みを持っていくかを説明します。魚骨分析モデルという方式で大骨を書いて次に小骨をどんどん書きます。このようにして課題を見つけしていきます。これをフィッシュボーンチャートと言います。遊びについて以下の3つに分けて



みます。①エリア（遊ぶ場所・拠点になる施設）、②プログラム（カヌー・沢登り）、③クラブ（チーム・川遊びをするためのクラブ・趣味の方向性が同じ人たち）。

今まで全国大会において、エリアとプログラムについてはたくさん話されてきました。しかし、クラブというこの部分については、非常に難しくあまり触れられてはきませんでした。今回、この分科会は敢えてクラブに注目してやってみようと考えています。まず例として、広島で活躍している隆杉さんにどのようにクラブ運営をして、どういう事があるのかを話してもらいます。

隆杉さん：ポップラ・ペアレンツ・クラブは、企業と有志と市民団体の集合体です。午後行われる“広島川祭り”の場所が活動のフィールドです。どうしてこのような集合体になったかという、25メートルのポプラの木が立っていて、それが5年前（2004年9月7日）に台風で倒れました。その倒れたポプラの木をもう一回植え直したいとポップラ（ポプラの木の愛称）の再生を目指した体験をした人達が中心に集まりました。

クラブの方向性は、ポプラの木に対する愛着、ポプラの木のある風景が好き、ポップラ通りへの愛着、ポプラの持っている歴史的な史実（戦後の復興とともに成長した木。

河川緑地の整備のとき基町環境護岸のシンボルとして残された)などが、クラブのまとまりの方向性です。

青木さん：プログラムについてはリバーブギボディボード（足ひれをつけて急流を乗りきるという遊び）3級、4級の河川の初心者でも自由に入っていけます。ゴムボートのゴムを使用しているので軽く、自由自在に行けることや、目線が低いので迫力もあり簡単で、欧米で盛んです。また、30メートルくらいの距離の滑走をして河川へダイビングなども行います。京都嵐山のツーリング風景やドラム缶風呂、10月のハローウィンパーティに仮装して激流下り（ラフティング）、飛び込み岩からのダイビングなどのプログラムがあります。

エリアなどについては基地やベースとしての位置づけがあり、例としてホテルなどの階段下を借りてのラフティングの集合場所（バラックのような）や四国では廃屋を借り受けて、中を改造し宿泊施設にしています。和歌山ではシーカヤックの基地になっており、2階が研究センター、シャワールームもあります。

また、持ち寄りの地酒会（懇親会）で、暗黙のルールとして誰か一品とお酒を持ってきます。

カヌーのツーリングが終わってから、豚汁を作ってみんなで楽しむのもクラブの風物詩となっています。

○クラブについて

クラブとは、団体が集まって同じ方向性を向いている人達が何かに取り組むことです。1～2年すると、組織の文化が出来てきます。→組織文化（クラブの文化）

組織文化を分類していくと… →言語的シンボル・行動的シンボル・物理的シンボル

- 言語的シンボル……物語、逸話（クラブ共有の物語・話題）
- 行動的シンボル……暗黙のルール
- 物理的シンボル……クラブの写真、シンボルマークなど

必ず組織には、以上のようなものがあり成り立っています。自分の団体や組織にはどのようなものがあるか1つずつ考えます。……自分のところのクラブの組織文化。

参加者より：精神的シンボルを追加。「このようなシンボルがある」ということを、自分達からどんどん出してシンボルを作っていく。

○参加者からの意見

☆言語的シンボル……合言葉・武勇伝、滝の裏側に入る、アウトドアキャンプ（共通話題）

☆行動的シンボル……日本一のイモ煮会（自称日本一とすることで、みんなの団結が生まれる）
ツアーの後の持ち寄りパーティ・
ポプラの木

☆物理的シンボル……Tシャツ・帽子（同じ色の物・帽子を着用→団結を深める）



会員証(特別なもの、みんなの共通)、写真の背景に“長良川”が写っている。

☆精神的シンボル……郷土愛・持ち寄り精神

仲間同士のコミュニケーションを図る。得意分野で協力

「クラブ」というだけでもこのように分類することが出来ます。最後に特別なものを作ったり、暗黙のルールがあったりとクラブの組織文化があることで、どのような効果があるのでしょうか？ それは、会員同士のコミュニケーションを強化したり、コミュニケーションの維持などがあります。

クラブに組織文化があることで、会員間（メンバーとメンバーをつなぐ強固なもの）の関係を強化することもできます。(会員同士のコミュニケーション・コミュニケーションの維持)

そして、コミュニケーションの維持以外に下記のようなものがあります。

→自然について考える。

→友情の強化

→専門性の向上（足りないところは補い合う、専門的な部分（得意分野の）を学ぶ）

→会の団結力・持続力・理解力（特別な会員証や共通のTシャツを作ることにより生まれる）

→環境意識の向上、理念の共有

組織文化を持つことで、普段は感じないことがこのように整理していくと、自分達のやっていることは特別！ それがあることでクラブのコミュニケーションが強化されていることに気がきます。

青木氏の方からエリア（拠点）のメリット・デメリットについていくつか挙げて頂きます。

遊びの中で拠点を持つことは重要です。

○メリット

★拠点を作った場合のメリットは以下の通りです。

- ・参加者の集合の目安になり場所がわかりやすく、安心感を与える。
- ・艇・備品の運搬の労力が軽減される。
- ・クラブの共有なものが維持管理しやすい。
- ・水辺への移動手段、インストラクターの労力が軽減される。

★施設を借りた場合のメリット

- ・トイレや、更衣室、風呂場など維持管理の手間が省ける。
- ・施設所有のマイクロバスなどの送迎（有料）が利用できる。
- ・レストランの併設があれば食事やパーティーが出来る。また、割引券などの発行についても両者にメリットがある。
- ・宿泊施設もあれば遠方から参加しやすい。

○デメリット

★拠点を作った場合のデメリットは以下の通りです。

- ・維持管理にお金がかかる。
- ・整理・整頓・清掃、トイレの汚れ・ゴミなどの管理が大変。
- ・装備品の品質管理が出来なかったり、行方不明が起こる。

★施設を借りた場合のデメリット

- ・家賃、入浴した場合の料金、特にオフシーズンの固定費は負担になる。
- ・施設管理者と契約書を交わしても社員同士の思いや行き違いなどが起こる。
- ・装備品を品質管理が出来ずに行方不明が起こる。
- ・レストランの併設があればまずくても高くてもそこで注文しなければならない。

施設を借りる場合、施設管理者との温度差があり、借りる方、貸す方お互いのコミュニケーションが大切です。

施設があれば便利で、なければ不便です。

■ 第二分科会 【 生 活 】

中国新聞ビル 703会議室

「川と生活の関係の理解を深め、豊かな人間性や心の通った人のつながりの醸成。」

コーディネーター：平山 康弘、佐藤 陽平

話題提供者：松田 麗子（料理研究家）

平山さん：今日は分科会（生活）川について意見交換をして行きます。

コーディネーターをする平山です。私自身は神奈川県の高見川で活動を行っています。今日はみなさんから「うちではこんなことをしている」など、意見をいただきたいと思います。今日の話題提供者である料理研究家の松田麗子さんに話を伺います。



まず、松田さんからの話をお願いします。

松田さん：私にとっての川は8年前に主人がなくなるまで1週間に2回は川に行って手作りのお弁当を食べる場所でした。

川へ行くきっかけは主人が大酒飲みで家にいるといつも一日中お酒を飲んでいたので健康に良くないと思い川に引っ張り出すためのお弁当作りでした。川で素敵な岩の上でお弁当を開き川のせせらぎを聞きながら自然の中で食べるお弁当は最高でした。

若い時の川はデートを何度も楽しみました。昼の川も夜の川もそれぞれ素敵でした。結婚してからは、川は私達にとって自然の食卓となりました。川の自然の中で色々なお料理を考えました。自然に触れながら石探しもし、漬物石や箸置きに丁度よい石を拾いました。いままで拾った石は思い出になっています。河原の石を拾って色々と夏のコーディネートをするのが楽しかったです。つたの葉っぱを石に巻いて水盤に置いたりして、インテリアの飾りとしてとても素敵でした。

箸も自然の中にある小枝を切って使ったり、拾った葉っぱをコップにくるんだりフタにしたりしても自然の感じが出てよいです。河原にすだれを広げて葉っぱを置いて、その上に食べ物を置いたりすると心が豊かになります。

今は子どもの頃にやった笹船の競争なども見られなくなってしまったので、昔のように人と川との関係を取り戻すことが大切なのではないかと思っています。

平山さん：自分達の体験活動ではヘルメットやPFDを準備して「いざ！」と意気込んで川へ行くことが多いですが、皆さんの中で松田さんのように川が生活の場になっている人はいませんか？ 川と日常的にこんな感じで付き合っているよというキーワードを紙に書いてください。

質 問：河原にはどのようなお料理を作って持って行くのですか？

松田さん：シンプルなおにぎりや玉子焼や野菜の煮物、きゅうり、セロリであればたて半分に切って切り口に味噌をはさんでラップにくるむと丁度昼にはそくせき味噌づけになっています。まるごとかじりながら食べます。河原でかんたんに楽しめる料理を楽しんでいます。新聞紙に紅葉した葉っぱを敷いて料理を盛ったり、野外の自然のものを利用して食卓をコーディネートしたりします。川を見ながらの食卓は幸せになり、癒しにもなります。また、河原に生えている草も結んで箸置きにします。「わいわいがやがや」のただの河原のバーベキューだけでなく、自然のものを使って演出した食卓を楽しむことも大切です。

河原での野外の料理教室をやってみたいですね。昔から河原では大なべを使った芋煮会が盛んで、仙台は味噌で豚肉、米沢はしょうゆで牛肉、四国の川でも芋煮会をやっています。川に人を集めるためには食べること（食べるイベントなど）で集めたり、子どもの頃にやった遊びなどをやってはどうでしょうか？ 川との生活はとても大切であると思います。

平山さん：松田さんは川が生活のステージになっており、川の石や葉っぱなどを持ってきて家の中に飾っています。野外キャンプのようにたくさん準備をするイベントではなく、簡単に食材などを川に持っていく、石や葉っぱを川から持って来て食卓やインテリアに工夫するという日常的な川の接し方ですね。

○日常的な川と生活（意見をもらって）

参加者：仕事をしているところが中央森林公園です。沼田（ぬた）川がゴミで汚れているので、きれいにしようということになり、川での芋煮会を計画しています。
以前は河川敷で犬の散歩をしている人がいましたが台風で増水してからゴミが増えました。イベントは限られた人数でやるのではなくたくさんの人に関わって欲しいと思っているのですが、食べるということを中心に仕掛けをすると人が集まるのではないのでしょうか？

松田さん：川というとすぐにゴミ拾いというイメージがあります。夏はそーめん流しなどをして、秋は芋煮会等をすすめています。活動の提案をしていますなかなか動いてもらえません。

参加者：雪が多くて、川は雪を捨てる場になっています。冬場には水の流れはけんかの元になっています。町の中に水が流れており、複雑に流れているので、勝手に自分の都合で川を止めると他に水が回らなくなってしまいます。

地元では水が豊富で川の水を使つての洗い場がありました。その発想が面白いと思っているのですが、洗い場は共有の場であるので新しいゴミ置き場になったりもしています。もったいないと思い、集まりの際にゴミを捨てないように言っても価値が分からない人がいます。九頭竜川の河川敷がグラウンドになったりサッカー場や野球場になったりして、川は釣り人が占有、遊び場のない子どもたちは街中の噴水のコンクリートの場所で遊んでいます。「本当にそれでいいのか？」と思うことがあります。山の奥でも都会でも人々の考え方は同じであると思います。

平山さん：都会だからではなく、自然の中の人たちもそうなのですね。

参加者：芋煮会の話ですが実家が仙台です。子どもの頃から芋煮会をずっとやっていました。自分たちは材料を個別に買ってきてやっています。今は実家が遠くてなかなか帰れません、芋煮の時期は秋で、川遊びは夏です。秋に川に行くことが少ないので秋に河原で芋煮もよいと思います。

松田さん：仙台、山形の芋煮会は有名で、芋煮会をビジネスでやっているところもあります。芋煮セットとお酒を河原に届けてくれたり。河原でないと芋煮会は似合わないと思います。砂地ではあまりイメージがないですね。秋にやると気持ちがよいです。

参加者：山の中で火を炊いたら危ないので河原でいいですか？（安全面）

松田さん：芋煮会ではゴミは業者が持って行ってくれるところもあります。基本的に自分たちは自分たちで出したゴミは持って帰ります。

参加者：自分は太田川の三滝に住んでいます。散歩をしながら帰りにゴミ拾いをして駅でゴミを捨てて来ています。はじめは数名のグループでやっていましたがだんだんと人が少なくなってきました。満月に清掃会があります。汽水域なので潮が引くとゴミが出てくるので拾いやすく、良いアイデアだと思います。活動は継続することが大切であると思っています。

平山さん：川と生活というとゴミ拾いのイメージが強いのでしょうか？

参加者：夏に子どものころ（12年くらい前）は泳いでいましたが今はゴミが多くて泳げません。地元の人たちなどゴミを何とかしないと気づくことが大切です。きれいな川でも今は泳いでいる人をほとんど見ません。学校にプールが出来たことによって川で泳がなくなりました。学校は川で泳いだりすることは責任体制があるため監視人がいないと泳がせません。川のように深いところ浅い所がないようなプールで泳いでいると人間の本能がなくなると思います。川をうまく利用するよう自由に遊ばせるとよいと思います。川が身近になると川が遊び場になってゴミを捨てなくなると思います。

平山さん：川と付き合いがなくなるのでゴミを捨てる、生活の場になれば大切にすることですね。

参加者：最近河川改修で川に下りるところがなくなりました。川の水をダムに使ったり、電力に使ったりして水量が少ないです。ゴミがあって川が澱んでいるので、流れがあるとよいと思います。岐阜は海がないので夏は川に人が集まり、若者がたくさん来るの

ですが河原のマナーがとても悪く、ゴミをたくさん捨てていきます。河原がテーマパークになってしまっています…。翌日にはカラスがゴミに群がっています。

松田さん：川のそばで朝市など人を集めるのはよいと思います。

平山さん：日常的に「芋煮会」だったり「とんど焼」があつたりすると、何かあるごとに川に行きます。

参加者：広島駅の前に川がありますが20年前はとても汚かったです。最近はきれいになってきました。

平山さん：ほとんどは生活圏から離れてしまって、「芋煮会」や「とんど焼き」などのときにしか行かなくなっています。最近の川はきれいになってきていることを浸透させて行きたいですね。

参加者：7月末に「子どもの水辺サポートセンター」が愛知県の瀬戸川で、川で遊びたいという子どもの夢を実現させました。瀬戸市の市役所の人は環境整備を行っていますが、川で遊ぶことを考えたこともないと言っていました。川に面してはいるが川に入らない、遊ぶノウハウなど、川に入るきっかけをつくることが大事だと思います。

参加者：川の中から岸辺を見るのはとてもよいと思います。川で遊ぶ場所を作ろうということになると作っている場所と作っていない場所が規制になってしまう。拠点を町につくるとそこだけで遊びましょうということになって、そこしか整備しないことになってしまう可能性があります。流域には川遊びにとてもよいところがたくさんあるので、流域のいろいろな所を見て川の流域との連携を考えたほうがよいと思います。

藤吉さん：多自然型川づくりを行っているが、今まではスポットで作っていましたが、現在はそれらを繋げていく段階になっています。川のことを日本語では川としか言わないけれど、アメリカではいろいろな呼び方があります（豊かな言葉）。日本語では家の前を流れているような川や大河でも川のことは川としか言わない。川の状況によって川の呼び名を変えていったらどうでしょう？ そのようなことから始めていけないと思います。日本では「水に流す」という言葉がありますけれど、実は川に流しても何も精算されません。日本の沿岸では漂着ゴミの問題がありますが、海のゴミは川から来ています。これからはみんなで意識を変えていけないといけません。川に入ってゴミを拾ってみてはどうでしょうか？ いろいろなことに気づいて欲しいと思います。川に対する狭い考え方を変えていく必要があります。既得権ではなく水利権の影響が大きいと思います。それらが改善されると川が自由に使えるようになると思います。

平山さん：それぞれの紙に川に行くきっかけづくりのことを書いてほしいと思います。後の全体会で発表をします。

■ 第三分科会 [環 境]

中国新聞ビル 704会議室

「川との関わりを深め、大きな自然を育む川を未来に伝えていく社会づくり。」

コーディネーター：森 美文、田中 謙次

問題提起：保光 義文（環境サポーターネットワーク、「瀬野川ホテルの会」代表）

担 当：上野 豊

保光さん：ホテルと環境について考えます。

安易にホテルを飼育し放す事は良くありません。

ホテルをターゲットにして、川の水質を代表させている傾向がありますが、違います。ホテルの放流は一時的なものでしかありません。

むしろ、ある面ホテルが生態系を壊している傾向があります。それは、他地域、他水系のホテルを持ってきて（買ってきて）放しているケースなどです。



森 さん：ホテル以外のもので、環境を象徴するものはどんなものがありますか？

[挙げられた意見]

- オオサンショウウオ ● イトウ ● 川調べ ● 水草
- クウシンサイ（野菜） ● トキ ● 遊歩道 ● アユモドキ
- ヤマセミ…ダム湖などでは比較的に見かけるが、広島市周辺では見かけない

参 加 者：生き物は見られる時と見られない時がありますが、事前に調べていけば大概見られます。

中越さん：見られなくてもよいし、見えないことにも意味があるのではないですか。

久住さん：トキが飛んできたら市民の考え方、感じ方が変わりました。いつもいなくても良いので、環境を考えるきっかけになれば良いのではないのでしょうか。

保光さん：クレソン等外来種がたくさん入ってきています。中越先生、減らせないものなのでしょうか？

中越さん：川が氾濫することがなくなってきたので、植物を流さなくなったので、難しいですね。外来種を排除するのではなく、共存もしくは在来種の保護しか手がないのではないのでしょうか。また、私たちは被害者と見ていますが、加害者でもあります。フロリダのナンテンの事例がその例です。

森 さん：ホテルを放すのではなく、ホテルが棲む環境を作る事が大切です。多くの方に環境について考えてもらう方法を考えています。

保光さん：伝える側が知識不足、勉強不足であると曲って伝わる人が多いので、しっかり調べ、学んで伝えることが必要です。

久住さん：見附市に「ギフチョウ」を採集するコレクターが来ます。保護しているので、採集を禁止していますが、一部のコレクターなど禁止しても採集しに来ますし、採っても残るものは残ると言って聞かないので禁止してもムダな状況です。

中越さん：その様なコレクターの発言はとんでもない発言です。「ギフチョウ」だから採取して

いるのであって、「ガ」などであれば捕獲しないでしょうね。

保光さん：環境保全、環境の改善ですね。

古南さん：河川管理者として人が川に近づけるよう、出来る限りの事はやっていますが、治水と環境とのベストマッチでやっているかは何とも言えません。住民の方々に考えてもらいながら事業をやっています。

保光さん：工事区間を短く区切り順次工事するほうが長い区間を工事するより環境は壊れにくいです。

参 加 者：阿賀川では「阿賀川方式」といわれている住民合意形成方法があり、委員会の中で、全体的な生態系やその中の貴重種や外来種なども取り上げながら意見交換しています。

参 加 者：環境保全では住民のモニタリングが必要になってきます。

参 加 者：オオサンショウウオをきっかけに環境保全に取り組んでいけたら良いと思います。

参 加 者：まず行動をおこすべきです。意識をもっている人がやればよいと思います。みんながわかりやすいキーワードを作り出せば、長い期間で取り組めるのではないのでしょうか。

■ 第四分科会 [防 災]

中国新聞ビル 706会議室

「川の持つもう一つの顔を知り、安全な川との関係の構築。」

コーディネーター：北川 健司、谷 光承

話題提供者：向田 隆史（太田川河川事務所）

北川さん：コーディネーターの北川です。RACの人材育成部会長をしています。さて、今日は防災をテーマに意見交換をします。

水辺の活動は、その特質から、RAC発足当初より事故防止、安全対策の配慮などの危機管理が他の活動に比べて重視されてきました。

しかし、地球温暖化等の影響による近年の局地的集中豪雨等の激増により、危機管理はこれまでの安全対策から更に一歩進んだ新たな段階に入ったと言えるでしょう。本日はこの現状を踏まえ、安全対策、防災についての取り組みを行っている太田川河川事務所の向田さん、白川流域ネットワークの谷さんに具体的な事例紹介を行っていただいた後、ここにお集まりのみなさんに防災に対するキーワードを挙げてもらいディスカッションを行いたいと思います。挙げていただいたご意見は集約した後に全体会で発表します。

○安全への取り組み、情報発信、啓発の事例紹介の前に北川氏から参加者への質問がありました。

北川さん：情報は発信する側と受け手側に分かります。発信側か受け手側か挙手をお願いします。

→参加者中の発信側、受け手側の割合は半々程度でした。

○上の質疑を受け、太田川河川事務所の向田氏から、紹介情報を発信する側ということを念頭に置いた上での事例紹介が行われました。



向田さん：昨年の都賀川、今年は沖縄と、急激な豪雨の激増による被害が発生してしまいました。

太田川河川事務所でも、水難事故を可能な限り少なくしたいという願いを念頭に置いた取り組みを行っています。太田川ではまず、行政、教育委員会、消防、警察による意見交換会を実施し、出された意見を基に事故を防ぐための工夫の一環として川の安全に関するリーフレットを作成、県内小学生児童1万7千名全員に配布しました。川の情報としては、ホームページによる情報発信なども行っています。

最近では、小学校3年生から中学3年生までの児童生徒に対し、水辺の安全・河川体験講座を開催し、川の楽しさと共に危険性について学んでもらっています。

○向田氏の事例紹介を受け、北川氏より最近の河川の新たなリスクの発生に対し、国土交通省を主体とした「中小河川水難事故防止ワーキンググループ」の紹介がありました。

○北川氏より、河川での防災をキーワード化して、書かれたキーワードは模造紙に貼り出して前方に掲示されました。

- ① 情報
- ② 自助・セルフレスキュー
- ③ 状況の把握

北川さん：情報を収集して、自分でどうするか判断して自分で避難をする。そこがキーワードだという事を（情報について書いた人たちは）感じています。

防災の情報については出す側と受ける側があり、また情報については2種類あります。お話いただいた中で言えば、メールの配信サービスやホームページなどです。これらは取りにいかねばならず、受け手の積極性が必要です。また強制的に送られて来るサイレンや緊急情報メールのようなものについても、これらをどう取得し、どう判断するかが重要となります。それらは発信側も受け手側がどうとるか考慮する必要があります。

それでは私達がどう取り組み、どう判断していくかについては既に取り組みが行われている谷さんから、市民団体が活動している活動例を紹介していただきたいと思います。

○事例紹介：白川流域リバーネット 谷氏

谷さん：水防災プロジェクトとして白川で行われている事例として以下の主旨の紹介がありました。平成19年度より活動を行ってきましたが、いろいろな課題があるという事で取り組みを行ってきました。白川でも実際にカヌーの死亡事故が発生しています。防災と水難事故の防止という観点から活動を進めています。自助、共助、公助と言っており、その中では公的な救助、消防、警察といったところからの支援が難しく、自分の身は自分で守る、また、家族・仲間を助ける、地域を助けるという自助、共助で、この2つのレベルアップさせる事を目的に進めています。活動は5つの項目に分けて行っています。

1つは出前防災の開催。防災についてはまだ敷居が高いので参加しづらいという意見が多く、そこでこちらから出向き講習をしています。参加者については幅を持たせるようにしていて、小学生くらいから、一般の自主防災クラブのような方、河川の活動

を取り組まれているような方を募集しています。

この他にも水防災河川活動リーダー講習会があります。これは大体1日の講習で、半日川の中に入っての川の実習などを行います。またプラスアルファとして救助を行っている方、救助の支援をしている方を養成する救助技能取得講習会も行っています。これはNPOの方や消防の方が対象で、3日間くらいの講習です。あとは川関係ではありませんが、防災資材の備蓄という事で釜などを自分達で持つようにしたり、またいざという時に使えるようにしておくために炊き出しの訓練もイベントで行ったりしています。

当初、実施に当たっては手探りの状態でスタートしました。PDCA（P＝計画、D＝実施、C＝評価、A＝改善）プランなども活用して計画、実施して、途中で評価し、改善に繋げています。年に1回、振り返りとして参加された方、また自分達も実施した方を集めて防災のワークショップを行い、評価し、翌年に改善を図っています。ワークショップの参加者は、平成20年度で80名から100名、行政、消防、一般の方など多数の方が参加されています。そういった面では次に繋げていける活動になっているのではないかと思います。

谷氏による事例紹介の後、質問、意見交換の時間が設けられ、以下のやりとりが行われました。

質 問 者：参加されている人数、イベントによって違いがあるのかも知れませんが、どのくらい、どのようなオーダーなのですか？

谷 さん：昨年は、整備基金関係だけで集まったメンバーで約600人、防災関係全部含めると1,000人程の活動になっています。割り振りとしては、出前講座が約300人、リーダー講習会が約50人、救助技能取得講座が約20人、防災資機材という事で約180人、防災プロジェクトという事で開いたワークショップで約80人から100人、これは平成20年度の参加者実績です。

北川さん：（向田氏に対して）この数字をどう思いますか？

向田さん：ずいぶん多いと思います。どのように人を集め、どのような方法でやるのですか？
我々のホームページにはなかなかアクセスがありません。なぜこれだけ多くの人を集める事ができるのでしょうか？ 教えていただきたい。

谷 さん：一つには、開催しやすい環境があると思います。開催している場所は、「川の学習館」という川に隣接した国土交通省の施設で、ここを研修施設として利用しています。講座に使用するライフジャケットやヘルメット等の機材などが一緒にあり、開催しやすい環境であります。広報に関しては、九州内でも活動しており、九州内でレスキュー関係の方たちに声がけしたり、白川流域内でのネットワークの方へ流したり、熊本河川国道事務所、国土交通省からも参加していただいている状況です。

北川さん：谷さんから言われた事で大きいのはやはり、「白川わくわくランド」です。

谷 さん：国土交通省の整備局、出張所の横に体験館があり、そこは市民が自由に来られます。日常的に。カナディアンカヌーが貸し出されています。

北川さん：そういう活動拠点があり、そこから情報発信している事が大きいですね。

谷 さん：やはり活動する側としてはやりやすいです。

北川さん：割と市民の人はわざわざ、事務所のホームページに行く事はいないでしょう。

向田さん：我々も河川事務所の中に、ゴギルームと言って市民が入りやすいようなスペースを作っていますが、河川事務所の中にあることもあり、あまり利用されていません。今年は、夏休みの子どもの宿題に太田川を調べるというものがあり比較的利用されましたが、まだ防災という意味での活用はされていません。

質問、意見交換の後、北川氏より以下のポイントが挙げられ、話が進められました。

北川さん：今迄頂いた意見の中だけでも、河川事務所と市民との連携が重要なポイントという話が出てきました。そういう意味で連携をされている方、連携例をお持ちの方。大内さん、いかがでしょうか？

大内さん：公官庁と一緒にやった事はありませんが、地元のクラブなどで講師を招いてやった事があります。カヌーや川遊びをしている人たちの意識は高いのですが、まだその連携に至っていないので、いい参考になればと思い参加したのですが。

北川さん：他に連携についてお話のある方はおられますか？

参 加 者：私は消防25年の経験者でもう退団しましたが、その25年の最後の時に、3日間で1,000ミリを越える雨が降り、救助の際に胸まで浸かっていました。2千何人いる消防分団で、生命財産を守るといってやっていたが、短時間のうちに大量の雨に降られて水が上がってきて、住民の方に対して何も出来ませんでした。何もかもが浸かった状態ではどこから何が来るかも分からず対応もできません。その時分かった事は、後から自衛隊の人が来ても、地理も現場の状況も分からないので何も出来ないという事です。だから一番大事なのは、集落や地域などの区長さん方が防災をちゃんと勉強しておかないと、お年寄りの方がとても多いので、その人たちをどう確保するかを、地域間で連携を作っていく事を絶対に進めなければなりません。

北川さん：やはり地域で防災力を上げるという事が一番重要だという事ですね。

参 加 者：情報については、取得する必要があるという話が出ましたが、やはり消防団は自然と全部分かるようにならないといけなし、そういう勉強会も行わないといけません。やはり消防の職員がやらなければなりません。分団で働いている人は小まめに動けるのですから、その辺りの教育をしてみんながどのような災害にどのような対処をしたらよいのかを、もう少し勉強させたらと思います。

北川さん：若い方、どうですか？

参 加 者：私は4月まで川のそばに住んでいましたが、家が水に浸かる事などは考えた事ありません。

北川さん：今から7年ほど前に起こった名古屋水害の際にはラフトボート6艇を持って、ナイトサーチ、いわゆる夜の避難活動の援助に行きました。なんで行こうかという話になったかという、水害の起こっている場所に孤立したカヌー仲間からSOSの連絡が入ったためです。とにかく周りはひどい状況で、警察も消防も自衛隊も来ていますが、何も

出来ない状態でした。そこで愛知県警などに連絡を取りながら現地に入りましたが、警察の方から「お願いする事も何をして欲しいという事も、何も言えない。」みなさんの安全を保障できないから、という話を聞かされました。そこで自主的に行動するという事になりました。

現地は夜でしたが、無線が自衛隊の強力な無線波のために使用不能、携帯電話は基地局が水没してしまっているため使用できない状況で、安全確保のため30分ごとに基点に戻るという事を繰り返しながら活動を行いました。そこでの事です、最初のうち、マンションに住む人たちは水道の水が出ているうちはわりと平静でしたが、水道水は既にインフラが破壊されている為、実際には屋上にあるウォータータンクに溜まっている水が出ているだけでシャワーやトイレに使ってしまい、やがてそれが無くなると次々とパニックになりはじめます。半日以上経ってから、多くは若い人たちでしたが、水が多くて避難できない為に食料をくれと言う人が多く、もちろん自分達の食料は確保して行いましたが、食料を求める人が多く分配しているうちに自分達の食料がなくなってしまうような状況でした。

我慢できずに荷物を頭に載せて避難してくる人もいましたが、下が見えず蓋の空いたマンホールなどがあつたら危険な状況で水没している中にはガソリンスタンドやトイレなどもあり汚染源ともなっていました。この時には空き家を狙ったと思われる不審船も登場しました。

救助については、漕ぎ手2名、救助者6名が乗船可能な8名乗りのラフトボートを使用しましたが、警察が使用する4名乗りのアルミボートより人が多く乗れる事と、ゴム製のため水没した車などにぶつかっても大丈夫なため、アルミボートが入れない場所にも入ることができました。また自衛隊のボートでは船自体が大きく、路地に入ることが出来ませんでした。

当時の状況として、愛知県警はお手上げの状態、また見回りに行った水防団もライフジャケットを着けずに行くなどいろいろな問題があり、後に愛知県警で反省会が行われたのですが、その時に出了意見は現在も共有されていません。こういった情報を共有し、精査、検討しておく事が重要です。

北川さん：今市民連携などとして、お話していただいているのですが、榮さんのところでも、昨年の全国大会の時に、炊き出しを食べさせていただきましたが、あれは日常的にやっているものなのですか？

榮さん：白川流域では炊き出しをやっています。また熊本市内の中心部の自治会長もやっており、町内会の炊き出し訓練も年1回行っています。

北川さん：それは行政主導で行っているのですか？

榮さん：いいえ、災害時に私は自分の町内を守らなければならず、どうやって自分の地域を支えていくか、または事故があつたらどれだけの役割が出来るか常に探っている状態です。

北川さん：今、受け取る側の意見をいただきましたが、発信する側としてはどうでしょうか？

ダム管理所の方：

行政から発信される気象情報、レーダー情報等はかなり充実していますが、まだまだPRが少なく、一般の方には知られていません。水位、雨量についても、取りにければ素晴らしい情報がたくさんありますが、まだ浸透していません。発信するほうでPRする必要があると思います。

北川さん：今、携帯電話で情報が取れるというお話がありましたが、皆さんの中で常日頃、携帯から気象、河川に関する情報を得ているという方、挙手をお願いします。

⇒8割くらいの方が挙手

北川さん：川で活動する人が多いだけあってここでは多いようです。アイリバーなどもあります。

向田さん：情報の登録については、全域ではなく、あるエリア単位でも登録が可能です。しかしあまり活用されていないというのは、役所の方の発信の仕方が下手という事でしょう。携帯に着信メールで届く方法もあり活用できます。

北川さん：何かあった時に、携帯にピピッと来る方法です。

谷 さん：一つは防災情報そのものが知られていない。またアクセスの方法が分からない。もう一つは活用の方法が分からない。そこでアクセス方法、活用の仕方、例えば上流が増えたら下流は何分後に増えるかの予想など、パソコンで実際にアクセスして教えるようにしています。

北川さん：場所によっても変わるものだ。都賀川のように5分後10分後にすぐに水が来るという場所はこの付近ではないでしょう。自分の活動エリアについてよく知るといえるのは非常に重要なキーワードです。谷さんが活動している白川の場合、カヌーの事故があった際に調査に行きましたが、あそこは上流がロート状で下流はそれが1本に集中するような構造になっています。そのため上流で降ると下流はすぐに増水する。事故があった時も30分で水位が急激に上がるなど、色々な要素が重なって起こりました。ここでは上流の方を常に意識していないといけません。川を知らないとこんな事は分からないという例になるでしょう。

吉野さん：自助の意識を国民一人一人が持てば地域も防災力も高まります。その伝承者として、広く国民に伝えるのがRACの役割でもあります。川で安全に遊ぶと言う事が地域の防災や川を知る、降雨時の川の状態の変化など川の状況は地域によって違います。それを伝えるために、RACの皆さんには地道にやってきていただきたい。最終的には人の力、日々の力だと思います。

参 加 者：発信側の立場としては、受け手側の状況として、なかなか意識、関心が高まっていないと思います。水害があった、事故があった、という時に受けて側も受ける体制が出来ると思います。情報については潮位などからほぼ全て網羅されていますが、やはり利用率が上がらないのが悩みです。国交省等ともリンクするなど、情報のネットワークを広げていきたいと思います。

大内さん：国民に防災意識を持ってもらうのであれば、携帯電話に最初から防災情報のブックマークを入れるというのはどうでしょうか？ 電話会社に働きかければできると思います。

北川さん：韓国では既に行われているものですね。

大内さん：今の状態では一部の興味ある人しかアクセスしないでしょう。誰でも使えるように防災のシステムを作ってくれたらありがたいのですが。

谷 さん：インターネットからの防災情報の入手については、紙に防災情報のURLを記入したものを使用しています。携帯電話用にQRコードも使用し、更に自分で入力して教えたり、川の学習館でも教えたりしています。

志水さん：私の地域では携帯電話を持っていない人が殆どです。行政としては、どこで警報を出すかの判断が非常に難しい。誰が受けるかについては防災無線を使用していますが、雨の日はマイクを使っても伝わりません。榮さんの校区では小学校も病院も揃っているので、「テストケースとしてこういう形で行った。」というものを発表しなければいけないようにも感じています。消防はこれまで火事だけの対応でありましたが、川についても待機するようになりました。先ほど吉野さんから川についての話がありましたが、川のキーワードでは弱いと思います。私達が行っているのは、白川を越水した道路と見立て、そこでの水難という事で対応するようにしています。ではそこに一番に駆けつけるのは誰か？ やはり行政の職員になりますが、自分の身を自分で守れるのかという疑問です。川流れも知らない、これが実情です。他の地域の川のイベントにも参加しましたが、どこでも市、県の職員は川に入りません。今年の講習では県の職員に入ってもらっています。消防関係者や市も、ラフトボートを持っていますが市のラフトボートについては白川が教えているというのが実情です。

吉野さん：今、志水さんのお話にも出ましたが、河川行政担当者が川を知らないという事です。リーダー講習も参加者が少ない。川の上からだけではなく、川の中から川を見る事も重要です。「全国一斉1万人・川の流れ体験キャンペーン」では国土交通省河川局河川環境課の岡田企画専門官も入っていただいたのですが、川に入ってみて分かった事があると仰っていました。自分達の川をよく知り、そこで考えてもらう事が重要です。

北川さん：川に入ってから何か変わりましたか？

岡田専門官：国からも情報提供や組織を通じて、県、地域に広まっていけばいいと考えています。

北川さん：都賀川の中小河川水難防止検討会で出た例では、57名の方が現場にいましたが、実は52名は助かっています。どうして助かったのかというと、そこにいた地域の人から「おまえたち早く逃げろ」という声が上がったためです。声をかけた人たちは、その時の状況が危険である事を知っていた。つまり地域の人の方が多くの人を救ったという事です。これを「地域力」と呼んでいます。地域力の向上を目指す、これが見えてきたと感じました。地域力を高める、これが重要です。河川管理者にも現実を知ってもらうことをどう進めていくか、そのために中央から発信する、地方から発信する、重要な視点だと思います。

名古屋水害ではカヌー仲間の家が水没するなど、その地域は壊滅的な被害を受けましたが、他の無事な地域から救助が出ました。上流で大変だったら下流の人が助ける、下流の人が大変だったら上流の人がこれを考える。地域間のネットワークも必要だと

思ます。

○北川氏より、川の防災に関して自分としての課題は何かという事を書くように指示がありました。

○北川氏よりこれまで発言をされていない方に発言の機会が与えられ、次の話が出ました。

地域の主婦の方：地域のネットワークが必要ではないでしょうか？

ポラペアレンツクラブ 松浦さん：

（激しい雨の後、アンダーパスが通れなくなる事を知らなかった事から）水害のリスクがある事を知りました。川の場合であればリスクの予測が可能。イベントなどを通して水害や安全について学ぶ機会の提供を行っているので、自分達も伝えていけたらと思います。

北川さん：まだみなさんに聞きたいこともあります時間がなくなってしまいました。いろいろな地域の様々な情報をいただき、1時間で収まりきれないような内容でした。有難うございました。

■ 第五分科会 「賑わい」

中国新聞ビル 707会議室

「川と人が共存する文化と賑わいの空間の創造。」

コーディネーター：春園 四郎、原田 秀夫

話題提供者：寺本 克彦（可部からすの会）

1. 話題提供

「可部からすの会」は、河川水運で栄えた太田川中流域の可部の町づくりの市民グループで、まちづくりの活動の一環として太田川の支流「根の谷川」で活動行っています。主な活動としては根の谷川クリーンキャンペーンで謝礼やジュースは出さないが毎年500～600人の地元住民が参加します。終了時間になってもなかなか止めて頂けないのが悩みの種です。



根の谷川の水質調査も行っています。パックテストを使った水質分析や水生生物の観察を小学生とともに実施して、調査の後には芋煮会を楽しんでもらい、参加の拡大を図っています。

また、根の谷川の灯り祭りなど大文字焼きが古くから続いているのは、可部と京都だけです。大文字焼きに合わせて、河川堤防に108個のペットボトルで作ったろうそくを設置したり、地元の高校生もペットボトルのペイントに参加しています。

会費も会則もなく、13年間活動を続けてきました。コアスタッフは15名程度で、会員名簿も作成していません。打ち上げを含め、一緒に遊んでいるという感覚で楽しみや情報を共有していけば他の団体との繋がりや活動が広がっていくと思います。

原点はイベントに参加した子どもが「楽しむこと」「笑顔があること」です。平均年齢は70歳弱であり、最近は頑張る高齢者として評価されています。

「まちづくりは文化づくりである」と考え、「昔からある祭り」「伝えたいもの、伝えたい環境」

を「続けていくことが大事」と考えています。

「賑わいのあるイベント」が目的ではなく、「場所作り、きっかけ作り」を提供し、新しい楽しみを生み出すことは必要です。

一緒に楽しむことが重要であり、イベントに参加し楽しんで取り組む過程から人の輪が繋がると思います。イベントへの参加の呼び掛けは、メーリングリストなどを活用していますが、最後の決め手は、メンバーが学校などへ一軒一軒出向いて「フェイストゥフェイス」「口かけ」でのお願いです。

活動費はないという前提で動いています。ボランティアなので何とかなりますが、活動費が必要なときはうまく情報発信をすれば寄付は集まります。(地元のオフィシャルな団体と連携しており、公的な助成金はそちらが受け手となっています。)

イベントなどの寄付をお願いにまわるだけでも、会や事業の宣伝になります。

町内会や自治会に継続して何年も情報提供することで事業に参加してもらえるようになりました。また、地域住民が自主的にやる「祭」が大事です。まちづくりは文化づくりであり、川は文化を育む源であります。今後も川を生かして文化を創造していきたいです。

2. 意見交換

参加者の意見交換の結果、賑わいづくりのキーワードは「継続する」、「伝える」、「文化」としました。それぞれのキーワードごとに主な意見は次の通りです。

(1) 継続する

- 新しいことを考えるよりも、今実施しているものを充実させることが大切である。
- 「出来る人が出来るときにやることをやる」といった地道な活動をやることが大事である。
- イベントをたくさんやることが大事であり、イベントを常設化し毎日何かをやっているようにしていかななくてはいけない。
- 賑わいづくりは続けてやることが大切である。イベント主催者が楽しむもので、祭りは参加者が楽しむもの。イベントが祭りに切り替わり、行きたいと思う場所づくりが全国に出来ていけば賑わいに繋がる。

(2) 伝える

- 町内会などに早めにどんどん情報提供し、継続的に取り組んでいることが大切である。
- 活動に使う船は市や銀行、企業などから寄付を受けているが、寄付した団体に喜んでもらえることが大切である。新聞などで船が紹介されるときには私たちはまちづくりを応援するという言葉と企業名が掲載されるため、企業側のメリットも大きい。

(3) 文化

- 上流域には人口が少ないので、賑わいを作るためには人口の多い下流域とのつながりを活かして人を呼ぶことが大切である。鉄製品づくりなど上流と下流の文化的なつながりも生かしたい。
- 地域の賑わい作りのためには、祭りを大切に必要がある。

(4) その他

- 川は海にも山にも繋がっており、川を良くするためには、川の上流も下流も海も山も良くし

ないといけない。

- 企業も民間も応援したいというふうにならないと大きな地域づくりができない。そのためには会費も会則も必要だと思う。寄付したいと思う人はたくさんおり、そのような人をつかんでいく。会費・会則があった方が市民や企業が応援しやすい。
- イベントは手段であって、目的ではない。町づくりなど、大きな目標を持っていこうとみんながついてくる。
- “賑わい”の原点は何かということをつかむ必要があり、なぜそこにくるのか、どんなことで子どもたちは喜んでいいのかなどをつかんでいく必要がある。
- いろいろな地域で楽しい活動が様々に行われており、それらの良い部分の真似をしながら行うことは必要である。「楽しい活動は真似るべし。」

(5) まとめ

川での活動が「地域づくり・町づくり」につながっていきます。祭りにはリズムがある。参加者同士が響き反響があります。

現代は日本全体としての共同体であることが失われていますが、復活するためには「自然がある」ことが必要であり、また都市にある自然としての川に着目すべきです。

そこで「場所・プログラム・クラブ」プラス「安全・防災」を加える→川のファンを作っていくことも大切です。

「川の風景」「川の癒し」や曲った川や水辺の竹やぶなどの環境を改善したり「川の安全学習」の出前講座を行います。「川のファン」を作り、流域の「川の上流から下流まで」つないでいく。川を作る「ワーキンググループ」を作ろりましょう。

拠点となる「川のクラブハウス」を作り、カヌーやPFDを置いたり、PFDを洗えるようにしたり、スローバックを手製で作っても面白いと思います。

分科会を終了し、10分ほどで各リーダーによってまとめに入りました。全体会の開始です。各分科会で話し合った要点を皆の前で簡潔に発表していきます。発表に続いてコメンテーターとして小谷寛二氏に総括をしていただきました。

総括・コメンテーター：小谷 寛二

■ 第一分科会 【遊 び】

山下 雅彦

川遊びするためにはエリアとプログラムが必要です。クラブは出来てから1、2年で組織文化を持つようになります。今回は組織文化の分類をおこないました。言語的シンボル（物語など、武勇伝）、行動的シンボル（自然にそう動く、自然に酒を持ち寄るなどの暗黙のルール）、物理的シンボル（写真、マークなど）、精神的シンボルなどがあります。



このようなことからクラブ員同士の特別意識、理念の共有や連帯感が生まれてきます。組織文化は会員同士の意識を強化していると言えます。クラブに関してはもっと時間をかけて掘り下げて話すことの出来る話題です。

■ 第二分科会 【生活】

平山 康弘・佐藤 陽平



今回は生活がテーマで話をしました。川と生活の繋がりは何か？ 魅力は何か？ 川のもので日々の暮らしを豊かに出来ます。石を使って箸置きにするとか、川を食卓にする（シンプルな物を美味しく食べる）芋煮会の話も川に繋がっています。

問題点は何か？ ゴミ問題が出ました、川に行ったらゴミ拾いをする。コンクリート張りで水量が少なくなった、水利権や、学校のプールができて川に行かなくなったなど。川で夏以外には何ができるか？ 生活圏から川が離れてきました。

そのような状況からクリアーするためには繋がりを作るなど、無理に拠点を作り過ぎないで、誰でも川のどこでも遊べるようにすることです。

川という言葉、川の表情や新しい言葉や文化を作ってはどうかという意見もありました。川に子どもたちを連れて行くきっかけとして川の清掃や子育て、川祭りや散歩会などのきっかけ作りをする、また、川から岸を見るなどの意見もありました。

■ 第三分科会 【環 境】

田中 謙次・森 美文

環境はとても幅が広いテーマです。話が様々な方向に行ってしまいました。

まず、はじめにいろいろと質問をしました。話題提供でホタルの話を聞きました。ホタルを軸に地域展開をしたなど、みなさんの周りを主軸に展開していることがないか聞きました。



生き物を主軸に展開していること、ヤマセミ、トキやオオサンショウウオ、水草などの貴重種を目玉に地域を保護していく事が地域を高めていくのではないかと話をしていきました。

固有種など日常にいる生物も大切です。例えばヤマセミを見たいと思いついてぱっと行っても見られるものではありません。見えないものを見つける方法や外来種を知ること大切です。全体の生態系を知ることによって理解する、知る事自体が大切です。また、日本種も外国では外来種です。

生態系全体のバランスを知ることによって、その中でどうしたらよいか、いろいろと調べてはどうでしょうか？ 案外地域外の人が指摘をしてくれます。行政では地域を保護区域や禁止区域にしたりして悩んでいます。われわれが生態系を調べて地域の人に知らせることによって地域にあった自然保全ができると思います。

手段として伝えるときにうまく正確に伝えることが大切です。伝える側も勉強をすることが大切です。勉強会や講習会を行う事や地域の子どものための総合学習の素材にも出来ます。一例として貴重種も重要だけど固有種も大切だという福島では固有種を調査するなどの阿賀川方式などもあります。

いろいろな地域で地域の貴重種を目玉にしていますが、それをきっかけに全体を理解することが大切であり、またその大切さを多くの人に正確に伝えることが大切です。

■ 第四分科会 【防 災】

北川 健司・谷 光承

参加者には、行政や河川管理者の方を受け手として、川で活動している人たち、河川管理者や川の活動をしている市民団体が参加しました。

向田さんから太田川の河川管理の情報発信の苦労話を聞きました。白川わくわくランドの市民団体として独自に展開している防災の話もしていただきました。



防災についてキーワードをもらいました。情報発信や「自分たちでどうしたらよいのか？」などがありました。参加者の方に話の中で防災についてどのように考えているのか聞きました。

RACでも川に関わっている者が防災でどのようなことができるか？ということが今後テーマになると思います。

いろんな形で情報の発信をしています、どのように伝えるかで苦労しています。

白川の流域では1年で1,000人くらいの参加がありました。太田川の向田さんがこの人数に驚

いていました。白川では市民団体ならではのネットワークを作り、白川（白川わくわくランド）の拠点があり、拠点からの発信をしたことが大きなポイントです。開かれた場所を置くことが地域の力を強くすること、地域のネットワークや市民の活動が一つのポイントだと思います。具体的には川内川から水防団が参加して現場がどうだったのかという話を聞きました。地域の力を強くする、地域に住んでいる人たちが情報をもっている、そして地域の人たちがネットワークを持っている。地域の活動がやはり市民の活動としてポイントだと見えました。そのために行政と河川管理者と市民がどのように連携するのか、RACの地域にある団体がどのように市民と行政を繋いでゆくのかを議論しました。

- 自分の身は自分で守る
- 防災情報が大切である。
- 防災情報が出てきている。情報だけでなくどのように生かしていくか？ 防災の情報についても川を見て体験をしないと良く分からない、川で自分の体験を通して学ぶ。
- 行政や民間の活動の情報をどのように発信していくのか、どのようにネットワークを構築するか？

などの意見がでました。

第五分科会 「賑わい」

原田 秀夫・春園 四郎

賑わいはとても難しいと思います。

「可部カラスの会」と「新町川の話」の2つの団体から情報もらいながら意見交換をしました。

「可部カラスの会」は会費も規則もない団体です。クリーンキャンペーンやウォーキングなどいろんな活動を行っています。町にあるトイレのタイルに子どもたちに絵を描いてもらったり、隣町と歴史的な関係で結納船を出したりしてユニークな活動をしています。



徳島では川のイベントで毎月末1,000円の会費でお祭りをしています。毎月ゴミ拾い活動も行っています。それらの話題提供をもとに皆さんから意見を聞きました。

その中でスマイルポイント、子どもや大人がニコニコする場所が川にあればにぎわうのではありませんか？ 例えば「可部カラスの会」についてはいろいろな地域の人たちが参加しています。活動を地道に行っているいろんな人が集まっています。クリーン作戦は上流と下流からスタートして中流で合流、合流地点で芋を焼いたりして活動を楽しみながら行っています。

活動では地域の人たちが参加をして、会の方からは出前をして声掛けを地道にしています。

活動というと楽しみがあります。その他の団体とうまく続けられると思います。

継続するというのは出来る人が出来ることをやる、毎年、毎月実施する。学校の活動を毎年同じ時期に開催すると学校なども活動がしやすいです。

伝える、地域情報を伝える声かけや人と人の交流の中で情報を共有します。川は上流から下流までいろいろな文化があります。昔からいろいろな文化交流がありますが地域の人が多いところ

から少ないところに来てもらう仕組みづくりをします。

「イベント」と「祭り」の違いはイベントには実施団体がおり、祭りは参加者が作るということです。地域住民が自主的に行う祭りが大切です。ポイントは「楽しい活動はぱくる（真似る）べし」。

「他の団体の良いところを真似しよう」

中越氏：生活という生業を無視するのはいけないと思います。その川で漁業があるのならそのことを絶対に忘れてはいけません。

小谷氏：5分科会から報告をしていただきましたが、ここで強引にまとめてみますと、今回5つのテーマでは川の活動がまちづくりになっているということです。まちづくりのキーワードはワーキンググループがいるということです。仲間がいて人が祭りをやる中心になる。祭りには反応があり、集団にリズムができます。祭りのために地域の人々は一年間準備をし、女性も子どももみんなに役割があります。共同体は共振し合う、そして大きな波動をつくり大きな波を作ります。イベントでは住民の中に波は出来ませんが、祭りでは大きな波が住民に出来ます。最近の日本は祭りが少なくなってきました。

最近、日本の共同体は死んでしまいました。かつての農村における運命共同体は廃れ、企業共同体によって存続することとなりましたが、企業では最近リストラが多くなっています。そのために企業のための共同体がなくなっています。そして、学校は学校文化だけになっています。昔ながらの共同体を復活させるには人間の体も自然なので自然の力がないと共同体ができません。都市には自然がないので共同体は出来ません。つまり共同体は自然の力がないとできません。都会で自然があるのは川だけであり、川に目を向ける重要性がここにあるのです。遊びにおいては場所とプログラムと仲間が大切です。学校に行っても学校にはカリキュラムはありますがプログラムはありません。40年間、人々は川から遠のいてしまったので、それを取り戻すことは大変です。学校では危険なことはしないことがリスクマネジメントです。もちろん活動をするためには安全確保をします。そこで出てくるのは、「場所」と「プログラム」と「クラブ（集団）」に行政を加えて一緒にやらないと活性化はしません。

今回の5分科会での議論は簡単に言えば川のファン、川のクラブ（集団）作りです。しかし、ワーキンググループがないと何もできません。

第1分科会、生活と川が離れ、遊びと川が離れて行ってしまいました。文部科学省は1週間に1回スポーツする人々を50%にすることを目標に掲げましたが達成されていません。達成されない理由の一つとして施設がないといいますが、川というフィールドがあります。もう1つのキーワードは繋ごうということです。

第2分科会については、川が生活の場になっているのか？ということですが、川に行ったら川にある石や葉っぱなどを持って帰る、そこで心が豊かになります。そして川は絵

になる。川は曲がっているのでセクシーです。川のものを持ち帰って家庭の中に潤いが出来る。

第3分科会、風景とか癒しなどが川にあります。生命を燃やす環境が必要です。環境といえ水質や川の浄化も大切ですが、川に行ったら本当に癒される、生命を燃やすような環境がわれわれには必要です。

第4分科会、防災などの情報発信する人は誰か？ 発信する人たちが行政だとしたら、発信する人たちはあまり川に入っていないから川の事があまりよく分かっていません。伝え方が分からないようです。地域情報をどうやって伝えるのでしょうか？ 川に入ろう…。川のプログラム（出前方式）をたくさん持っていることや、川のプログラムを実践するクラブを作ることが大切です。川のファンクラブをたくさん作ることでクラブ同士がネットワークを作って防災に強くなってきます。

第5分科会、賑わい作り…で、新町川の中村氏は山から川から海につなぐ、繋いで広げる。広げると自然にお金は集まると言います。今年は不況で川の花火が出来なかったところが多いですが、新町川では花火は上がりました。取り組みが広がっていくとお金が自然に集まって来るようです。

そこで、広島からの提案として、「川クラブを作ろう！」という訳です。クラブは、プログラムを持っていますし、クラブには常設化した場所もあります。そのような場所が繋がっていくことが大切です。クラブが出来るとネットワークや場所ができて繋いでいくことになります。RACの活動によって、9年間でワーキンググループが出来てきました。なんとまじめにやっていることでしょうか。それだけ問題が深刻であるということだと思います。

クラブハウスを作ろう…。川の土手の横に間伐材でクラブハウスを作って。河川敷ではだめなので川の土手の外に作ります。クラブハウスにカヌーやスローバックを置いたり、PFDをかけたり、PFDを洗えるようにシャワー作ります。ちょっと、コーヒーやビールが飲めたりするカウンターがあったりして、そして各箇所で拠点を作って連携をすることが大切なのです。川のクラブハウス作りが今後のRACの拠点となるでしょう。



» 未来へのメッセージ

11:05～／中国新聞ビル 703・704会議室

本プログラムの最後の締めくくりに、海田町立海田東小学校校長の金沢緑先生に未来へのメッセージとして、「川に学ぶ持続発展型教育」についての講演を頂きました。

学校で取り組む川をフィールドとした総合的な学習の時間を通じ、子どもたちの変化や体験学習の意義を教育者の視点から、詳しく解説していただきました。

「川に学ぶ持続発展型教育」



広島県海田町立海田東小学校 校長 金沢 緑 氏

海田東小学校は児童数450人ほどの学校です。歩いて1分のところに川があり、赴任してきたときからこの川を利用した「ふるさと教育」ができないかと考えていました。川をテーマに先生方に協力してもらいながら、子どもたちと一緒に川のカリキュラムを作ってきました。川の体験活動している様々な団体がありますが、なかなか川の活動が学校に入ってきません。

今日は「良い子は川で遊ばない！」というような考えをどうやって打破するか、まずは先生方が川をどのように好きになるか、どのように川の活動を学校の教育に取り入れ、また地域の人たちに協力してもらうか、といった活動を紹介したいと思います。

「持続発展可能な教育（ESD）」という言葉は最近、巷でも盛んに言われるようになっていますが、英語でいうとなかなか先生方に理解してもらえないので日本語で「持続発展教育」と言っています。実際の活動についてはパワーポイントを見ながら紹介して行きたいと思っています。

「水と緑の東小物語」という名前を付けて川のカリキュラムを作りました。カリキュラム自体を物語にしたのは昨日の海田東小の生徒のフレンズ発表でもお話をしたと思いますが、その活動のストーリーが大事だと思うからです。1年間を通じて全学年で取り組むことも必要だと思いました。そのためにはこの物語の主体は子どもで、そして子どもたちを指導していくことが前提であり、また地域と協力をすることによって活動していかなければならないと思いました。

私たち学校の「川で育む感性、子どもと学び、遊び、魅力を感じ、川で変わる子どもの姿、川はふるさとそのものである」というところまでたどりついた経緯を紹介します。

学校教育の1年間の授業時間の内、総合的な学習時間の理科や生活などの時間を使って授業全体の内の35時間で川の活動の授業を行いました。学校の全体の授業の時間の分量でいったら大変少ない時間ですが、それでもここまで行うことができました。

本校でEボート体験を行ったときに広島大学の角屋先生の指導を受けながら学生さんたちが子どもたちを調査して「川を生かした自然体験で育つ四つの感性」という研究論文をまとめて発表しました。

①心的なイメージに関する感性、②水への価値付けに対する感性、③水の性質、④社会的な感性、以上の様な感性が育つということが実証されました。

「水と緑の東小物語」というカリキュラムは1年生から6年生までの全校生徒が関わり、文部科学省の学習指導要領に則って活動し、その中の総合的な学習の内容に川で行っていることを取り込みながら関連させていくことによって、学びを強化し補助し発展することができると考えています。

実際にこの活動は全学年通年で行いますが、そのときに大切だったものは環境サポーターの方々のとても優しいアドバイスや指導でした。プログラムでは実際に体感することが大切です。下流部は低学年、中流部は中学年、上流部は高学年というフィールドを持ちながら子どもたちは育っていきませんが、学校の前の川が自分たちの生活に密着した川であるということが一番大切です。学校の前の川で①指標生物、②COD、③川幅、④水深、⑤流速、⑥水温、⑦気温などを調査することによって子どもたちが川は季節ごとに違うことを理解します。

初めて川に入る生徒や川の体験活動を始めたばかりの頃は子どもたちは川に入ってはしゃいでおり、主体は自分でした。徐々に川と自分との関わり方が変わっていきます。休日にも関わらず発表する場に出て行く意欲をもつこと、また、環境サポーターに連れられて川で生き物調べをすることによって、始めは汚いと言っていた子どもたちが好奇心を持って自分から進んで調べるようになります。川の活動を毎回シートに書くようにしました。自分たちが毎回粘り強くシートを書くことによって、いつの間にか楽しんでシートに記載するようになっていきます。また、水生生物を粘り強く見つけていくことによって自分たちの力が上がっていくことを実感します。この川でどのように水生生物を捕っていけばよいか、ただ闇雲に捕るのではなくて何回か体験することによって、生き物は真ん中にはおらず川岸の方にいると気づき、学習していくことになります。子どもたちにはこのように指導されなくても「気づき」や「自主性」が育っています。

「気づき」についての何気ない子どもの活動を先生が意味づけをします。「君たちはこのようなことができたのだよ！」と価値付けすることで子どもたちは今の行動が価値付けされていると自覚できるようになります。また、あまり積極的でなかった子どもがお友達に場所を譲るなど他者への配慮も育っていくことも大事だと思います。

カリキュラムについては学習の順番や重要性のキーワードを書き込んでいくものなので先生たちが書き込んでいます。

さて、次に子どもの変容について話をしたいと思います。現在、川に行き始めて3年目になりますが、この絵は初めての年の5月にいったときに3年生のある子どもが描いた絵です。田んぼの絵で文章は「おじさんが田んぼを耕していました。」とても投げやりな絵と文ですね。この子どもは描くことが大嫌いでしたが、次の回に行ったとき亀を取った絵を詳しく描き、生き物の情報を絵で表現をしていました。視点が田んぼから川に移ってとても興味が出ていることが分かります。

今までの彼の興味は大きな生き物でしたが、1ヶ月後にまた変化が見られ、今度は「スジエビ」と「ヌマエビ」など石の下を生物を捕まえることが出来ました。小学校の子どもは「楽しかった」、「面白かった」、「また行きたい」という3文で総括してしまうクセがあります。指導者はこの言

葉で満足せずに子どもたちに活動の意味付けをしなければなりません。子どもが指標生物に目がいったことや気温に興味を持ったことなどを褒めます。石の下に注目し目立たない生き物や生き物のすみかにも目が行くようになったことも褒めます。この子どもは今、5年生になって学級の中ではリーダー的な存在になっています。先生は子どもの書いたシートの記録で日々指導を行っています。子どもたちは生き物の名前は知識として覚えますが、ゴミのような生き物に命や名前があることや小さな生物は自分たちの住むところを大事にしているのを真剣に見ています。

川の学習を行っているうちに次第に子どもたちはたくさんの情報を自分から進んで書くようになります。

大人や世間では「川の中で汚いところに行ってはいけない!」という風調はありますが、身近にある自然が自分たちのふるさととして大事なところだという意識を育てたいと思います。4年生の算数の時間になった数の線を利用してヒルを線を筋で表します。「スジエビは長い形なんだけど?」「水虫の大きさはどのくらいかな?」とだんだんと子どもたちの視点が研究者の目を持ってくるようになっていきます。

「よい子は川へは行きません!」…「汚い」、「危険」、「気持ち悪い」ところである川の3Kです。子どもたちの保護者もこの意識で育ってきています。しかし、いざ川へ行ってみると案外きれいですよ。中流域や下流域でCODを調べてみても少し汚い程度です。

河川改修などによって最近の川はだんだんきれいになり、きれいになっていることをデータによって示すことも出来ます。また、川の活動時の危険については危険を危険と認識して初めてその川で安全に行動できることについての意識付けをして指導を行っています。気持ち悪いものも子どもたちに触らせてみると、「ぷよぷよしてふにゃふにゃして気持ちよかった!」などと意識や考えが変わって行きます。川の悪い3Kからよい3Kに子どもの意識改革をしていくことができたと思っています。

子どもたちの調査から川の体験活動を行なうことによって身につく資質を9点まとめました。

- ① 他者への配慮が育つ。
- ② 人間関係が育つ。地域の方やサポーターさんたちとかかわることになる。
- ③ 主体性（保護者の主体性）川に行かなかった子どもが休みなどに川へ行くようになった。でも、まだ学校では行ってはいけないということになっているので保護者と一緒に行くようになった。そこで保護者の主体性も育ってきた。
- ④ 社会性がつく。自分たちの活動を発表することによってコミュニケーション力がついてきた。どのようにしたら自分たちの活動を伝えられるか。
- ⑤ それによってそのことを誇りに思う価値観がつく。
- ⑥ 他者や川の生き物に対する思いやりなどの望ましい態度が育つ。
- ⑦ 川の生き物を飼うことによって、生き物は人間の体温でやけどをするということを理解する。また、どのようにしたら学校で生き物が飼えるかなどの知識や技術が身につく。
- ⑧ 感心や意欲が向上する。
- ⑨ 挑戦、向上の気持ちが育つ。

昨日、発表した生徒たちは決して全校代表の中で大変良く出来た子どもたちではありません。

子どもたちの中で意欲のある子どもを集めての「生き物フレンズ」です。この子どもたちを育ててきた先生たちの授業による意識改革が非常に大きかったと思います。川の生き物を1日だけ学校に連れてきて観察をして研究授業として全ての先生に広げていただきました。子どもたちの真剣なまなざしを見ると先生たちのやる気も起きてきます。生き物たちを見せた後は川に返します。そこで子どもたちは水生生物が1日置いただけで死んでしまうので「生かしておくにはどうするのか?」「どうやって生かしておくか?」移動のエアーポンプを持ってくることなどは子どもたち自身が気づいたことです。

その学習でつけた態度や学習の意欲が他の科目でも活きてきます。驚きを素直に表したり、グループの中で意見が違った人たちとも真剣に話しあってすり合わせていったりするようになります。すり合わせをするには言葉が必要です。子どもたちは自分の言葉で語ることで小さなグループの中でディスカッションが行われます。一人の子どもだけではなく実際に共同で観察をして物事を行っていくことが出来るようになります。川で培った力は物理の実験でも役立っています。失敗するような実験でも工夫をして最後にすり合わせていく工夫や技術を学んでいくことになります。指導してもらう方々への態度や礼儀も身につきます。それらが出来たときの喜びも大きいです。風力発電の実験で風が起きて動いていることも、川があることによって川風で動くことも、まさに自然の力が子どもたちの学習の力になっています。発電するということはエネルギー学習にまで発展していき、これに対する喜びも大きかったです。

周りにいる子どもたちも一人の発見に対してコミット（共有）していきます。宮島でおこなわれた牡蠣殻浄化の勉強会で土曜日曜に子どもたちは電車に乗って勉強会に参加しました。この勉強会で学んだことを6年生の授業で学校前の川の中流域で検証実験にまで発展させました。学んできた子どもたちが他の友達に知らせます。この学習はうちの小学校の子どもたちだけでなくほかの学校の子供たちと一緒に行いました。子どもたちのその表情は真剣でした。川の水が流れ牡蠣でどのようにきれいになるのか、そしてその牡蠣は食べられるのかどうかなど、最終的には牡蠣ご飯にして食べましたが…。

Eボート体験は学習ではなく自由参加にして夏休みに行いました。しかし、4年生と6年生のほとんどの子どもが参加しています。いつもの学習とは違ったグループ分けで学習し、水のエネルギーを実感しました。Eボートは組み立てから体験します。ボートは思い通りに操船できませんが体験しながら学んでいっています。Eボートはリーダー性を発揮する子どもが出てきたときにうまくいきます。指導者については子どもの自主性に任せることにしています。どうやったらリーダーが育つのか目の当たりに見ることが出来ます。決して勉強が出来る子がリーダーになるわけではありません。乗り上げた子どもたちはどうやって脱するのか。体験することによって協力することが大切なことがわかります。達成感も味わうことができます。水しぶきは子どもたちの気持ちを表していると思います。川流れをして川から感じる体験が非常に大きな体験になっていると思います。川流れの経験から川の真ん中でないと流れないということに子どもたちは気づきます。天をあおいで流れているときに、水のつめたさや流れの速さを感じたり、水は意外と力があり、流水に逆らおうとしてもなかなか思うようになりませんが、自分でコントロールはできるのだということなど様々なことを川から感じる事ができました。川の活動の中で一番価値あ

る体験はこの川流れ体験だと思います。また、この体験をするには自分で健康管理をして健康でないとできないと思います。ここに参加した子どもたちは雨でも寒くても行くとやる気になっていく。大事なことに気づきました。

健康であり、健康管理を自分でやることが大切であります。

自然の中に自分を実感したときに、子どもが子どもらしく自分の言葉でしゃべり始め、心の知識や理解だけではなく体験中に得たこと、感じたことを話せるようになります。

しかし、川の体験は安全に気を付けてやらなければなりません。私たちはPFD（ライフジャケット）をつけて活動することはこの活動をするまで知りませんでした。今までは普段の服装で川に行っていました。子どもたちも川流れをしてPFD（ライフジャケット）の必要性に気づいたように思います。このときに体験した子どもたちはもう中学生になっています。この体験をして川への意識が高まっているので大人になったときがとても楽しみです。

普段生き物を触らなかった子どもたちの関心が育ってきています。JICAの環境についての人たちが年に2回くらい訪れると通訳を入れると時間がかかるので生き物フレンズの子どもたちは英語で発表しています。この活動によって先生たちもいろいろと学ぶことになります。子どもたちと英語の原稿を覚えたり、読みあったりしています。この活動をJICAの人たちはびっくりし、感心しておりました。

子どもたちは褒めてもらうことで意欲が出てきます。毎日の川の活動のほかに子どもたちが毎日決まった時間に水温を調べて水温の変化をグラフに記入をして調べています。天気、水温をPCでデータ管理しています。地球環境のための学習プログラム（グローブ）で、そこで世界に向けて発信していくことが出来るので、子どもはこの活動に意義を見出しています。

体験発表の場では一緒になった高校生に対しても自分たちは主体的に話していかなければなりません。ただのコミュニケーションの「こんにちは」と言ったあいさつではなく、コンテンツが必要であると思います。子どもたちは発信していく材料をたくさん持っているの中で相手と同じコンテンツを選び出して話しをして行くことが出来ます。選択と集中が必要です。たくさんの川の活動の中で高校生に何を持っていけば分かるのか、この高校生が教えてくれていることが自分たちの学習のどこに当てはまるのか、それを踏まえて自分たちも発表したり、意見交換したりすることはなかなか学校では教えることが難しいです。校外に出て行くことによってついていく力であると思います。英語の発表についても自分たちが日本語でしっかりと理解しているからこそ英語で何が伝わっていったかが肌で感じられると思っています。

川で持続可能な教育（ESD）を支えるものは好奇心であり、関心意欲であり、道徳性であり、最後までやりきる責任感であり、どうやったらこれを発表できるのかという見通しであり、自分たちが健康であるから出来るのだと言う健康意識であり、まさに川にはいろいろなコンテンツがあり、育てる道具があり、地域や社会や他の学校や世界と繋がっていることがあると実感しています。

川でのESDが子どもの学習能力を高めるということが少しわかってきています。これから研究の対象になると思います。川のESDがどれだけ大切かと言うことを本校だけでなく全国的に川の教育を行っている学校と連携をして本を出そうとしています。

（財）河川環境管理財団の支援で現在、委員会を立ち上げて体験型学習プログラムの事例集を作成して、学校での川の教育を目指しています。

学力については、川で得た情報を自分から発信したり書いたりすることが出来る子どもが80%増えたというアンケート結果で実証されました。これは学力向上にも繋がっていくと思います。3年生から6年生までテストを行った結果、私たちが期待していた点数は80点でしたが、ほぼ目標に到達していると思います。これをデータにしながら子どもたちの学習に活かしていきたいと思っています。全国学力評価が行われていますが、A問題は基礎基本、B問題は自分の考えや表現力が問われるテストとして位置づけられています。基礎の問題で少し足りないところがありますが、広島県の学力レベルは高いです。B問題については広島よりも点数が高くなっています。全国に比べたら大分高くなっていると思いますが、これは川の学習のおかげだと思います。



いよいよ本会も最後となり、瀬川実行委員長からの挨拶から次期開催地鹿児島県の川内川流域ネットワークの中村氏へのバトンタッチが行われました。最後はRAC藤芳副代表理事の挨拶で閉会となりました。

■ 体験活動宣言

実行委員長 瀬川千代子

2日間お疲れ様でした。海田東小学校の金沢先生の川に学ぶ持続可能な発展型教育と言うことでいろいろとお話をいただきました。しかし、私たちはただ、聞くだけでなく繋ぐことが大切であります。今後、私たちは何をしていけばよいのか？ 今回は5つのテーマ「遊び」「生活」「環境」「防災」「賑わい」で全国大会を開催いたしました。また、この大会の中で未来へのメッセージや全国からの素晴らしい感動的な体験活動発表をしていただきました。その活動を実践し、私たちが未来へ繋いでいく事が大切であると思います。今回の全国大会の5つのテーマを踏まえたまちづくり、又、川のまちづくりを行うことも大切だと思います。また、安心安全の川に学ぶ体験活動も必要です。それにはまず、個人個人がPFDやスローロープを持つことから私たちは手をつけたいと思っています。「持続可能な発展型教育」と「地域の活動」を繋いでいくことを未来のメッセージとしていきたいと思っています。最後にRACの理念を読みあげます。



- 一つ、川に学ぶ体験活動は、感動する心を大切に、川と遊び学ぶ楽しさを伝えます。
- 一つ、川に学ぶ体験活動は、川への理解をふかめ、川を大切にする気持ちを育てます。
- 一つ、川に学ぶ体験活動は、ゆたかな人間性、心のかよった人と人のつながりを創ります。
- 一つ、川に学ぶ体験活動は、人と川が共存する文化、社会を創造します。
- 一つ、川に学ぶ体験活動は、川の力、活動にともなう危険性を理解し、安全へ意識を高めます。

■ 来年に向けての抱負

川内川流域ネットワーク 中村 周二

「ひーほー」子どもの頃から今まで川で遊んでいます。きっと、死ぬまで川で遊んでいると思います。来年の全国大会は鹿児島の特徴を生かした全国大会にしたいと思っています。鹿児島と言うとやはり焼酎が有名です。鹿児島の名産の焼酎を並べてお待ちしております。



ます。会場は川内市で開催予定です。みなさんの参加をお待ちしております。

■ 閉会の挨拶

RAC副代表理事 藤芳 素生

この2日間を簡単に振り返りたいと思います。「川に学ぶ体験活動とは何か？」昨日から参加していましたが、「体験」、「体感」、「気づき」、「自分たちの生きる力をどうやって伝えていくのか？」と言うことのお話だと思います。昨日の基調講演でも生きる力は自然体験から学んできた、障害児教育でも生きる力を子どもたちだけが学ぶのではなく集まった人たちや自分たちも学ぶことができたと言っていました。集中力、持続力、判断力、決断力については大人になってからも必要な力であると思います。川はそのような力がつくということを教わった気がします。



中越先生の昨日の学校の活動発表から、遊びに「気づき」があり、そこが大切だということや、最後のシジミの話の最後には「食べようね！」と言うことが印象的でした。

高校生のオオサンショウウオの発表についてもオオサンショウウオを調査して違いがわかってそのあとどうするの？と言うところで話しが終わっていますが、また、そこが印象的でありました。中越先生の話しで興味深かったのは東北、北海道は気候的に少し危険なことがあって大変だというお話がありました。RACの設立当初はどちらかと言うと北海道と東北で活動が活発で中心でした。南の方は遊ぶのに熱心で学ぶことまで感じなかった気がします。また、分科会でクラブを作るということでありましたが具体的な事例を踏まえて議論をしていると思います。今回は行政や市民団体の方々が参加していましたが分科会の議論を1時間であれだけまとめられるのはかなり難しいと思います。これも多くの方がいろいろな地域でいろいろと学んでいるのだと思っています。

2日間、広島の全国大会の実行委員会の方、いろいろな団体の方々に深く感謝をしております。来年は薩摩川内市で開催です。再来年のRACの全国大会の候補に立候補したい団体はありますか？ どしどし声を上げて欲しいと思います。

今日はありがとうございました。

》》 [第2部] エクスカーション① 世界遺産航路

13:00～／原爆ドーム前桟橋

第2部のエクスカーションとして、広島での水との付き合い・関わりを紹介させていただくために①世界遺産航路(平和記念公園～宮島) ②ひろしま川祭り(基町環境護岸)の2コースを設け、①については参加者に、②については、参加者及び市民に楽しんで頂ける場を設けました。

世界遺産航路では、平和記念公園から遊覧船にて出航し、川や海を眺め、篠笛や津軽三味線の演奏を楽しみながら宮島へと向かいました。宮島の大鳥居の前では、笙の演奏も披露し、ちょっとしたタイムスリップした感じでした。



遊覧船のり場の様子



船から見る広島を楽しんで頂きました



津軽三味線の演奏風景



厳島神社へ到着



伝統産業会館にてしゃもじ作りを体験



厳島神社と大鳥居



船上で海風にあたりながら景色を満喫



大鳥居へ参拝



歴史ある街並みを解説しながら散策



大鳥居の前に笙の音色を堪能

宮島につくと、伝統産業会館でしゃもじ作り体験をし、厳島神社参拝や焼き立てのもみじ饅頭をほおばったりと、短い時間でしたが、世界遺産を堪能しました。

帰路も遊覧船にのり、船から見える要所やその歴史、広島の特徴である雁木などを紹介しながら約1時間で平和記念公園に帰りました。

〔原爆ドーム～厳島神社〕 定員：40名

2つの世界遺産を結ぶ航路です。船上より大鳥居を参拝、厳島神社拝観やしゃもじ作り体験など、盛りだくさんの内容です。

》》 エクスカーション② ひろしま川祭り

10:00～／基町環境護岸

青い空、白い雲、燦燦と降り注ぐ太陽の光をあびて基町環境護岸（愛称：基町ポップラ通り）は、川を愛する人たちで賑わいました。

河川敷では、ストーンアートや水ロケット、ポニーの乗馬といった体験型のイベントのほかに午前11時から第5回広島ウッドストックコンサートが開催され、いろんなジャンルからなる8つのミュージシャン達が川祭りに華を添えていました。川面ではカヌーや遊覧船で楽しむ人、太田川特産の大粒のシジミ獲りをする人など、延べ約1,000人の参加者が川遊びを満喫していました。



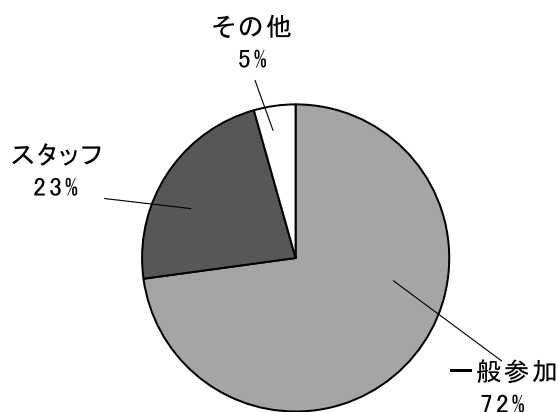
〔ひろしま川祭り〕 写真撮影：松浦 康高 氏

》》 アンケート集計結果

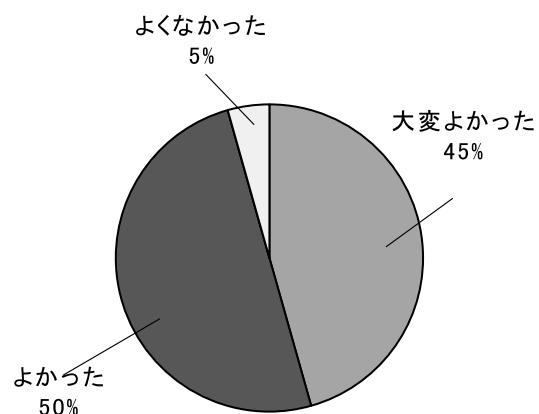
※回答者22名

会の実施にあたり、参加者からのアンケートを頂きました。回収率が悪かったのが反省点ではありますが、概ね好感触の結果が得られました。

I 参加スタイル

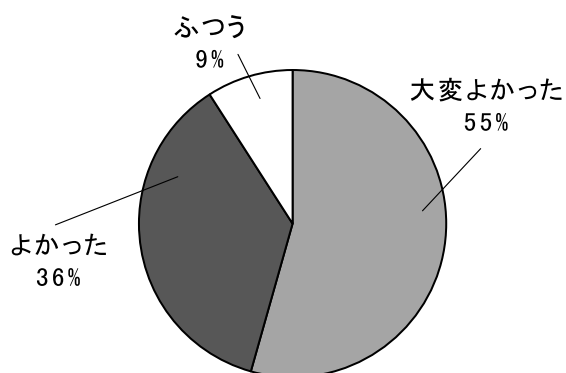


II 参加しての全体の感想

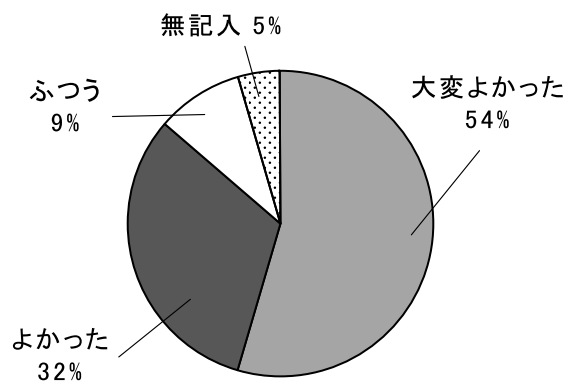


III 各セッションの取り組み

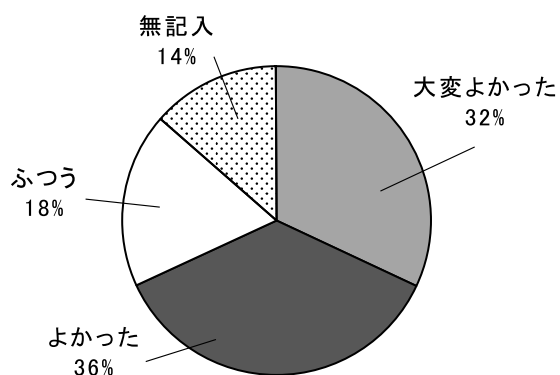
1. 基調講演



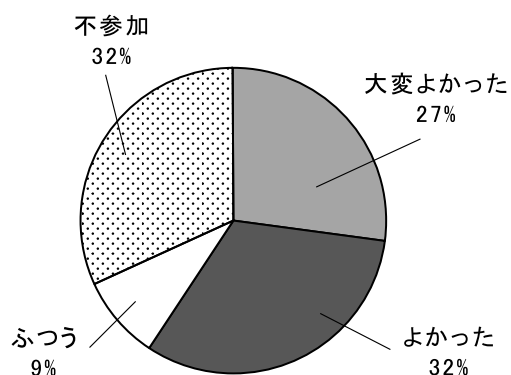
2. 川に学ぶ学校発表会



3. ポスターセッション

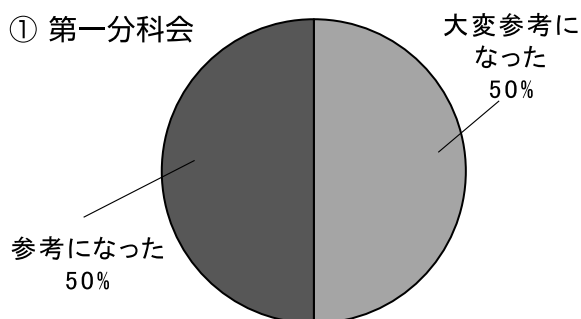


4. 交流会

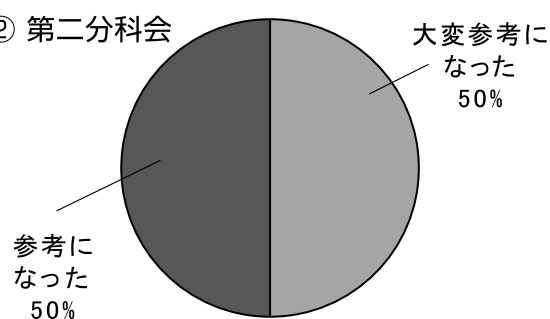


5. 分科会

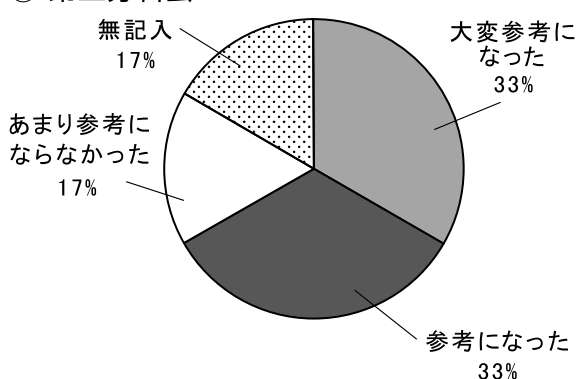
① 第一分科会



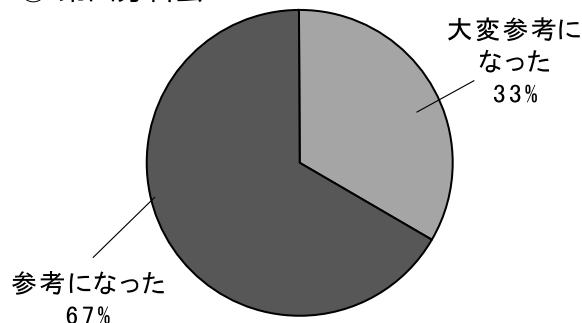
② 第二分科会



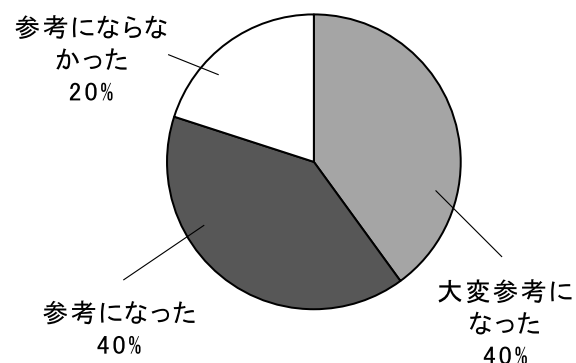
③ 第三分科会



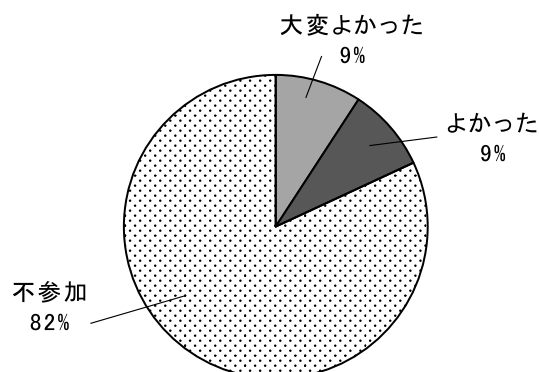
④ 第四分科会



⑤ 第五分科会



6. エクスカーション



» おわりに

このたび広島を会場として、全国大会を開催させていただきましたが、2日間での密なスケジュールの為、運営の不手際等もあったかと存じますが、皆様の多大なご協力によりまして、無事大会を終えることができました。御礼申し上げます。広島を川を昼夜の様々な場面でご紹介できたかと思ひます。本会を通じて益々、川での活動の大切さを強くしたところです。時代背景の変化によりこのような会の運営が大変になってまいりましたが、継続されていくことを強く願うと共に、次年度鹿児島での会が成功されますようお祈り申し上げます。

本会に関わり、ご協力・ご参加頂きました皆様に対して改めて感謝申し上げますと共に、本記録とさせていただきます。

資 料

»» 「川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま実行委員会」 規約

(名 称)

第1条 本会は、「川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま実行委員会」(以下)「実行委員会」と称する。

(目 的)

第2条 実行委員会は「川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま」を成功裡に実施するため、円滑な企画・運営を行うことを目的とする。

(事 業)

第3条 実行委員会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 基調講演、子ども発表会、活動事例発表会、分科会、全体会等の企画運営
- (2) 交流会の企画運営
- (3) 関連イベントの企画運営
- (4) その他 大会の企画運営に関わる事項

(委 員)

第4条 委員は関係河川管理者、地方公共団体、川に学ぶ体験活動協議会及び広島の流れをフィールドとして活動し当大会に参加する諸団体をもって組織する。

- (1) 実行委員長を置く。実行委員長はエコロジー研究会ひろしま事務局長をあてる。
- (2) 副実行委員長を置く。副実行委員長は川に学ぶ体験活動協議会代表理事を充てる。実行委員長に事故ある時は、副実行委員長がその職務を代行する。
- (3) 実行委員会に事務局長を置く。事務局長は実行委員長が指名する。

(監 査)

第5条 実行委員会に監査2名を置き、会計処理を監査する。

(委員会)

第6条 実行委員長は、実行委員会を招集し、その議長となる。

- (1) 実行委員会は次の事項を審議決定する。
 - ① 事業計画や予算・決算に関すること。
 - ② その他重要な事項に関すること。
- (2) 実行委員会の議事は、出席者の過半数により決する。同数の時は議長がこれを決する。

(運営委員会)

第7条 実行委員会に、運営委員会を置く。運営委員会は下記の事項を協議する。

- (1) 実行委員会に付議すべき事項。
- (2) 実行委員会の議決を要しない会務の執行に関する事項。
- (3) 実行委員会で決議した事項の執行に関する事項。
- (4) その他実行委員会が必要と認めた事項。

(事務局)

第8条 実行委員会事務局は、「エコロジー研究会ひろしま」に置く。

(会 計)

第9条 実行委員会の経費は次をもってあてる。

- (1) 参加費
- (2) 助成金
- (3) 寄付金、その他の収入

2. 実行委員会の会計、実行委員会発足の日から解散の日までとする。

(解 散)

第10条 実行委員会は、会計の最終処理を持って解散とする。

(雑 則)

第11条 この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営に必要な事項は、委員長が実行委員会に諮って定める。

附 則

1. 本規定は、平成20年11月14日の第1回実行委員会の議決をもって施行する。

大会チラシ

● おもて面



第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

大切なことを、
川からいっぱい学んできました!!

全国と広島に学ぶ活動団体の報告と実践活動をととして、
川でみんなが遊び、学び、交流する催しです。ぜひ、お気軽にご参加ください。

参加者募集!! 参加費無料 [交流会・世界遺産航路は参加費が必要です]
参加募集人数 350名 定員になり次第締め切らせて頂きます。締切日 8月10日 [月]

開催日 2009年 9月5日(土) ▶ 6日(日)
受付 11:45~ 開会式 12:15~ 受付 8:30~

開催場所 主会場 ▶ **中国新聞ホール** 広島市中区土橋町7-1




5日(土) 13:00~ [中国新聞ホール]

基調講演



「野遊びのススメ」

株式会社モンベル 代表取締役会長
辰野 勇氏

●プロフィール/1947年大阪府堺市生まれ。1970年に日本初のクライミングスクールを開校。1975年に登山用品メーカー、株式会社モンベルを設立。びわこ成蹊スポーツ大学客員教授、文部科学省独立行政法人評価委員。

6日(日) 13:00~

エキスカーショ

- (天候により中止される場合があります。あらかじめご了承ください。)
- ①世界遺産航路 [原爆ドーム~厳島神社]
定員40名/2つの世界遺産を結ぶ航路です。船上より大鳥居を参拝、厳島神社拝観やしゃもじ作り体験など、盛りだくさんの内容です。
- ②ひろしま川祭り [基町環境護岸]
コンサートや水 Rocket 教室、カヌー教室などの楽しいイベントをたくさん用意して、皆様のご参加をお待ちしています。

主催 ■ 第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま 実行委員会

共催 ■ NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会

後援 ■ 国土交通省、文部科学省、環境省、中国地方整備局太田川河川事務所、広島県、広島市、広島県教育委員会、広島市教育委員会、(財)河川環境管理財団、子どもの水辺サポートセンター、(財)リバーフロント整備センター、(社)日本河川協会、(財)河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、(社)中国建設弘済会、太田川流域振興交流会議、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、(株)デオデオ

協力 ■ 広島大学大学院国際協力研究科、広島経済大学、福山平成大学、中国・地域づくり交流会、NPO法人公共空間活用推進プロジェクト、ポップラ・ペアレンツ・クラブ、可部カラスの会、太田川いかだ下りカワニバル実行委員会、NPO法人ちゅうごく環境ネット、ひろしま緑づくりインフォメーションセンター、環境カウンセラーひろしま、広島県山岳連盟

(順不同)

ACCESS INFORMATION 会場周辺MAP



[お問い合わせ] >>> 第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま 実行委員会事務局 〒730-0051 広島市中区大手町1丁目1-27 VPOINT 2F TEL.082-240-3420

※この大会は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けています。

大会チラシ

うら面

第9回 PAC 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

第1日 9月5日(土)

第1部

- 11:45～▶ 受付 [中国新聞ホール]
交流会・エクスカーション・参加費徴収
- 12:15～▶ 開会式 [中国新聞ホール]
- 12:45～▶ ガイダンス [中国新聞ホール]
話 題 NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会について
- 13:00～▶ 基調講演 [中国新聞ホール]
演 題 「野遊びのススメ」
講 師 株式会社モンベル 代表取締役会長 辰野 勇 氏
- 14:00～▶ 川に学ぶ学校発表会 [中国新聞ホール]
発表者 広島県海田町立海田東小学校
[川と緑の海田東小物語]
広島市立高陽中学3年生 [東迫川のホタル生育調査]
広島県立国泰寺高等学校3年生
[オオサンショウウオ保全は水辺を守る～遺伝子研究と遺伝子音楽～(2008日本ストックホルム青少年水大賞受賞)]
コーディネーター 一ノ瀬 飛鳥
- 休憩 5分
- 15:00～▶ 全国川に学ぶ 体験活動発表[ポスターセッション] [中国新聞ホール]
団体の活動や発表内容をまとめたパネルを事前に作成し、ステージに提示して発表します。
- 17:00～▶ 総括・案内
- 17:10～▶ 第一部終了の挨拶
移動 ウェルシティ広島フォーシーズンまで移動(徒歩)

第2部

- 17:45～▶ 水辺の交流会 [ウェルシティ広島フォーシーズン]
参加費/3,500円
移動 終了後原爆ドーム前へ移動(徒歩)
- 18:30～▶ 水辺夜のイベント [原爆ドーム前 元安川テラス]
[船上コンサート] 安芸楽団(キーボード、フルート、ボーカル)
津軽三味線・篠笛
吉和神楽団/演奏:八岐大蛇
[船上シネマ]
20:05～
2作品上映
- 21:00～▶ 閉会挨拶

第2日 9月6日(日)

第1部

- 8:30～▶ 受付 [中国新聞社会議室701・703・704・706・707]
- 9:00～▶ 分科会
●第一分科会 サブテーマ「遊び」 701会議室
川と遊び、学ぶ楽しさを再発見。
●第二分科会 サブテーマ「生活」 703会議室
川と生活の関心の理解を深め、豊かな人間性や心の通った人のつながりの醸成。
●第三分科会 サブテーマ「環境」 704会議室
川との関わりを深め、大きな自然を育む川を未来に伝えていく社会づくり。
●第四分科会 サブテーマ「防災」 706会議室
川の持つもう一つの顔を知り、安全な川との関係の構築。
●第五分科会 サブテーマ「賑わい」 707会議室
川と人が共存する文化と賑わいの空間の創造。
- 10:00～▶ 分科会報告・全体会
分科会報告
総括/コメンテーター 福山平成大学 教授 小谷 寛二
- 10:55～▶ 休憩
- 11:05～▶ 未来へのメッセージ
演 題 「川に学ぶ持続発展型教育」
講 師 海田町立海田東小学校 校長 金沢 緑 氏
川に学ぶ体験活動 宣言
- 12:10～▶ 閉会式
次回候補代表挨拶
閉会挨拶 NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 藤芳素生
移動
エクスカーション①「世界遺産航路」参加者は現地(原爆ドーム前横橋)に移動
エクスカーション②「ひろしま川祭り」参加者・見学者は基町環境護岸へ移動

第2部

- 13:00～▶ エクスカーション①世界遺産航路 [原爆ドーム前横橋]
参加費5,000円(事前申し込み必要) 定員/40名
エクスカーション②ひろしま川祭り [基町環境護岸]
- 18:00 ▶ 帰着・解散 [原爆ドーム前横橋]

- 大会中の事故などについては、各自で責任をもって対処してください。
■現地には駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。
■各プログラムの開始時間は変更になることがあります。

下記の催しは事前に申し込みが必要です。申込書に必要事項をご記入の上、事務局までFAXでお申し込みください。

- ▶ 9月5日(土)17:45～
水辺の交流会
参加費/3,500円
- ▶ 9月6日(日)9:00～
分科会
参加費/無料
- ▶ 9月6日(日)13:00～
エクスカーション①
世界遺産航路
参加費/5,000円

申込書

個人・団体 (該当する方へ○をしてください)

FAX.082-240-3426

申込締切日
8月10日[月]

団体名	TEL	住所			
参加者個人名	性別	年齢	交流会	分科会(参加希望を一つだけ○)	世界遺産航路
	男・女		参加・不参加	第一・第二・第三・第四・第五・不参加	参加・不参加
	男・女		参加・不参加	第一・第二・第三・第四・第五・不参加	参加・不参加
	男・女		参加・不参加	第一・第二・第三・第四・第五・不参加	参加・不参加

■参加費は9月5日(土)受付にてお支払いください。■団体でのお申し込みでも参加者個人名をご記入ください。■交流会、分科会、世界遺産航路は、ご希望の項目に○をご記入ください。

» 大会チラシ

- 「ひろしま川祭り」 チラシ

雨天
決行

ひろしま川祭り

9月5日【土】原爆ドーム前の親水護岸

水辺夜のイベント

船上コンサート 18:30~19:00 安芸楽団(キーボード・フルート・ボーカル)
19:00~19:30 津軽三味線・篠笛

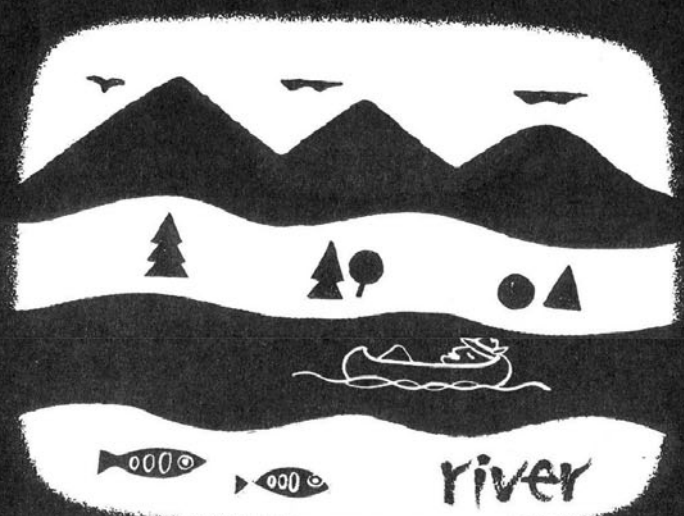
神楽 19:30~20:00 吉和神楽団 / 演舞: 八岐大蛇

船上シネマ 映画上映: シネマ・キャラバン
国際アニメーションフェスティバル参加優秀作品
20:05~ 『木を植えた男』(1987年アカデミー賞 短編映画賞受賞)
20:30~21:00 『つみきのいえ』(2009年アカデミー賞 短編アニメーション賞受賞)

オープンカフェ 18:30~21:00 (無料) ヒースキャンドル 19:00~21:00



水
の
都
こ
し
ち



川
は
喜
び

9月6日【日】基町環境護岸(中央公園西側河川敷)

《愛称: 基町ポップラ通り》

10:00 カヌー ~14:00 (無料)
遊覧船 ~14:00 (無料)
水口ケツト ~15:00 (材料費500円)
ストーンアート ~16:00 (無料)

11:00 第5回広島ウッドストックコンサート

11:00~11:20 川本高虎
11:30~12:15 安芸楽団
12:25~13:05 稲場ゆき&門田信
13:15~13:55 椎名まさ子

14:10~14:50 トミ藤田
15:10~15:50 The Bugbeas
16:10~16:50 JTT&Tony
17:10~17:50 上綱克彦

モーターパラグライダー・チビッコ釣り大会・川原料理・美味んずら屋・ジジミ探り・ホニー体験乗馬(1人500円)

川
に
送
ら
ば

いかだ下り写真展

主催 第9回川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま実行委員会 共催 NPO法人川に学ぶ体験活動協議会

後援 国土交通省、文部科学省、環境省、中国地方整備局太田川河川事務所、広島県、広島市、広島県教育委員会、広島市教育委員会、(財)河川環境管理財団、子どもの水辺サポートセンター、(財)リバーフロント整備センター、(社)日本河川協会、(財)河川情報センター、NPO法人自然体験活動推進協議会、(社)中国建設弘済会、太田川流域振興交流会議、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、(株)デオデオ

協力 広島大学大学院国際協力研究科、広島経済大学、福山平成大学、中国・地域づくり交流会、NPO法人公共空間活用推進プロジェクト、ポップラ・ペレンツ・クラブ、司郎カラスの会、太田川いかだ下りカワニバル実行委員会、NPO法人ちゅうごく環境ネット、ひろしま緑づくりインフォメーションセンター、環境カウンスラーひろしま、広島県山岳連盟 (財)ちのき森林公園

(注) 本大会は河川整備基金及び(社)中国建設弘済会の助成を受けています。

》》 大会当日プログラム

● 1面

第9回


みんなであそぼう!
川のファン

川に学ぶ体験活動全国大会
in ひろしま



大切なことを、
川からいっぱい学んできました!!



2009年9月5日[土] ▶ 6日[日]

受付 11:45～、開会式 12:15～

受付 8:30～

主会場 ▶ 中国新聞社7Fホール

広島市中区土橋町7-1

主催 ■ 第9回川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま実行委員会
共催 ■ NPO法人川に学ぶ体験活動協議会
後援 ■ 国土交通省、文部科学省、環境省、中国地方整備局太田川河川事務所、広島県、広島市、広島県教育委員会、広島市教育委員会、
(財)河川環境管理財団、子どもの水辺サポートセンター、(財)リバーフロント整備センター、(社)日本河川協会、(財)河川情報セ
ンター、NPO法人自然体験活動推進協議会、(社)中国建設弘済会、太田川流域振興交流会議、中国新聞社、NHK広島放送局、中
国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、(株)デオデオ
協力 ■ 広島大学大学院国際協力研究科、広島経済大学、福山平成大学、中国・地域づくり交流会、NPO法人公共空間活用推進プロジェ
クト、ポップラ・ベアレンツ・クラブ、可部カラスの会、太田川いっかだ下りカワニバル実行委員会、ひろしま緑づくりインフォーメ
ーションセンター、環境カウンセラーひろしま、広島県山岳連盟
協賛 ■ NPO法人ちゅうごく環境ネット

(順不同)

※この大会は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金、(社)中国建設弘済会の助成を受けています。

大会当日プログラム

● 2面

第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

第1日 9月5日(土)

第1部

11:45～ ▶ 受付 [中国新聞ホール]

交流会・世界遺産航路・参加費徴収

12:15～ ▶ 開会式 [中国新聞ホール]

式辞 実行委員長 瀬川千代子 / NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 代表理事 藤吉洋一郎
祝辞 国土交通省河川局流域治水室長 安田 吾郎
歓迎挨拶 広島県土木局長 大野 宏之 / 広島市都市活性化局長 片平 康

12:45～ ▶ ガイダンス [中国新聞ホール]

話題 NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会について NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 事務局長 斉藤 隆

13:00～ ▶ 基調講演 [中国新聞ホール]

演題 「野遊びのススメ」
講師 株式会社モンベル 代表取締役会長 辰野 勇氏
1947年大阪府堺市生まれ。1970年に日本初のクライミングスクールを開校。1975年に登山用品メーカー、株式会社モンベルを設立。びわこ成蹊スポーツ大学客員教授、文部科学省独立行政法人評価委員。

14:00～ ▶ 川に学ぶ学校発表会 [中国新聞ホール]

発表者 広島県海田町立海田東小学校 [川と緑の海田東小物語]
広島市立高陽中学3年生 [奥迫川のホタル生育調査]
広島県立国泰寺高等学校3年生 [オオサンショウウオ保全は水辺を守る～遺伝子研究と遺伝子音楽～
(2008日本ストックホルム青少年水大賞受賞)]
コーディネーター 一ノ瀬 飛鳥 講評 広島大学大学院国際協力研究科教授 中越 信和

休憩 5分

15:00～ ▶ 全国川に学ぶ体験活動発表[ポスターセッション] [中国新聞ホール]

団体の活動や発表内容をまとめたパネルを事前に作成し、ロビーに提示して発表します。
発表団体 日野川流域交流会、NPO法人鶴見川流域ネットワーク、九州中央山地自然学校、岩尾内ダム水源地域ビジョン推進会議ASOVI、TERA子野アドベンチャー、川内川流域連携ネットワーク、新町川をきれいにする会、太田川いかだカワニバル、広島市立五日市観音小学校、可部カラスの会、水の都ひろしま
コメンテーター 広島大学大学院国際協力研究科教授 中越 信和

17:00～ ▶ 総括・案内

17:10～ ▶ 第一部終了の挨拶

移動 ウェルシティ広島フォーシーズンまで移動(徒歩)

第2部

17:45～ ▶ 水辺の交流会 参加費/3,500円 [ウェルシティ広島フォーシーズン(厚生年金会館)]

全国の川活動エピソードの交流をしましょう。

19:15 ▶ 終了

移動 終了後原爆ドーム前へ移動(徒歩)

18:30～ ▶ 水辺夜のイベント [原爆ドーム前 元安川テラス]

[船上コンサート] 安芸楽団(キーボード、フルート、ボーカル)、津軽三味線・篠笛、吉和神楽団 / 演舞: 八岐大蛇
[船上シネマ] 映画上映: シネマ・キャラバン
20:05～ 2作品上映

21:00～ ▶ 閉会挨拶

»» 大会当日プログラム

● 3面

第2日 9月6日(日)

»» 第1部

8:30～ ▶ 受付

[中国新聞社 会議室701・703・704・706・707]

9:00～ ▶ 分科会

- **第一分科会 サブテーマ「遊び」** 701会議室
川と遊び、学ぶ楽しさを再発見。
- **第二分科会 サブテーマ「生活」** 703会議室
川と生活の関係の理解を深め、豊かな人間性や心の通った人のつながりの醸成。
- **第三分科会 サブテーマ「環境」** 704会議室
川との関わりを深め、大きな自然を育む川を未来に伝えていく社会づくり。
- **第四分科会 サブテーマ「防災」** 706会議室
川の持つもう一つの顔を知り、安全な川との関係の構築。
- **第五分科会 サブテーマ「賑わい」** 707会議室
川と人が共存する文化と賑わいの空間の創造。

10:00～ ▶ 分科会報告・全体会

分科会報告
総括／コメンテーター 福山平成大学 教授 小谷 寛二

10:55～ ▶ 休憩

11:05～ ▶ 未来へのメッセージ

演 題 「川に学ぶ持続発展型教育」
講 師 海田町立海田東小学校 校長 金沢 緑 氏
川に学ぶ体験活動 宣言 実行委員長 瀬川千代子

12:10～ ▶ 閉会式

次回候補地代表挨拶
閉会挨拶 NPO法人川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 藤芳素生

移動

エクスカーション①「世界遺産航路」参加者は現地(原爆ドーム前棧橋)に移動
エクスカーション②「ひろしま川祭り」参加者・見学者は基町環境護岸へ移動

»» 第2部

13:00 ~18:00 ▶ **エクスカーション①世界遺産航路** **参加費5,000円(事前申し込み必要)**

[原爆ドーム前棧橋]

厳島神社と原爆ドーム、二つの世界遺産を結ぶ航路を体験します。

定員／40名

10:00 ~17:00 ▶ **エクスカーション②ひろしま川祭り**

[基町環境護岸]

水辺のコンサートやカヌー教室等、川で楽しく学び遊ぶイベントを体験します。

- 現地には駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。
- 各プログラムの開始時間は変更になることがあります。

大会当日プログラム

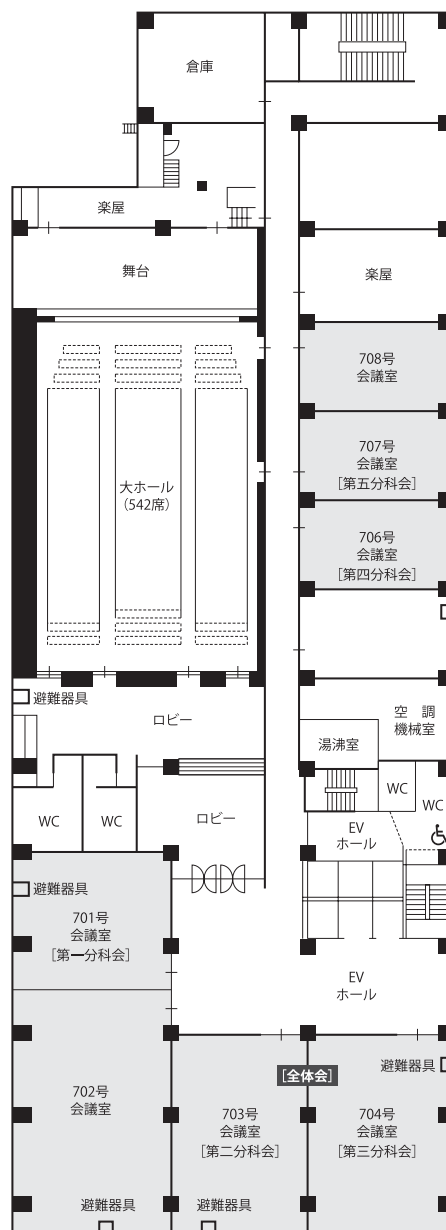
● 4面

会場周辺MAP



フロアMAP

主会場／中国新聞ホール(中国新聞ビル7階)



川に学ぶ体験活動全国大会は、
「川に学ぶ体験活動」の全国での活動報告と
開催地域での活動報告をととして
全国で川の活動をする
団体・個人が交流する場を提供します。
開催地の川に学ぶ活動に参加して
川に親しむ機会を提供します。
子ども達の川での活動を支援し、
子どもの水辺の安全教室や
指導者の育成の場を提供します。
これにより川に学ぶ体験活動の指導者の技術向上と
参加機会の拡大を目指します。

第9回川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま実行委員会事務局
〒730-0051 広島市中区大手町1丁目1-27 VPOINT 2F TEL.082-240-3420

2009年(平成21年)9月6日(日曜日) 第1版 第1面

河川に親しんでもらうための催し「川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま」が5日、広島市で始まり、県内の小中学生や高校生らが日頃の研究成果を発表した。日の暮れた後、広島市中区の元安川の川辺で廿日市の吉和神楽団が神楽「八岐大蛇」を上演、迫力ある舞で集まった人々を魅了した。

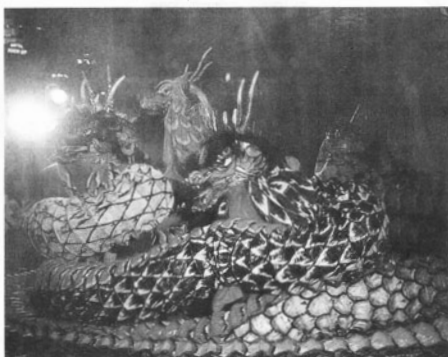
中区土橋町で開かれた大会では、広島市立高陽中の生徒らが地元の高陽川の上、中、下流域のどの場所にホタルが多く住むかについて

の調査について発表。エサとなるカワニナが多くいる中流域にホタルが多いという結果を示し、「身近な自然を大切にしたい」と訴えた。海田町立海田東小の児童は瀬野川などの上、中、下流域に住む生き物について、県立広島国楽寺高の生徒はオオサンショウウオについての、研究成果をそれぞれ披露した。

大会は太田川河川事務所と県や市などで作る実行委が主催。6日は川と「生活」「環境」などのかかわりをテーマに分科会が開かれる。

迫力 神楽の舞

元安川 川に学ぶ大会で披露



迫力ある動きをする八岐大蛇（5日午後7時54分、広島市中区の元安川で）

●読売新聞 平成21年9月6日



中国新聞 第1版 第1面 2009年

遊んで学んだ 川の環境保全

広島 小中高生が体験報告

川での遊びや体験を通して環境保全について考える「川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま」が5日、広島市中区の中国新聞ビルで開かれた。国の特別天然記念物のオオサンショウウオの遺伝子を研究している国楽寺高（中区）の生徒や、小中学生が研究や体験を

報告した。同高の理数ゼミ生物班の2年生6人は、研究でオオサンショウウオを適した生息地に放流できよう、研究を続けたい」と話した。海田東小（広島県海田町）の児童と高陽中



オオサンショウウオの遺伝子研究について発表する国楽寺高生徒

●中国新聞 平成21年9月6日

（安佐北区）の生徒は、川でのポイント集りやホタルの生息調査などに参加した。中日もある。NPO法人川に学ぶ実行委員会の主催で、約200人が参加した。大会は6日もある。地方整備局太田川河川区の元安川川岸では水辺で楽しむ秋のイベントが開かれた。（水井友浩）

第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

[2009年9月5日(土)・6日(日)]

第9回 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま実行委員会

[事務局]

〒730-0051 広島市中区大手町1丁目1-27 VPOINT 2F
TEL. 082-240-3420 FAX. 082-240-3426

第9回 RAC 川に学ぶ体験活動全国大会 in ひろしま

川に学ぶ体験活動の理念

- 一、川に学ぶ体験活動は、感動する心を大切に、川と遊び学ぶ楽しさを伝えます。
- 二、川に学ぶ体験活動は、川への理解を深め、川を大切にする気持ちを育てます。
- 三、川に学ぶ体験活動は、ゆたかな人間性、心のかよった人と人のつながりを創ります。
- 四、川に学ぶ体験活動は、人と川が共存する文化・社会を創造します。
- 五、川に学ぶ体験活動は、川の力、活動にともなう危険性を理解し、安全へ意識を高めます。



※この大会は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けています。